

---

# マチ子さん、見えない。

Masa Kumagai

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マチ子さん、見えない。

### 【Zコード】

Z9345P

### 【作者名】

Massa Kumagai

### 【あらすじ】

町田マチ子さん15歳、ふつうの高校一年生になりました。幸せいっぱい胸少し。唯一の悩みは「人よりちょっと見えない」能力があることだった。どきどきの初登校 しかし二十一世紀が丘高校は生徒も先生もヘンテコな連中ばかりだった。よかつた、頭がおかしいのは自分だけじゃないんだ よね？ はず。たぶん。

## 01話 初登校からマイナス五分後（前書き）

一日一話更新を目標としたハイパーナンセンス学園ストーリー（予定）。この小説は舞台、キャラクター、ストーリーなど、すべて即興で書かれています。もちろん今後どういった展開になるのかはわたくしにもわかつていません。作者の綱渡りっぷりも含めて楽しんでいただければと思います。

## 01話 初登校からマイナス五分後

頭がおかしいのはわたしだけじゃない そう気づいたのは登校初日、校舎に到着してからマイナス五分ばかしたったときだった。つまり、わたしは敷地に足を踏み入れてもいいない。

自宅から高校まではチャリンコで十五分。特別に改造を施した愛用のママチャリ ブレーキがなかなか効かない 号にまたがり、わたしは県道をすいすい走る。正門へつづく並木通りが遠目に見えるころになると、すれちがう生徒も多くなつた。おお、同じ制服の女子。ひとりぼっちでぎくしゃくして、背中に「わたしは新入生です。とても緊張しています」と張り紙でもしているような歩き方だ。男の子が数人、体を折り曲げなにやら爆笑しながら完全に歩道をふさいでいる。あちらさんも新入生なんだろうかと思いながら、いつたん車道に出ですいーと追い抜く。

いつもの感覚を頼りに、並木通りの交差点十メートルくらい手前からブレーキをかける。キキーッ、キュイキュイキュイキュイ音だけは激しい。だがチャリンコも初登校で緊張しているのか、わたしの知らないうちに ブレーキがぜんぜん効かない 号にレベルアップしていたようだつた。

「わわわわわわ

」

周囲の生徒がいっせいに顔を向け、わたしと暴走自転車に注目する。「あわわわ

あわあわ言いつつもわたしは冷静だった。慌てず騒がず、くいつと下半身をひねり、後輪を横滑りさせてセルフブレーキをかける。

仰天して体を固まらせている女の子集団の手前十五センチのところに停止した。みんなぽかんと口を開け、なんだこいつはという田で同時にわたしを見上げた。

団らすもお友達距離に侵入してしまったので、わたしはひきつる顔に無理やり笑みを乗せ、ひょこっと会釈した。

「どうも。おはよう、です？」これだけでは足りないような気がして、往年のいかりや長介的においつすと右手を挙げた。「そして あの、はじめまして？」

ヘルメットみたいなボブヘアの子が挨拶を返してくれた。「あい、おはよう、です？」

なんでお互い疑問系になつたのかはよくわからない。急いでチャリンコを飛び降りると、愛車 痴漢 号のサドルにスカートの端がひっかかった。わたわたしながらスカートを救出し、整え、振り返らないようにしながら駆け足で正門へ向かつた。くすくすと笑う声が聞こえてくる。わたしは適当なところで立ち止まり、朝のエクササイズでどきどきする心臓の音を聞きながら顔を上げ、桜満開の並木道を見渡した。そして眉をひそめた。

並木道は枯れ木道だった。ねじくれた桜の枝はどれも、花びら一枚くつつけていない。冬の寒々しさのままだ。

なんだかがっくりきて、首がつま先方に引き寄せられていく。みんな気にしていない様子だった。振り返ると、角のローソンがなくなっていた。入試のときはあつたはずなのに。あのときは帰りに脱力しながらピノを買って帰った。どうでもいいか。

そしてわたしはどうにか正門をくぐり、初登校マイナス五分から五分後、県立二十一世紀が丘高校の生徒としてはじめて校舎に足を踏み入れた。

ところで、二十一世紀が丘とはなんなのか。ずっと疑問に思っていた。この高校の名前をつけた人は、たぶんわたしより頭がおかしかったんだと思う。親しみを覚えたから受験したわけではないし、実際正反対だらうと思う。この名前はちょっと行き過ぎてる、みたいなところがあるけど、わたしは後ろ向きに歩きたいタイプだった。

そういえば 三分かけて下駄箱を探し、バッグから上履きを取り出し、人もまばらなホールを見まわす。緑色の掲示板が目にとまる。なんの掲示もなかつた。

わたしの教室はどこだ？

ぐるりと一回転する。馬のしっぽが遅れて顔をぴしゃっと打ちつけた。だれが教えてくれるんだろう？ オネエは？ 初登校はいっしょに、って言つてたのに、三日前から連絡が取れないでいる。

白衣を着た先生がとおりかかった。そこでわたしは眉尻を下げて唇をとがらせ、困つてるんですオーラをめいっぱい出しながら上目遣いに見つめた。先生は気づきもしない。つま先をにらみつけながら早足でとおりすぎる。わたしは驚きのあまり思わずふつう顔に戻り、振り返つた。かわいそう系の表情が通じなかつたのは十六年生きてきてこれで二度目だ。一度目は十四歳の夏で、相手はたしかだれだか忘れてしまつた。

そんなことまでいでもいい。

「すじません」白衣の背中に声をかける。「クラスがどこだかわからないんですけど」

先生はスリッパをキュッと鳴らして立ち止まり、サッと振り向いた。七三分けの頭に、ついつらと色の入ったメガネをかけている。

そして「はあ?」といつ顔をした。「自分の家を忘れてしましたんですが」とたずねられたときみたいに

「クラスがわからない?」

「やうなんです」掲示板を指す。「ふつう、いつこったところに張り出されたり」

「ふつうは言わねなくともわかるはずなんだけじね

わかるわけないだらう。

先生は気が滅入りそうになるようなため息をつき、スリッパをキュッキュッと鳴らしてサッサッと一步近づいてきた。次の瞬間中指を立てた右手が顔のまえに来てメガネをすり上げ、仕事が終わるといつのまにか手は白衣のポケットに収まっていた。なんでも動作をショートカットせずにはいられないタイプのようだ。

「じゃ、何組がいい?」動作と同じくらい早口でめんべくせうつと言つた。「どこがいい? 好きにすればいいじゃないか」

「はーい?」あまりに理不尽な回答に、思わず友達用の返事を

してしまった。「ええ?」

「はやくしてくれ。急いでるんだ」もつ歩き出しそうな勢いだった。

「あと三秒

「三秒?」

「一、一、ハイおしまー」速攻でカウンントダウンが終わった。メガネが勝手にすり上がる。腕の動きが速すぎて見えないのだ。「じゃ

「待つて待つて待つて」「なれなれしく腕をつかみかけ、思い直してひつこめる。だがそうでもしないと突然ワープしてしまいそうだ。なんでもいいから答えよ。」「一組がいいです」

「いちくみー?」眉をメガネのフレームから離陸させ、なぜか小バカにしたように言った。「どうして一組なの?」

「なんでも一番が好きだからです」嘘をつく。

「そんなバカな話は今まで聞いたことが

と、先生は急に通信が入ったようにサッサッと左右に顔を向けた  
と思つたらまつすぐこちらを見下ろしていった。

「もうダメだ。間に合わない。じゃ」

わたしの予想は的中した。先生はポンという音と親父コロン混じりのそよ風を残し、ワープしてどこかへ行ってしまった。瞬間移動できる人間に出会ったのははじめてだった。

呆然と立ちつくす。このまにかホールにはだれもいなくなっていた。時計を見る。あと二、三分でホームルームの時間だ。わたしは階段を駆け上がった。そしてできる限りの瞬間移動で校舎じゅうを駆けずつまわり、やがてやく一年一組のクラスを発見した。

## 0-1話 初登校からマイナス五分後（後書き）

ところが、前書きにも申し上げましたが今後のこととはまったく考えていません。その場のひらめきでいちばん笑えるものを選んで書いています。どんどん矛盾していくんだろうな……。とりあえずはじめたばかりではありますが、コイツはおもしろくなりそうだぜ！と思われましたら「意見」・感想などお気軽にどうづれ。泣いて喜びます（予定）。

すでにホームルームがはじまっていた。音を立てなによつにそいつと正面のドアを開ける。

「ガラガラガラ…」ドアが言つた。『ガラガラ ガツーン…』

言つだけじゃなくドアは途中からわたしの手を離れ、勝手にものすごい勢いで開け放した。『あつ 』と言つてほかになにか悲鳴を上げたほうがいいんじやないかと考えているうちにドアは反対側の留め具へ全力でぶつかつた。

口で言つたんじやない本物の効果音がとんでもない音を響かせた。一年一組のクラスメイト全員が、チンピラのように登場したわたしへ一斉に振り返つた。先生も言葉を止めてわたしに顔を向けた。老朽化したドラえもんみたいな顔で、髪の毛はとても少なかつた。

「あの 」体が勝手に会釈した。『どつも』

だれも反応しなかつた。

「えーと 」

視線から逃れたくてなんとなく黒板の上を見ると、まるい時計があつた。長針が八時十五分と十六分のあいだを行つたり来たりしている。どちらにしようか迷つていてるみたいだった。

ついに先生が口を開いた。アホの坂田へ進化する途中と言つたほうが正確かもしれない。

「遅刻」

と勢い込んで言いかけ、急にサッと振り向いて時計を見上げた。なにこゝとかとわたしも顔を上げた。

長針はなぜか八時十一分に戻つていた。

「じゃないのか」

先生は頭頂部をこぢらに向けたまま固まつてゐる。

「やつですよ」よくわからないが時計に助けられた。じかくさ紛れに教室へ侵入し、席のほうへすすすすと蟹歩きで進んだ。「まだ四分もあるじゃないですか」

「 ですよね？」こちあう確かめる。

「まあ、たぶん」先生は首をひねりながらゆつくりと前へ向いた。「時計がそう言つんだから、まちがいないだろ?」時は幻想だとう者もいるが、わたしはそんなことは

わたしはぎょっとした。髪の毛がとても少ない頭の上で、時計が小バカにするように三つの針ぜんぶをぐるぐる動かしたりびしつと十四時二十三分で止まつたりだらしない感じで5と7のあいだをぶらぶら揺れ動いたりしている。先生はだるまさんが転んだ的なアクションでふたたびサッと振り向いた。時計はすばやく反応して針を元に戻した。

納得いかなそうな表情で向き直る。わたしはとりあえず空いてい

る席へ腰かけた。並びからいつても町田の「ま」のあたりなので、たぶんまちがいないだろう。クラスメイトの視線をびりびり感じつつ、カバンを机に置いてなんとなく黒板を見た。先生は富田という名前らしい。白チョークを横に使って、これ以上は不可能なほどめいっぱい大きく書かれている。ルビまで振つてある。

富田先生は息を取り直したよつに教卓へ手を突き、教室を見まわした。

「というわけで、約一名遅れて来たのでもう一度自己紹介をします。富田とします。豊かな富に田んぼの田」じ丁寧にひと文字ずつ指さして説明する。「ですが、下の名前は教えません。まだ友情が芽生えていませんから」

「一、二ため息が聞こえてきた。あの黒板の様子だと、もつ百回くらい自己紹介をしている様子だった。

「 みなさん、時間は守りましょう」

はあーつ。

「えー、そしてみなさんはこれから三年か四年、高校生活を送ることになるわけですが、まあその 」

渋い表情で言葉を詰まらせる。んーとうなり、急になにかにとり憑かれたように表情を変え、パツと顔を上げた。

「みなさん、時間は守りましょつ」はじめに戻つた。「時間だけはきつちりと守つてください。ルーズな人は嫌いです。日本をダメにします。ちなみにわたしは富田とします。豊かな富に田んぼの田。

そしてみんなさんはこれから三年か四年、高校生活を送る」とになるわけですが

先生の時間のほうが壊れているみたいだった。無限ループの予感に教室がざわつき出す。壁掛けの時計は「『愁傷様』」といった感じで長針をぐるりと一回転させた。

わたしの華々しい登場はすでに過去のものになつたようなので、少しリラックスして教室を見まわしてみた。わたしの中学は合併話も持ち上がるほど小さな学校だ。ひととおり顔を眺め、クラスのみんなとは別の意味でため息をついた。お友達どころか知つた顔もない。なんとかするしかないんだろ？ 友達って、どうやってつくればいいんだっけ？

中学一年のころを思い出していくと、一軒となりの男の子と田があつた。にやにや笑いながら前の席の子を突つつき、わたしのほうへ顎をしゃくる。突つつかれたほうはぎょろりとした田をさらに広げ、実際にうれしそうにじつじつと笑い、急に真顔になつて前に向き直つた。にやにやのほうはずつと無遠慮な視線を向けつづける。

と、急にお尻が持ち上がり、イスがぐにゃりと生物的な柔らかさに変化した。つづいて一の腕を両方ぐつと捕まれる。わたしはぞわぞわして「ひえっ」と言った。自分の腕を見る。だれもなにもつかんでいなかつた。スカートをたくしてイスをのぞきこむ。座面とわたしのあいだに空氣があつた。というか、わたしは浮かんでいた。

そんなバカな。パニックを押さえつつ、お尻の感触に神経を集中させる。そして背もたれのふにやふにやした感触。これってなんとなく覚えがある。これはちょうど。

「ちょっとー？」イスが女の子の声で言つた。「いいかげんどうして  
つたら！ いつまであたしの脚にすわつてるつもり？」

## 02話 一年一組、四次元先生（後書き）

時間が厳しかった……。一話目でこんな調子じや先が思いやられます。

## 03話 みんな知ってる体重三十九キロ

見えない手がわたしの脇腹をむんずとつかんだ。手はちょうど肋骨のあいだに指先らしきものを突き立て、わたしを持ち上げた。脇は弱いので普段は触られるだけで身もだえしてしまつところだけど、すでに客観的に見てイスにすわった体勢で空中浮遊しているので友達につんつんされたときみたいに「うへうへ笑うのはどうかと思った。友達でもないし。

というか、だれなんだ。

「あんた、体重三十九キロだからって人の膝にすわってもいっていいの？」

口調は厳しかったが、透明の女の子はわたしを机のわきの床に優しく着陸させてくれた。わたしは急いで振り返る。やつぱりなにもなかつた。だけどなにかを感じる。電車に急いで駆け込んだ拍子に知らない人のお友達距離へ近づいてしまつたときに発せられるオーラだ。スプレーすれば怒りに満ちた赤いもやもやが浮かび上がりそうだった。

天板の上のカバンがすーっとスライドし、わたしの足もとに落ちた。

「三十九キロ？」富田先生が口をはさんできた。「ちゃんと」と飯食べてるのか？

「三十九キロっていうと

だれかが言つた。わたしは振り向き、声の主を見た。遅れて馬のしつぽが鼻先を打つ。いつもどおり下ろしてくるんだつた。二軒となりのつんつん頭のにやにや男がぽかんと口を開けてわたしを見上げ、脳の中でなにやら計算を行つてゐる。

「名前は町田だ！」

実にうれしそうに頭を持ち上げ、に一つと笑つた。この子は体重から人の名字が判別できるらしい。

「ちょっと待つて」人の体重をぴたりと当てられる見えない女の子が言つた。「いま三十八・ハキロになつた。緊張で発汗したから」

「（）飯食べてる？」先生がふたたび言つた。

「下の名前も当てられるよ。ヒップは何センチ？」体重を当てられる子が言つた。「スリーサイズで幼稚園のあだ名まで」

「ねえ、（）はんはーーー？」

先生が駄々つ子のように繰り返した。わたしは急いで先生へ向き「食べてます」と言い、姓名判断男がスリーサイズを測ろうと立ち上がりかけたのを見て思わずあとじさり、体重透明女に背中をぶつけた。「ちょっと！」

だんだんわけがわからなくなってきた。右も左も定かではなくなり、わたしは必死で自分の席を探し、教室を見まわした。壁掛けの時計が生徒たちをもてあそぶように下校の時刻になつてみたりしている。黒板には巨大な「富田」の文字。なんだかあれがいちばんまともなような気がしてきた。

「ガラガラガラ！」教壇側のドアが言った。そして開いた。「実時間ですでに入学式がはじまってるんだが」

と言つて顔を突き出してきたのは、ホールで遭遇した白衣メガネの先生だった。正視できないほど恐ろしい勢いで頭を振りまわして教室を見やり、わたしのほうを向くと首のギアに異物がはさまったみたいなぎぎつという音を立てて制止した。

しばらく見つめ合つ。先生が口を開いた。

「『』飯食べてゐる？」

03話 みんな知ってる体重三十九キロ（後書き）

話が進んでないぞ！

## 04話 アヤたん、わからない。

いま何時だかわからないがとにかく入学式がはじまつているようなので、みんなめいめいに立ち上がった。富田先生はまだにか言ひ足りないのか納得いかない表情で教卓にしがみついていたが、やる気のない牧羊犬のようしぶしぶ生徒を廊下に追い立てはじめた。

わたしは床に落とされたカバンを拾い、いじめられっ子みたいな気分になりつつ廊下へ向かうみんなをかきわけ、教室の後ろのロッカーへ向かった。どうでもいいけどご飯は三食きちんと食べている。これからは食べ過ぎに注意しないといけない。

さつきのハプニングで、わたしはすっかり自信をなくしていた。落ち込むとかそういう意味ではなく、自分の感覚が信じられなくなっていた。生まれ落ちたときから自分がふつうとちがうのはわかつていた。理由はわからないけど、わたしにはなにかが見えない。なにが見えないのかはわからない。なんせ見えていないのだから。なにかが見えなくて困つたこともなかつた。なかつたと思う。たぶんもしかしたら困つたことを起こしていったのかもしれない。自分が気づいていないだけで。でも見えていないのだから、やっぱりわたしが気づけるはずはないのだった。

わたしは皿を皿のように開いて前方を凝視し、ウサギのようにな手を突き出してひょこひょこと歩いた。みんなはあらかた廊下に出たので（たぶん）、さいわいだれとも激突してひっくり返るようなことはなかつた。ロッカーはあつた。わたしのロッカー！ こんなにうれしいと思つたことはない。しかも扉もなんなく開いた。しゃべりもしなかつた。すごい。ありえない。感動のあまりほおずりしそうになつた。

二十四時間テレビより意味不明な感動の嵐に巻き込まれていてるうち、今度はむしょに時間をたしかめたくなつた。カバンをひつかきまわして携帯電話を取り出す（ウイルコム）。うさぎが餅つきしている壁紙の左上に、八時四十五分のデジタル表示があつた。現実時間を知ることができ、わたしはほつとした。メールの着信は三百四十七件あつたけど。

「富田先生のせいなの」

いきなり話しかけられ、わたしはロッカーの扉に指をはさみかけた。慎重に閉じてもつと慎重に振り向く。声はこころころした女の子のものだつたが、実際は緑色の肌をしたトカゲ人間かもしれない。

「つまり、ホームルームが入学式より先にはじまつているつてことがね」

わたしより頭半分くらい小さかつたが、ふつうの女の子だつた。お餅のような真つ白い肌にかわいらしい丸顔、ヘルメットみたいなボブヘアだつた。

「富田先生の能力のひとつね。周囲の時間をぐだぐだにしてしまう能力。自分も含めてつてところが、まああの人らしいんだけ」

とりあえずわたしは答えた。「へえ」

それにして、初対面なのにものすごい親しさのこもつた口調。あ。そういえばこの子、見覚えがある。それともデジヤブーだろうか。

「行かないの？ 教室を出たら現実時間に戻るから、急いだほうがいいよ」

思い出した。チャリンコで激突しそうになつた子だ。お互にドリフ的な挨拶を交わした。

女の子はわたしの手を握り、「行こ」と書いて背中を向け、廊下に、「三歩駆け出した。

「わわわわ」わたしはよろめいた。「待つて待つて。カバンカバン」

「一度言わなくともわかるよ」立ち止まって振り向いた。にっこり笑つてつづける。「マチ子わん

「どうして知つてゐるの？」

「あたしはアヤ」

「もしかしてスリーサイズを測つた？」

「アヤたんつて呼んでちょ」

お互い噛み合わない会話がひととおり済むと、わたしはカバンをロッカーに入れてアヤたんと廊下に出た。当然というか、ほかのみんなはとっくに消えていた（たぶん）。わたしたちのほかにはだれもおらず、しんと静まりかえっている。

廊下を進みながら話す。アヤたんはニックネームの示すキャラクターどおり、ぴょんぴょん飛び跳ねるようにわたしの右側を歩いた。

わたしをのぞきこんでたずねてくる。「町田マチ子さんへんな名前。ハイクションこしてももうかうと考へてもいいんじやないのかな」

名前のことは触れてほしくない。わたしは遙るよつて言った。「中学はどこなの?」

「ああ」

予想外の答えが返ってきた。「じゃあ、名字は? 教えてよ

「ああ」

「ああ。」

「なんでもこよ。あたし、名字は決めてないんだ」  
わたしはかぶりを振った。追求してもいつもが混乱するだけだと思つ。

「でも、ほかのことならなんでも聞いて。なんでも知つてゐから」  
うなづく。「あの女がを出した男の子、田澤つていつの

「やつ」

「あの子はまったく関連性のないふたつの事柄を結びつける能力を持つてる。体重と名前つてふつうせんせん結びつかないでしょ? ゆえにあの子こなはわかつたつてわけ」

理解できない。

「田澤は生まれてこのかた女の子と付き合つた」ことがない

「セツ」ジツでもこいけど。「ジツ」そんなんに詳しいの?.

「どうして?」

「だつて初日なのに、知り合つて何年も経つたみたいな言いかたで

」

「そう、それがあたしの能力」うん、と力強くうなづく。「あたしは対象をひと目見ただけで、何年も付き合つていいたことができる。簡単に言つと、生まれながらの情報通ね」

たしかにそういう噂ばかり詳しい子はクラスにひとりはいる。だがアヤたんの場合はそんじょそにらの情報通とは次元がちがいすぎるようだった。

階段に差し掛かり、ふと思いついた。

「やついえば、わたしが誤つてすわつてしまつた子

「あの子? あれは

「わからぬ?」

「体重をぴたりと当たられること以外はね

そしてアヤたんは階段を下りるあたしの側面に「きなりがぱつと抱きついてきた。ふにやりとした胸が一の腕にからみつく。せつきの話じやないけど、スリーサイズは少なくともわたしよりダイナミックなようだつた。

「こっしょにやらない？」

「なにを？」

「解明よ。あたし、不安なの。他人のことがわからない？ 頭がおかしくなつちゃつたのかも。だから入学式が終わつたあとで、あの子の秘密を探るの。授業そつちのけで。それにはマチ子さんの能力が必要なの」

アヤたんはむーんとうなつて情けない顔で眉を下げ、下唇を突き出してわたしを見上げた。

「お願いお願いおねがーい」

## 04話 アヤたん、わからない。（後書き）

学式とホームルーム、たぶん入学式のほうが先なんじゃないかと後で気づいた、強引に理由をこじつけました。まさに縄渡り。

## 05話 校長先生、届かない。

「すいぶん和風な家に住んでるんだね」とアヤたん。もあらんわた  
しほなにも言つてない。「おかあさんは茶道の先生?」

「まあ」階段の踊り場から六段ほど下ったあたりでわたしほうなず  
いた。「まあその」

「すいぶんおてんば。茶道がイヤになつて着物姿で家を飛び出すな  
んて。だけど思つたほど和服が似合わないんだね。剣道少女っぽい  
風体のわりには」

「 もうひよつと離れてくれる?」

「高校一年で巫女さんのバイトをはじめた? へえ、いいチヨイス  
と思つよ。すいぶん似合つてゐる。で、そこにふらりとあらわれたある  
男の子がマチ子さんを見て」

「いい」一年後の未来なんて聞きたくもない。「もういい

「じゃああたしに協力して!」

「わかつたわかつた」

アヤたんにぴつとりくつつかれ、ブラ紐の感触を腕に感じながら  
講堂に入る。道中だれにも遭遇しなかつたのである程度予想はつい  
ていたけど、やっぱりわたしたちが最後の入場者だった。しかも並  
んで腕を組んで。

「校長、式辞」

やけに渋い司会者の声がスピーカーから飛び出してくる。新郎新婦は約六百人の新入生から注目を浴びつつ、小走りで自分の席に向かつた。

「アボカドだと思えばいいのよ。そうすれば緊張しないから」アヤたんが言った。

「アボカド？ カボチャじゃなくて？」

「ダメ。おいしいから。アボカドはこうつ 腐つたら異臭を放つでしょ？ だからアボカドなの」

「なるほど」

わたしは緊張のあまり納得した。「ほんじゃ」と言つてアヤさんがわたしの手を離し、自分のパイプイスに向かつた。いちばん後ろの最後の席。たぶん名字がないからだろう。それではわたしもと、すでに着席して校長先生の式辞を待ち侘びるクラスメイトのあいだに体をねじこませ、自分の席に到着した。

空のパイプイスに腰を下ろしかけ、ふと気づいて立ち上がり、イスを眺めまわした。空に見えるだけでだれかがすでにすわっているかもしれない。わたしはそーっと座面に指先を触れ、透明人間の頭や肩や胸がありそうなあたりをおそるおそるまさぐった。

「だれかいますか」わたしはこいつそつとやいた。「すわりますよ

ー

後ろの子がへんな目でわたしを見た。

「はやくすわるよひに

渋い司会者にいらいらと注意され、わたしは首をくじくせで誤りつつ思い切って空のイスにすわった。よかつた。ほよほよしていない。冷たくて綿がべつたんこのふつうのパイプイスだ。なんてありがたいんだろう。

「 それではあらためまして「見せ場とばかりに思いつきりタメをつくる。「校長、式辞！」

ひんやりしたパイプの脚を握り締めながら、ステージへ顔を向ける。校長先生らしき人が席を立ち、マイクの乗っかった壇へゆっくりと向かう。

わたしはよしうやかみんなと同じ立場になれたという安堵でほっとため息をつき、学校でのナントカ式の礼儀に則り顔をうつむかせて放課後どこに出かけようかと考えを巡らした。妙な光景がまぶたに焼きついている。顔を上げ、壇上を一度見する。

校長先生は燕尾服を着ていて、胸をピンと張りてそつそつと歩いてくる。やしてものすじくちっちやかった。

壇の向こう側に消えた。

「見えなくなつた

「

わたしが思わずつぶやくと、後ろからアヤたんが声をかけてきた。

「ちつちつときて隠れただけだよ

たしかに。この場合はわたしの能力がビックリではなく、校長先生の身長が一メートル一十センチくらいしかないのが原因のようだつた。

「えー」校長先生の肉声。マイクすら声を拾えない。「みなさんおいで、きみ、ちょっとマイクを」

黒縁メガネにパンツスーツのちょっとカッコいい女の先生が、いそいそと壇上に向かつた。たどり着くと思いつきり下を向いてうなずき、マイクスタンドを調整して先っぽを上に向けた。

「下だ、下に」「校長先生の肉声。ジャンプしたらしく、一瞬頭の先が見えた。「それじゃ上だろ」

「上」とおっしゃいますと?」

「下にしてほしいんだよ」

「あら、どうしてですか?」

すつとじぼけた調子で女教師が言ひ。「ビービーしてマイクを?」

「それはぼくが

「ぼくが?」

「その しゃうがね」

「はい?」

女性教師は明らかにわざと意地悪をしている。その証拠にわざわざから口もとが笑い出したくてひくひくめじしている。

「しゃんちゅう、とおつしゃいますと？」

「届かないんだよー」金切り声。「背が低いの！ 見ればわかるでしょ！」

「校長先生の能力は」突然アヤさんが言った。「背が極端に低いこと」

わたしは周囲を気にしつつ、せりげなく振り向く。

「せう、ほほママチ子さんを見立てどおり。身長百一十四センチね。八歳で成長が止まつたの」

「それは能力とは言わないんじや」

「能力だよ。身長が低いといふコンプレックスを持つことで人生についてより考えを巡らし、深い洞察を得て人間的に成長できる能力」

「なるほど」

壇上に手を向ける。どうの女教師はもはやニヤニヤを隠さうともせず、「ほり、もう少しで届くでしょ？ がんばんなさーい」という感じでスタンドから外したマイクを校長先生の頭上でぶらぶらさせている。校長は怒り狂つてぴょんぴょん飛び跳ねている。「やめろよー」

そんなこんなで入学式は終わった。一瞬のことでも覚えていない。きっとだれかが時を操作したんだろう。決してわたしが式の最中ずっと寝こけていたからではない、のだ。たぶん。

「あー、一年一組の町田マチ子」

ぞろぞろとみんなが退場するなか、いきなりスピーカーからわたしの名前が飛び出してきた。寝ていたわけでは決してないわたしはハッと目を覚まして、顔を上げた。

「あー、至急保健室へ行くよ！」

保健室？

05話 校長先生、届かない。（後書き）

保健室……なんで保健室なのか。

## 06話 ため息エクトプラズム

保健室のドアをガラガラと開け、のぞきこんだ。「町田でーす」

だれもいない。

中に入つてもう一度見まわす。棚の隙間やピンクのカーテンの向こう側やベッドの下などを確認し、ほんとうにだれもいないことを確認すると、わたしはベッドにそろそろと腰を下ろした。

なんていないんだ と、わたしはふと気づいた。もしかしてまた見えてないのかも 。

アヤたんが廊下から半分顔をのぞかせていた。待っているのだろう。

「待つてないよ」わたしの脳みそを読んで答える。「あたしの問題はもう解決した」

「 いつ?」

「いつって、未来に決まつてる。いつしょに解決したんだよ。三回くらいすつたもんだしてね。生命の危機もあつたかな。だけビッグして無事乗り切り、長年の疑問が氷解したつてわけ」

「覚えがないんだけど」

「まあね。解決に至る道はこれからはじまるから。時間が逆行して

るみたいで「おつきな田を危なつかしい感じでぎわみぎわみの動かす。

「あー、時間が。ぐだぐだしてゐるよ」

「うか。わたしだつていつまでも「えつ?」「とか「ぢうじて?」と驚いてばかりじゃない。ようやく冷静に返答できると少ししゃれしくなつた。「そうか、富田先生が近くに来てるんだね」

「うんにや。先生はこれから来るの。なぜかとこうと、解決したのは時間的にずっと先のことでしょ? ひと悶着あるのはこれからよ。だから先生はあとから入つてくる予定になつてゐるつてわけ。じゃなきやおかしいでしょ? 時間的に。おわかり?」

わからない。また自信を失つた。

それにしても だれかいるなりで声をかけるへりこしてほしい。

「あーあ」

急にため息が聞こえた。「そつかそつか。わたしなんかどうでもいいんだ」

発信源は事務机のあたりだつた。やっぱりだれかがいた。わたしは立ち上がり、停電のときみたいなしぐさでゆつくりと机のほうへ進んだ。保健の先生も見えない。一日でふたりとま。わたしの能力は年々ひどくなつてゐるような気がする。

「すいません。氣づかなくて」

「やうでじょうよ。どうせわたしなんか生きてる価値もないんだか

「ナ」までは言つてませんけど

「すわって」

「」? とは会話の流れ上たずねづらかったので、とりあえず机の前のスツールに腰を下ろした。につこり愛想笑いもしてみた。保健の先生らしきおばさん（たぶん）は、わたしが腰かける少しのあいだにもため息をつきつけた。聞いてるだけで気が滅入つくる。

もうそろそろわたしのキヤバも限界に近づきつつあった。お願いだからひとりくらいまともな人間と出会いたい。そしてふつうの話がしたい。なんでもいいのだ。「アイス食べたー」とか「がキモー」とか「あいつ強烈な体臭を発してない?」とか、そういう当たり障りがなくて頭で考える必要がなくていちいち驚かずに済むような会話がしたいのだ。

てかでかの革張りイスがくるつと回転し、」ひらく向かった。

「それで、」のヤブ医者になんの用?」ため息をついた。「あなたも仮病で寝に来たんだ? どうぞどうぞ。ベッドは予約制だけど、いまのところ空いてるから。好きなのを使って。どうせあなたも病気じゃないんだ。健康体なんだ。ちょっと便秘気味なくらいで

「呼ばれてきたんですよ」

「はいはい、どうせわたしは場所取りの」く潰しの役立たずですよ。みんな健康でありがたいことですねー。若いつていいなー。うーら

やーましーー。あーあ

どうしてここまで悲観的になりながら生きていけるのだろう。つま先からわき出るようなため息とともに、口があるとおぼしきところから青白いエクトプラズムがにゅるつとあらわれ、氣の抜けたヘリウム風船みたいにふらふらと天井へ昇つていった。

ふとエクトプラズムが動きを止めた。「呼ばれたって言った?」

ようやく気づいた。「はーそうです。一年一組の」「

「新入生?」

「はー」

「町田さん?」

「そうです」

「マチ子さん?」

「まあ

保健の先生は「やう」「ひとつぶやいた。なにがやういなのか。

「やうと病人があらわれた

「わたしが?」

「だつてなにかが見えないんでしょう? びょーきびょーあ。すい

びょーあ。やーい、びょーにーん　　」

とてもなくイヤな気分になり、わたしはなんとなく後ろを振り返った。アヤたんがにんまり唇の端を持ち上げ、なぜかうれしそうに手を振っている。

「そんなの絶対ありえない」とでしょ？　キチガイ沙汰よ。狂つてるとしか思えない」

あなたに言われたくないといつ氣がする。と、いうか、この高校に生息するすべての人間になはなくともそんなことは言われたくないのだった。

「で、あなたとじてはどつなの？」

「なにがですか？」

「治したいんじゃないかなーと思つてさー」

期待のこもつた声。明らかに自らの手で治したがっているようだつた。治すにしても医者は選びたかったけど、ほんとに治るならと思い、わたしはほんの少しうなずいてみた。

「じゃ、ブレザー脱いで」

漠然とした抵抗があつたが上着ぐらいいかと肩をねじり、緑色のブレザーを脱ぐ。二十二世紀が丘高校は制服だけはかわいい。だからよけいにだまされたという気分になる。

白ワイシャツ姿になるとなんとなく不安な気持ちがわき起じつて

めた。ブレザーを膝の上に置いて、と握りしめる。

「じゃ、シャツも脱いで」

「 はい？」 またしても意味なく後ろを振り向く。アヤさんは消えていた。不安一倍増しで先生にサッと向き直る。「 はい？」

「だから、その若々しい肉体をまとうまばゆいばかりの皿にワインシャツを脱いでつて言つてるのよ。まったく、若こくせに耳も遠いの？」 ま、治し甲斐がある患者があらわれたつてことかな。あー楽しい。人生充実してるつて感じ。さあ、脱いで脱いで。脱がなきや治せないんだからね。あーあ」

いまやわたしの眉毛は寄せるとか下げるとかそういう段階をとおり越し、一回転してこんがらがつて皿の上にくつつこてているような状況だった。

「治したいんじょ - ? ふつつの女の子に戻りたいんじょ - ?」

わたしはボタンに手をかける。

## 06話 ため息エクトプラズム（後書き）

だんだん混沌としてもました。

## 〇〇話 わたしかわいい、わたしかわいい

「あー、いいの。ちつきの冗談だから」

先生が言った。わたしは「え、え？」といつ感じで都合四回ほど一度見した。ついでにはずしたボタンは一度見した回数と同じ四個だった。だからどうとこうわけでもない。

「Tシャツをちらけ出し、切腹の最中でストップがかかったみたいな格好でわたしは言った。「いいんですか？」

「べつにぜんぶ脱いでもいいけどね。いまのところだれも喜ばないと思うよ。あなた人気ないし」そして突然話題を変えた。「視力は？」

わたしはいつにさつボタンかけ直しながら、あることに気づいて驚いた。とてもまともな質問をされたような気がする。

「田ですか？ 田はいいんです。両方一・二で」

「へえ、大きく出たねー。じゃあこれは何本に見える？」

「見えません」

「悪いじゃないの、田」

「手自体が見えないんですよ」

「失明してるわけじゃないよね？ 座頭市の子孫とか」

「ほかのは見えています。たとえば……」この状況で見るとしたらこれが以上見るものはないといつ検査用の視力表を指さした。「この距離でもばっちり見えますよ。上、下、左、右、下、上、右、左、左、右、下、上、右、左、上」

「それは裏ドルーガのコマンド?」

「いえ、隙間の位置を」

「なるほど、視力は問題ないってことか」

先生はため息をついた。

「その顔」

「なんですか?」思わず顔に手をやる。

「かわいいじゃないの。前髪パツンになんかしちゃつたりして。ラフなヘアスタイルでがんばってないところを醸し出してるあたりが自信たっぷりに見えたり」

「あの……」くじっと頭を下げる。「ありがとうございます」

「どうか。自分でもかわいいと思つてるんだ。ベーベーとたんにハメられた感のある空気が漂つ。『まあいいや。髪を下ろしてくれる?』

「どうしてですか?」

「下をせつて叫びてんのよ」

かなり不機嫌な声。わたしは思わず「はい」と言い、頭の後ろに手を伸ばし、ゴム紐をほどいて馬のしつぽを解放した。ふあせつと肩にかかる。

といつか、授業は受けなくていいんだりつか。

「どう?」

「なにがです?」

「これで見えた」

自信たっぷりと言つ。わたしにはなにも見えてない。

「ほんと? おかしいなー」見えていれば首をひねつていそつな聲音で言つた。 「なんかめんどくせくなつてきたな」

「それでもこいですよ。授業があるんで、これで」

「こや、ダメ。ダメよ。ダメつたら」そして自分に言い聞かせるようにつぶやく。 「返しちゃダメ。捕獲するのよ。ゲットするの。」の子は貴重な実験台なんだから

「

「実験台?」

「なんでもない。んじゃ、ツインテールにしてみてくれる? 往年のHANAMみたいな感じで」

「

「INAM?」

わたしは過去SHANNAというバンドが一風堂のカバー『すみれ September Love』でヒットし人気が出たことやボーカルが吉川ひなのと結婚したが同年九月に離婚したことなどを延々と聞かされた。そして先生はいまも昔も吉川ひなのを憎んでいるのだと付け加えた。かなりファンだつたらしい。先生はそれから一時間半ほど切れ目なく当時の思い出を語った。一千六年に吉岡美穂とできちやつた婚をしたという話になつたあたりからわたしはどうしても我慢ができなくなり、ついでにおなかもちょっとびり空いてきたのでいふことをきいてツインテールとやらにさせていただくことにした。

「こんな感じですか?」両手で髪を握り、『愿望』の髪型を披露する。理由などどうでもよかつた。

「そうそう。いや、もうちょっと結び目を耳のほうに。そう、そのへん」

そのへんに調整した。

「あーいいね」ため息をつく。「ひとつもかわいい。ほら」

手鏡が机の上から持ち上がり、ふわふわとわたしのほうへ漂ってきた。自分を見る。こういうヘアスタイルにしたのははじめてだつたが、正直ちょっとといいかも、と思った。明日以降検討してみよう。

十五秒ほど間を置いたあと、先生が言った。「かわいいと思つてる?」

「いいえ、まつたく思こません」

一度田のトラップが飛んできたので、わたしは反射的に答えた。そして猫背で自信なさげで中学校一年のころから原因不明のいじめを六ヶ月間受けた経験のある生徒を装った。実際は、いじめられたことはない。いじめたこともない。わたしはなんの取り柄もないけど、人をいじめておもしろがるようなことだけはしたくないのだ。

先生はもう何度もかわからぬため息をつき、イスがくるると横を向いた。

「よし」

両手を持ち上げてツインテールとやらを維持していると、ふと、白衣を着てイスにふんぞり返る先生の姿が見えた。だがまだ二十パーセントほどで、お風呂に入っているとおとうさんが急に磨りガラスの扉の向こうにあらわれて「タオル忘れてつたぞ。ここに置いとくからな」と言い、その数分後に弟があらわれて「タオル忘れてるよ。ここに置いとくから」と言われたときくらいに垣間見えたのと同じくらいの鮮明度だった。

「あなたの目を見えなくしている原因は、自分を知ろうとしないあなた自身にあるの」うすらほんやりした先生が言った。「なんの取り柄もない？」実際は『客観的に見てもみんなよりかわいくない？わたし』みたいに思つてゐるくせに。そんなふうに思つてるんでしょう？自惚れ屋で自信過剰な自分を認めようとしない。出そうとしない。それがあなたの能力を発現させたきっかけなの。あなただけじゃない。みんなそう。あなたたち十代は、自信のない、なんの取り柄もないふりを演じてるのよ、いい子ちゃんぶつて。実際は自信あるんでしょ？だけどそれを表に出すとつまはじきにされるか

ら、必死で押し隠して『ごく平凡な高校生を装つてる。だからみんなあちこちおかしくなつてるのよ。』『個性』？隠しすぎてどこに個性があるんだかもわからなくなつてるでしょ？最近の子つてみんなそう。いい？あなたもみんなも、一年後には大学受験のために本格的な勉強をはじめなきやならない。大学に行つたら？次は就職よ。世間に出てみなさい、個性がどんなものかわかるから。不安なんでしょう？自分は将来どうなるのか。なぜ人は生きていくのか、つて『だからほんとうの個性が見えていないあなたたちは』やつてまーすよろしくねーみたいな妙な得意技を拾つてきては必死で不安を押し隠し、自分を取り戻そうとしてる。もうそこに自分はいるのに。だけどそんな特技、社会に出たらハイおしまいね。それはほんとうのあなたじやないんだから。そんな特技なんてなんの役にも立たないんだから。ほんとうの自分は押し殺しすぎて見えないくらい。七年後、リクルートスーツを着て就職面接会に出て周りを見まわし、あなたはきっとこう思つはずよ。『なんかみんな同じに見えるなあ』つて『

一時間あまり語られつづけたが、わたしはまつたく聞いていなかつた。そして先生の顔は少し秋元康に似ていた。メガネをはずした秋元康に。

## 〇 7 話 わたしかわいい、わたしかわいい（後書き）

焦りすぎたせいかENAMが出てきました。頭の中はどうなつているのか。筒井康隆ばりに語っていますが中身はゼロです。

授業も交流もないままお昼休みになってしまった。とりあえず保健の先生からは解放されたが、原因の究明にはもう少し時間がかかるということと、お昼休みが終わつたらすぐに入れるよこと何度も何度も念を押された。

「名前を教えてくれますか?」ブレザーを羽織りながらわたしはたずねた。

「まだダメ。決まってないから。それよりそのスカート、長すぎない?」

「規定どおりですけど」

「またまたいい子ちゃんぶつて。若いのが規則に従つてどつするの。そのくせアツチのほうはもう経験済みなんですよ。中学のころからぶいぶい言わせちゃつて」

「言わせてないんですけど」

「とにかく」透過度二十パーセントの先生が言つた。「もう少し短くして。わたしが寸法直してあげるから。ババアは裁縫できんのよ。すいせいじよ。あとそれから髪の毛だけど、ちょうどつむじのあたりで結わえるのがいいみたい。ま、一時しのぎだけどね。それでもだいぶ見えなかつた者が見えてくるよになるはずよ。スカート脱いで」

そんなわけで、わたしは超ミニの改造スカートに頭頂部で髪房をゆさゆさせるという意味不明としか言いようのない格好で教室に戻った。面倒見がいいというよりも、なんだかごく個人的なライフワークに付き合わされているような気がする。言われたとおりにするほうもどうか思つて途中で髪をほどこしたけど、下駄箱の前をとおりかかつてふと緑色の掲示板に目をやり、あつと驚いた。ちゃんとクラス表が貼り出されている。しかもわたしの割り当ては四組だった。

いまさら四組に顔を出すわけにもいかないので、一組に戻った。ロッカーを開けてカバンの中からお弁当を取り出す。ロッカーはちゃんと開いて閉まって、しかも中身を食い散らかしてゲップを吐いたりもしなかつた。ほんとにいい子。わたしの名前も書いてある。やつぱりわたしのいるべき場所はここなのだ。机はないけど。いまのところ。

教室はガラガラだった。たぶんみんな屋上に行っているんだろう。お昼といえば屋上。わたしはてきとうな席にすわり、黄色い縦長のお弁当箱を開け、水筒から母特製の杜仲茶を一杯カップに注いだ。便秘対策だ。

言い忘れたけど、田の前三十センチのところでイスに後ろずわりしたアヤたんが口をもぐもぐ動かしている。

「先に戻つてごめん。だつて授業あるじゃん。ふつづ高校では授業を受けるものでしょ？」

「薄情」

「あたしは心配してないよ。このくらいであたしたちの友情は壊れ

たりしないみたいだから。少なくとも一年の夏休みまではね。そのころなにがあるかといつと

わたしはわーわー言つてアヤたんの未来予測をさえぎつた。アヤたんはにんまりと笑い、前回のご飯が残つてゐる状況でおうちをあーんと開けてさらに唐揚げをいつこ追加した。半ペースト状のご飯がちらりとのぞく。

「れ、おうあつは」「どうだつた?」と言つた。「あひほほんほあどはわはつは」

わたしは制した。「お願ひ、飲み込んで」なんと言つたのかはわかつた。この場合は以心伝心といつていいのだろうか。

そして話題はわたしの能力の謎に及ぶ。わたしは事の顛末を説明する。

アヤたんは感想を言つた。「へんな髪型」

忘れてた。ゴム紐をはずそうとするアヤたんは米粒のついた箸の先でわたしの手を制した。

「いいよ。痩せすぎのトロール人形みたいで。かわいい」

「それってかわいいっていつの?」

頭を下げる足もとのぞきこんでくる。「スカート短い。中身見えそう。でもまあ、いいんじゃない。子鹿みたいな細い足が強調されて。いつでもおつけって感じを醸し出してるけど、おつけーしなきゃいい話だもんね。ふーん、そつなんだー」

お股がもぞもぞしてきたのでわたしは内ももをこすり合わせ、脚を組んだ。もちろんいつでもおつけではないけれど、とりあえずこの子がレズじやないことを祈る。一年の夏休みに告白されるのもごめんだった。

「で」アヤたんはパツと顔を上げ、ペットボトルのお茶をぐびぐびあおつた。「はあ。なんだつけ？」

「知らないよ。そつちから切り出したんだしょ」

「そうね。」で、これから数日、すでに解決したあたしの抱える悩みを調査するわけだけど

「解決したならいいんじゃないの？」

「答えには問い合わせなきや。なんで答えが出たのかわからなくなるでしょ？ マチ子さんはすつたもんだがあつていまトロール人形になつているわけだけど、その応急処置を施したまま午後の授業に臨んでほしいの。いまなら透明なあの子を見ることができる。見えたら話すこともできるでしょ？ そして聞き出してほしいの。どうしてあたしも知り得ない秘密を隠し持つているのかつて」

「自分で聞けば？」わたしは卵焼きを半分かじつてお弁当箱に戻した。

「イヤ」その卵焼きを横取りしながらアヤたんが言った。「だつて恐ろしいんだもん」

「なにが？」

「顔が。 というか全体的に。 自然界の法則を無視してゐる感じってい  
うか。 まあ、見ればわかるよ。 ジャあお願いね」

そんな高校生がいるんだろ? か。 いるだろ? とにかくこの高校な  
ら。 わたしは午後も保健室に行かなければならぬので午後の授業  
は出られませんと言つて断らうとしたが、よく考えるとどっちも同  
じくらいやりたくないことだつた。 退くも地獄進むも地獄。 高校生  
活つてそんなものなのかも知れない。

「よかつた。 ありがとう」「アヤたんは勝手にお礼を言い、ついでに  
わたしのサフランライスをじゅわっと箸で奪い取つていつた。「あつ  
ち見て。 よーく田を凝らして」

窓のほうを指さす。 わたしは皿食を手で守りつつ、言われたとお  
り顔を向けた。 窓越しにいいお天氣とはいえないどんよりした曇り  
空がのぞいていた。

だれもいないと思つていたが、ひとり席にすわつてゐるのが見え  
た。 幽霊みたいに透きとおつてゐるわけではなくて、ちゃんと見え  
ている。 たんに気づかなかつただけだ。 男の子が机にかぶつつき、  
頭をかきながら焦つた様子でペンを動かしてゐる。

頭つんづん。 思い出した。 体重からわたしの名前を当てた子だ。  
名前は忘れたけど。

「今日テストがあつてね、田澤のやつ

アヤたんに振り返る。「テスト? 初回なのに?」

「初日の定義にもよるけど」静かにわたしのお弁当を凝視する。「で、一時間目の社会のテストだったんだけど、あいつ答案用紙に英語の答えを書いたの」

「 どひじー」

「つまり、社会の問い合わせに対して英語の回答が思い浮かんだのよ。あいつ、そういうヤツだから。それで先生が『ふざけるな』ってめちゃめちゃ怒り出して、まともな答えが書けるまで回答をせしめてるってわけ。ついでにキュウリの輪切りも一皿置いていた。あいつキュウリが嫌いだから。たんに嫌がらせとしてね」

あらためて田澤を見やる。だいぶズレてはいたが威勢のよかつたあのときの面影はなく、いまでは眉尻を下げて泣きそうな顔をしていた。たぶん、いくら考えても出てこないのだらう。そういう能力を持ち合わせているから。

「給食を食べ残した小学生ね」わたしは感想を漏らした。

「そり。だからキュウリなのよ。比喩的な意味を込めて」

初日からちよつとかわいそうだ。わたしはめずらしく、声をかけようかと思った。自分よりかわいそうな子がいることにほつとして余裕が出たからかもしれない。よく見ると横顔がちょっととかわいかつたりもしたが、それはたぶん思い過ごー。

「ねえ、だいじょうぶ?」

ハツと顔を上げ、振り向いた。実に情けない顔をしながらわたしをまじまじと見て、そして言った。

「十一歳のときまだおとぎ話との風呿で入っていたの？」

〇八話 お弁当争奪戦、そして（後書き）

なんとなくつかんできたよつな気がします。あくまで気がするだけかもしませんが。

できる」となら消し去りたい過去を赤の他人に暴かれた場合、当然の反応として「えつ？ なんで知ってるの？」とか「だから聞いたの？」とか「はあ？ おとうさんとお風呂になんか入つてないんですけど？」なんて感じでうろたえまくるはずなんだけど、わたしの言つたセリフは「どんなふうに見えたの？」だった。わたしはこの半田で学びつつあつた。この高校は当然の反応を許してくれるほど当然ではないのだ。

「ああー

田澤は相変わらずの鼻水でも垂らしそうなしょっぱい顔をわたしに向け、うなつた。なにをそんなに眉毛をハの字にする必要があるのか。わたしは短すぎるブリーツスカートの裾を押さえ、中身が見えないよう下にひっぱりながら田澤に近づき、腰を折つておそるおそる顔をのぞきこんだ。実際鼻水を垂らしていた。

「テストに集中できない  
おまえのせいだ  
」

きつといのまま一生家に帰れないんだ、

「わたし？」

あまりに忍びない顔だったのでわたしは思わず目をそらし、机の端っこにある小鉢を見た。キュウリとワカメの酢の物だつた。酸っぱいカブトムシみたいなにおいが漂つてくる。机は消しカスだらけ。そして中央には、問題のテスト用紙が横たわつていた。テストだけに。問題。どうでもいいか。

テスト用紙を見てわたしは少なからずぎょととした。流暢な筆記体の英語がびつしりと書かれている。意味不明の迫力に圧倒されたが、まったく問題の解答になつていはないのはひと目でわかった。病気なんじやなかろうか。

「ああ、見える すごい」 田澤はふと顔を上げて遠くを見やり、「ううとうと夢見るよつたな表情になつた。「せまに浴槽におどつさんとふたり」

「見えてるの? どうして」

「あつ!」 いきなり叫んだ。

「なに?」

「浴槽から上がつた。ぞばーって。あーすい。もう見え。十一歳の が もうダメ」

田澤は危険なほどの勢いで頭をのけぞらせた。「辛抱たまらん鼻血が出そつ」という感じの古くさい仕草で鼻をつまみ、「んがー」とうなり、いきなりパツと手を下ろして不審者のようにきょろきょろと周囲を見まわし、そしてズボンのベルトに手をかけてかちやかちやとゆるめはじめた。

「テストはいいや。おれ大学行く気ないし。作家になるんだ。だから勉強しなくていいんだよね。おれ才能あっから」

自分に言い聞かせるようにぶつぶつぶつぶやきながらチャックを下ろす。十五年のあいだに仕入れた知識のおかげでなにをするつもりなのがなんとなくわかつたわたしはとりあえず田澤にかぶりついて

をやめさせビンタの一発でも食らわして人前でそんなことをしてはいけませんと説教しようとしたが、実際は田澤の周辺で触ろうか触るまいか手をあわあわ動かしながら「やめて。ね、やめて。お願い」と耳もとでささやくことしかできなかつた。

急に田澤が「はつ」と言つて顔を上げ、わたしを見つめた。よかつた、なんだか知らないが目が正気に戻つてゐる。そしてふたたび情けない表情で「あー」と言つた。

「苦しい 見るだけだなんてそんな『無体な』」

わたしとしてはその現場にいないので胸を押さえて「あやー！？」と叫ぶこともできない。なんとか田澤の幻視を止める手立てはないものかとアヤたんに振り返つた。

アヤたんはこそーと手を伸ばし、わたしのお弁当箱に手を伸ばしている最中だつた。声をかけるとハツと顔を向けて手をひっこめ、ごめんちゃいといふ感じで笑みを向けてきた。

「あたしも食べよつかなーと思つてさ。オカズ」

下品。

そして結局わたしの杜仲茶をカップに注いだ。わざわざわたしが飲んだ方角にカップまわして口をつけながら言つた。

「そう。たしかにこいつには十一歳のマチ子さんの裸体が見えている。あたしの場合は知るだけだけど、こいつは幻視ができるのよ。いまもジト目で見てるんでしょ。いつも言つてた。『おれ白飯だけで三杯はいけるぜ』つて。とにかくこいつ、オカズがいらないんだ

つて。たぶん両方の意味だと思つけど、だからキュウリが食べられないのかもね」

チーズハンバーグにでもなつた氣分だ。『やめさせて。お願ひ

「無理だよ。憲法上ね。人の思想は取り締まれないもん

わたしは勝手にお茶をぐびぐびするアヤたんを眺め、だらりと立ち尽くした。がんがんがんという机を殴る音がし、かなりイヤだったが田澤のほうへ振り返つた。田澤は鬼のように顔をゆがめ、額を何度も何度も机に叩きつけていた。消しカスが飛び、小鉢が地震のときみたいにカタカタ震えながら横歩きしている。ちゃんとズボンをはいているのがなによりだつた。男の子にそれ以上求めるのは酷だ。

「だいじょうぶ?」声をかける。『テストは

「おれ、どうすればいいんだ」なぜかしくしく泣き出した。『一刻もはやく家に帰つてひとりになりたい。そして

ピー。

『したい。したいんだよ! なのにできないんだ。ぜんぶそうだ。やりたいのにいつも止められる。『ダメダメ』つて。『しちゃいけません、あなたには無理よ』つて。『どうせできっこないんだから。ありもしない幻を追いかけるのは止めて、だまつて勉強しない』つて

『それは夢や希望の話を言つてゐるんだよね?』

わたしの問いかけを無視し、田澤は英語だか社会だかわからないテスト用紙を見つめつつ勝手に語り出した。

「おれ、ずっとサッカーが好きだつたんだよ。中学じゃサッカー部でさ。自信あつたよ。だけど試合になるといつも手を使つちゃうんだ。キックオフと同時に。そしてドリブルをはじめるんだよ。バスケの。それがめちゃくちゃ華麗でさ。バッククロールターンにレッグルーにクロスオーバーに。だれもおれを止められないんだよ。でも当然だよね。サッカーなんだから。で、一ヶ月で退部させられてさ。バスケがうまくできるつて気づいたから、すぐバスケ部に転部したんだよ。まわりもおれの噂を聞いて、期待してた。ところが試合になるとおれ、いきなり相手にボールをぶつけはじめたんだよ。しかも百発百中、だれもキャッチできないの。そしてまた退部になつた。また部活を探した。おれに合う部活。でもドッヂボール部つてなかつたんだよね。そりやそうだよな。くにおくんじゃあるまいし。近いからハンドボール部に入つたんだけど、今度はおれ、気づいたら試合中にクリケットのバットを持ってセンターサークルに仁王立ちしてたんだ。なにをしようとしてたのかわからないけど、恐ろしくなつて逃げた。そのときだよ、おれが自分の能力に気づいたのは」「

多少氣づく時期が遅すぎるような氣もしたが、あまりに弱つていいので黙つておいた。

田澤は鼻をすすり、手の甲で田をぬぐつた。そしてぽつりと言つた。

「おれ、なにをやつてもダメなんだ

妙に心にしみる台詞だった。ちよつともう一泣きしそうになる。

語った内容はアホだけ。

とつあえず惨めな過去に浸つてくれてこむおかげで、わたしに関する妄想は脳裏から消え去ったようだった。よかったです。

「ここつ、役に立つかも」

「こきなつアヤたんが言った。「使える能力」

「ど」が「わたしはつま先走りで田澤から離れ、机にすわってほつとひと息つき、アヤたんの顔をのぞきこんだ。「ただの哀れな子だよ。近づきたくもない」とひれわらへ。

「いや、使える。あたしの問にを巡る冒険に加えるべきだよ。パーティのひとりとして」

「どこの理屈で？」

「あ、部活で思い出した。あたしたちの部活、つべつつか？ あたしの問にを追いかけるのが目的の団体で、名前は『』

どこかで聞いたことのある話だったのでやんわりと否定しておいた。

「まじつか。つまり、あこつなにをやることもつくできるってところが魅力的なのよ。全部ズレてるけどね。まったく関連性のない事柄をあいつに『えれば、おそらくこれから何度もおとずれるであろう窮地を脱する際にきっと使えるんじゃないかなと思つて

「わ」

「『バカとナントカは使いよ』っていりでしょ？」

「こちおう聞くナビ、その事柄はゼリヤって見つかるつもつ？」

「わかんない。そのときになつたら考えよ。一瞬のひらめきに身を任せて」

いつの間にかクラスメイトがぞろぞろとあらわれ、席に着きはじめた。わたしはお弁当をカバンにつっこみ、立ち上がって無駄に広がるスカートを押さえ、自分の席へ戻ろうとして一步踏み出し、そんなものはもとからなかつたことに気づいて引き返し、その場でくるりと一回転したちよどそのとき、キンコソソカソとお昼休み終了のチャイムが鳴つた。速攻で先生が入つてくる。わたしは才能なんかなくても構わない。せめて自分の机がほしかつた。

〇九話 われの得意をやひひ、はじめてわれのオカズを返す。（後書き）

シモネタから急転直下、シリアスな話に軌道修正しました（ビリが）。これをダイナミックと言つていいのか。やっぱりただの行き当たりばつたりですね。そして今日、内面的にはじめてのクライシスがおどぎれました。迷いといつやつです。

「オカズ」というまことに下品なダブルユーニングをなんとかまとめられたのはわれながら奇跡的でした。前回の最後のセリフも条件反射みたいに出てきたものでしたから。こんな感じで今後もダラダラつづけてまいります。

## 10話 連立非線形なめなめ方程式

自分の机を探してきょろきょろしていると あ、いた。というか、見えた。例の透明で人の体重を当てられて見た目が全体的に自然界の法則に反しているという女の子。かつてわたしが誤って腰掛けてしまった席に、うすらぼんやりとした人の姿がある。この角度から判断する限りはきちんとした生態系の一員に見えた。ただし格好はものすごくだらしない。横ずわりして脚を机の脇で組み、退屈そうに頬杖をつき、残ったほうの手で毛先をいじくっている。

三秒ほど横顔を眺めていると、突然解像度が向上して彩度も増した。わたしはちょっと驚いた。動画のビットレートにじやなく、そこに映るものに。わーお、超美人。色彩に自信はないけど髪の毛は明るいブラウンで、いかにも愛され系ゆるふわパーマでございとう感じで波打ち、ちょうど胸と肩胛骨の上あたりに流れ落ちている。半開きの目は物憂げに窓の外を見やり、長いまつげが物憂げ度をいつそう物憂げに演出している。青白い肌に赤い唇、目の下の泣きぼくろまで見えた。ハーフか外国の方かと思った。もしかしたらほんとにそうなのかもしれない。態度もすわりかたも映画で見るアメリカのティーンエイジヤーって感じだし。

と、ここまで観察したところで激しく鮮明度が落ち、ひと昔前の動画サイト並みになつた。

女の子はわたしの熱視線に気づく素振りも見せない。窓際の席のアヤたんが半ば腰を浮かせながら女の子のほうを何度も指さし、「行け、行け」という感じで口を動かした。もちろんわたしはやるべきことをやるつもりだった。見えたのなら、面と向かって話しかけることができる。この子がどんな謎を隠し持っているのか、なぜア

やたんも知り得ない秘密を握っているのか それらを聞き出さなければならぬ。それがわたしに課せられた使命なのだから。

ウソだけど。

「おーい、なんじゃおまえ。はやく席にすわれ

。教壇の先生が顎をしゃくぐような仕草でわたしに言った（たぶん）。チンピラみたいな巻き舌だった。おそるおそる目を向ける。灰色がかつたくしゃくしゃの髪に、顎にはゴマみたいなヒゲが浮き上がっている。ガリガリに瘦せているが、なにか切つ先の鈍い刃物のような危なつかしさを醸し出していた。

「うつん、と頭になにかが当たった。足下を見る。ちぎつてまるめたノートの切れ端が落ちていた。わたしはスカートを押さえて膝を折り、急いで紙を拾つた。

「そう、行川先生は元ヤンキーの元プロボクサーなの。担当科目は数学で、三年一組の担任もある」なぜかアヤたんの声が直接脳に響いてきた。「生徒には『なめなめ』ってあだ名で呼ばれる。たぶんエロいからじゃないかな。いろいろ問題発言も多いみたいだし」

アヤたんがにこにこして手を振つていて。「あなたがこれを？」と目でたずねると、アヤたんは手のひらを唇に当て、ちゅつと投げキッスを送つてきた。なんて便利な子 なのはいいんだけど、とにかくはやく彼氏を「しらえてわたしをいろんな意味で安心させてほしいと思つた。

エロくてなめなめと陰で呼ばれている行川先生は、タ力のような目でわたしをにらみつづけている。と、鼻でせせら笑い、それから

教室中を見まわし教卓をバンと叩いた。

「よーし、じゃあ今日は連立偏微分非線形方程式をやるぞ。宿題出せ」「せ

カツアゲみたいな仕草でくいくいと手を動かす。「後ろからよこせ。はやくせえ」

みんなは中学生に襲われた小学生のよつて荒てふためき、宿題のプリントを後ろから前へ送りはじめた。なぜみんな疑いもなく連立ナント力微分ナント力方程式の宿題に取りかかつたのかはこの際気にしないうことにした。

なのにわたしはまだ基本のキの段階だ。焦りすぎてお漏らししそうな感じで足踏みし、机を探して教室を見まわす。やっぱり席はないうだつた。もう一週間くらい机を探しているような気分になり、そろそろ腹をくくる段階に来ているのかもしれないと思った。これがわたしだの、といつ。みんな机にすわっているからつて自分もする必要があるのか。いや、ない。なぜかつて、わたしはわたしなのだから。世間に迎合することはない。浜崎あゆみも歌つてたじやないか、「あなたらしい」とかなんとか。

いい感じで悟りながら立ち尽くしていると、ふたたび行川先生と田があつた。

「なんなんだおまえ、わからせから」

「あの」思わずくじつと頭を下げる。「ちよつと机が

「机がちよつとどうなるつてんだ、あ?」「ほんとうにチンピラだつ

た。「はよすわれ。なくてもすわれ。その前に宿題寄りせ

「えーと やってないんですけど」

「なんだ。微分幾何学は苦手か。おまえ、中学ひやんと出てきたのか

と、行川先生はあらためてわたしを頭のてっぺんからつま先までじりじりとねめつけはじめた。

「さゆーとな顔と髪型だから許されると思つてんのか？ あ？ ほのかに和の香りを漂わせやがつて。ひとりなでしこジャパンか。なんだそのスカート。もう少しでパンツ見えんぞ。放課後見てやる。だから今度一発やらせや」

「さつだけ言つて先生は宿題を集め、なにをするかと思つたらポケットからライターを取り出し、火をつけてまる」と燃やした。めらめらする炎でいつの間にかくわえていたタバコに火をつける。

無造作に火のついたプリントをゴミ箱に放る。ふあーとタバコの煙を吐き出して言つた。

「じやあ好きにじる。そこに立つてる。授業進めるからな。おまえを田で犯しながら

「ゴミ箱が燃えている。めらつと炎が立ち上った。

「今日はワーマンヒアインシュタインについて

チョークをブチ折りそつた勢いで黒板にふたりの似顔絵を描いた。

「いいか。アインシュタインは頭がでかい。ベルンハルト・リーマンはハゲ親父。ここテストに出るぞ。似顔絵付きだからな。できなかつたら殺すぞ」

カーテンに火が燃え移っている。

「もう一度言つぞ。『リーマンは『汚いヒゲのハゲ親父』」

炎が窓際の壁をなめなめし、天井を焼き焦がしている。黒煙が漂つてきた。

## 10話 連立非線形なめなめ方程式（後書き）

この先生にはモデルがいます。それはともかく、女性の皆様申し訳ありません。これから純愛路線になりますんで（ウソ）。

## 11話 なめなめ先生の想い

カーテンはほぼ黒いじげの状態になつてゐる。全員そのことに気づいているようだつたが、避難しようとする子はだれもいなかつた。理由はなんとなくわかる。かなり悪意のこもつた感のあるアインシユタインの似顔絵を手のひらでばしばし叩いているあの行川先生のせいだ。いくら先生が恐ろしくつたつて焼け死にそうな状況だつたらせめてよそ見したり席を立つて奪取したりしてもよさそうなのに。

いや、全員ではなかつた。アヤたんは氣づいていた。といつても恐れている様子は微塵もなく、お友達の家にお呼ばれしたらチョコレートケーキが出ましたーみたいな笑顔を満面に浮かべている。樂しいんだろう。

前後のドアが「ガラガラーッ」と音を立て、ぴしゃりと閉まつた。ロックがかかる。これについては、わたしはべつだん驚きもしなかつた。あのドアのことだ。いつか必ず裏切ると思つていた。だいたいはじめて会つたときから様子がおかしかつた。わたしははじめからあいつを信用していなかつた。

それはともかくとして、ロックのかちやりという音がした瞬間、例のアメリカちつくなうすらぼんやりした女の子がハツと顔を上げ、立ち上がつた。どうでもいいけどすごい長身。そしてカツコよかつた。

ゆるふわ髪をふわとさせ、鋭くこりりへ振り向いた。

「わたしは玲乃」

唐突に自己紹介する。

「ハーフでもなんでもなく、ただの熊本出身の日本人よ」

「セツ」

「じつは経歴詐称してるんだけど」

「あつセツ」

「」の名前も偽名ね」

偽名だらうが経歴詐称だらうが」の際じうでもいいような気がする。なめなめ先生は「エウクレイデスはただのキャラだからな。実在しねえんだ。おまえらいつまでも二次元に熱中してんじゃねえぞ」とか言いながら黒板のお絵かきをやめて振り向き、生徒ひとりひとりを刺し殺すような勢いでにらみつけた。横顔が炎で赤く照らされていたが、」のほつほつとくに気にしていないようだつた。

カーテンにいちばん近い子が、まさにいま炎に巻き込まれようとしている。歯を食いしばり、なに」とかをつぶやきながらじつと耐えている。まるでティック・クアン・ドックだ。

「あなたの助けがいるの」玲乃が言った。「あなたに見えていないものはなに?」

「はい?」思わず聞き返す。玲乃様はいらっしゃりと繰り返した。

「だから、見えていないものよ。」の状況で見えていないものと言えば?」

「その前に火を消さないと　　」

「そうね。で、消すにはなにが必要?」

「消火器とか　　」

とつぶやいた瞬間、アヤたんが机の上によじ登つて指さし、叫んだ。「あれ！」

あれ、の先にはなにもなかつた。玲乃お嬢様はスカートを翻らせ、女騎士のように颯爽と書け出した。黒板のとなり、ちょうど時間割が貼つてある壁のあたりを手でまさぐり、なにかをつかんだ。重そうに抱きかかえ、先生の背後を駆け抜け炎に近づく。

なにをやつてるんだろう。わたしには上手なパントマイムにしか見えなかつた。

玲乃は人差し指で鉤をつくり、ピンをひっこ抜く真似をした。そしてなにかをつかんではすす動作をし、はずしたほうの手を消火器のノズルのように火もとへ向けた。

というか、まんま消火器と同じ動作だつた。架空の消火器で火を消そうとしている。

レバーを握るふりをすると、ノズルを握つてているふりをしているほうの手もとからものすごい勢いで白煙が立ち上つたふりをした。いや、煙のほうはふりじやない。消化剤がぶしゅーっと吹き出してゴミ箱に直撃し、白い粉が炎につつすらとまとわりついた。ベトナムの僧侶がもろに消化剤を食らい、さすがに耐えきれずげほげほむ

せた。

火が消えた。カーテンは裾が黒ずんでほぼボロ切れと化していた。天井も煤だらけ。

玲乃様は教壇に消火器をごとリと置く真似をし、涼しい顔でぱんぱんと手を払つた。先生の後ろをとおつて席に戻り、なにごともなかつたかのように脚を組んだ。行川先生はすでに授業を中断してい、地元の指定暴力団も裸足で逃げ出すような鋭い視線で玲乃の背中を追い、なにか言いたげに顎を上げた。

玲乃様はまつたく動じるそぶりを見せない。ちらつとわたしを見、薄く笑つた。

「なぜ火を消したんじや」

「火事だつたから」

毅然とした調子で答える。内容は『く当たり前なのになにかすごい勇気めいたものを感じた。

「だれのおかげじや」

わたしを指さす。「町田マチ子さん、十五歳。体重三十八・一キロ。友達にお昼ご飯をたかられたせいでまた少し体重が落ちたみたい

全員がわたしを向いた。先生も見る。

「またおまえか」顎をしゃくる。「なぜ消火器のありががわかつた」

「わかつてません。わたしはただ」

「」の状況で、見えていないものを探したわけか」

「あの」明らかに狂っているのは先生のほうなのでたまには毅然としてみよつと思い、できる限り力強く答えた。「そうです」

「そうか」人殺しの目がふつと和らいだ。「よつやくヒントをつかんだようだな」

別人のように穏やかな声。表情にはつすらと笑みさえ浮かんでいる。

「どうしておれが火をつけたかわかるか?」弟子に言い聞かせる師匠のように神妙にうなずく。「おれは、あえてつけたんだ。おまえに大事なことを知つてほしかつた。大事なことはなにか。それはユーダイア・ヨーロッパ・アラブ・ムスリムの宗教でもテクノロジーでもない。織田信長が何年に死のうが知つたこつちやない。ほんとうに価値あるものは、頭の中にあるんじゃない。」にあるんだ

握り拳で自分の胸を叩いた。

「つまり、おのれ自身の心だ。勉強はだれにでも教えられる、だがここんところは おのが何者であるか、いかに生きるべきかといつことは、口じや教えられない。教わるもんじやないんだ。自分で経験し、気づくもの。だからおれは、まちがつていると知りながら火をつけた。生徒のため おまえのためだ。わかるか? おまえはなぜなにかが見えないのかわかつていなかつた。なにが見えないのかもわかつていなかつた。おれはそれを知つているが、自分で

気づいてほしかつた。だからヒントをやつた。火をつけたんだ。涙をのみながら。そしておまえは知つた」

教室じゅうが静まりかえつていてる。

「なあ。教師つてのは、勉強を教えるだけじゃなく、生徒に自尊心をもつて生きていくためのヒントを与える存在であるべきなんじゃないかな。そうだろ？ それが眞の教育だ。眞の教師の務めだ。おれはまちがつたことをしたかもしれん。だが教育者として、おれは自分のしたことに満足している」

三十分後、行川先生は警察に連行されていった。

## 11話 なめなめ先生の想い（後書き）

ようやく次の展開に進めそうです。

## 12話 助けて！ マチ子さん

ようやく初日の授業が終わり、わたしは家に帰った。部屋に戻るなり呪われた制服を脱ぎ捨て、スウェットとパーカーに着替えた。ヘンテコな髪も速攻でほどいた。

携帯電話がカバンの中で震えた。反射的に手をつっこんで携帯電話を取り出す。

帰り際わたしは、せっかくお知り合いになれたということでアヤたんと玲乃様に電話番号＆メアドその他もろもろを交換しましょうと持ちかけた。が、どちらにも断られた。アヤたんは「もう知ってるからいい」と言い、玲乃様はひとこと「イヤ」と言った。ふつうならちよつとく口むところだけど、わたしは気にしないことにした。二十一世紀が丘高校で生き延びるには、気にしないことがなによりも重要なのだ。わたしは初日からすでに悟っていた。

生き延びたくないけど。

携帯電話の画面を見る。メールの着信が千八十四件に増えていた。こっちも気にしないことにしよう。どうせ開いた瞬間に口クでもないうことがぼよよーんと飛び出してくるに決まっている。もうたくさんだ。わたしはカバンに放り込んだ。

ところで、家はふつうだった。今日は当たり前の日常に感謝してばっかりだ。そのうちお母さん産んでくれてありがとうなどと感謝の気持ちをリリックに込めさわやかなピアノの調べに乗つてラップをかますようになるかもしない。それでも田標がはつきりしてるのは自分よりはマシかもしないけど。

母もふつうだった。父もふつうに仕事から帰ってきたし、弟はふつうにバカなままだった。

夕方、キッチンのテーブルで家族四人、ふつうの夕飯を囲む。母（悠子）が話を切り出した。

「高校初日はどうでした？」

ゆつくりと目を動かし、わたしを見る。そして数秒見たあと、自分の茶碗に視線を戻した。目の動かしかたにまで作法があるみたいを感じだ。母はとにかく一片の隙もない。ほつそりとした首を伸ばして姿勢よくイスに腰掛け、海原雄三も青ざめる箸使いでご飯を口に運ぶ。茶道の先生だからかもわからないけど、プライベートの時間にまで道を極めようとするのはやめてほしい。緊張するのだ。わたしも母の指導でかなり姿勢がいい。よく褒められるし悪いことはないと思つけど、代わりになにか大事なものを失つてきたような気がしてならないのだった。

学校どう？ と聞かれればあれこれ考えるものだけど、わたしの場合これしかないという感じだった。

「完全に狂つてる」

母はやつきてまったく同じ動作でわたしを見た。言葉遣いをたしなめるように目を細め、それから「わたしの予想どおりでしょう」といった感じでわざかに眉を上げた。

「わたしの茶道教室でお客様にたずねれば、みなさん一様にこう答えたものです。『あそこだけは受けさせちゃダメよ。頭のおかしな

教師ばかりだから。子供に人生踏み外してほしくないでしょ?』と

「

「そう。まさにそれ

わたしは唐揚げをもぐもぐしながら、思わず箸の先で母を指した。母は「あなたにはいつも失望させられます」といった感じのまなざしでわたしを見つめた。

ゆっくり箸を下ろす。

「あの高校の評判は前々から知っていました」

「だったらそもそも受けさせなきゃよかつたじゃない

「まさかあなたが私立に落ちるなんて」おひたしを口に運ぶ。よく噛んでしつかり飲み込んだあと、つづきを口にした。「想像すらしていませんでした。成績優秀、品行方正なあなたが

79

品行方正が聞いてあきれる。ところでわたしが私立を落ちた理由は、簡単だった。試験会場となる高校の校舎がまるごと見えなかつたのだ。同じ受験生のあとをついていくと、みな同じように正門をくぐり、広大な更地（わたしにはそう見えた）を横切り、ある時点でふつといなくなつた。異次元に転送されるレミングスの行列みたいでかなり不気味だつた。そのうちだれもいなくなり、わたしはぽつんと校庭（らしき場所）に立ち尽くしていた。あのときの無常感ははつきりと心に刻まれている。

「なあ、姉」正面の弟が言つた。

「なんだ、弟」

弟は町田マチ之進といつて、おもて名前方面でわたしと同じ不幸な生い立ちを背負つてゐる。いつこ下の中学三年生で、来年受験を控えている。いろいろ大変なのはわかるけど、その痛々しいビジュアル系のヘアスタイルだけはいかげんやめたほうがいい。

「二十一世紀がいつて合格点どんくらい？」

カラオケ帰りのガラガラ声で言ひ。

「三五点満点で一五六十点」

「それなりじやん。それなりつてとこが逆に不気味だよな」家族を見まわす。「おれ、ぜつたいそこには入らんよ。ランク落としてもほかんとこにする。進路指導にも言われたもん。『死んでも行くな。どうしても受験したいなら、まずおれを殺してからにしろ』って」

「言わざもがな」

母が箸の先一・五センチほど使って味噌汁を呑んだ。父に四つ。「でしょ、あなた」

父は酒で完全に田がすわつていた。

「まあ、あれだ」ろれつがまわつていない。「済んだ」とはしじつがない、つてな。マチ子はあきらめよう。で、前を見据える

という本人はまったく見据えられずにいた。靈体を探して食卓をさまよつ。

「人生、失敗はつきもんだからな。はやめに失敗してよかつたんじやないの。逆に言つと。長い目で見ると。むしろ失敗すべきなんだ。失敗すれば、人間性が こう 」

顔をぎゅっとしかめ、酒浸かりの脳で必死に考えている。と、あきらめたように眉間のしわを解いてわたしに顔を向けた。

「 どうだ、学校楽しいか？」

わたしは無視し、箸をがじがじ噛んだ。楽しいかどうかは「言わすもがな」だ。ではみぞおちがどよんとするような不安を抱えているのかというと、そうでもなかつた。わたしが感じているのは漠然とした不安などではなかつた。はつきりと具体的に目の前につきつけられた、いまそこにあらる危機だつた。

やるべきことも明確だ。

「ねえ、編入つて難しいのかな」

「高校一年の初日でいきなりか」

父が答える。母は答える価値もないといった感じだ。

「調べてみないとな。いんたーねつとかでな」 いんたーねつとがツボに入ったのか、へつへつと笑い出した。「 頭がおかしい高校だから、おまえは脱出したいんだろ? でもあれだ、四月にいきなりほかに編入するつてのも、だいぶ頭がおかしな行動だと思うぞ。どうだ?」

たしかに。酔っ払いにしては冴えている。

「どうちこしても頭がおかしいんだ、おまえは。つていうか　　」

父はスイッチが切れたようにがくんと仰向かた。寝た。

手から焼酎の入ったグラスがこぼれ落ちる。母は顔も向げずにサツと手を伸ばし、グラスの中身を一滴もこぼさずに空中キャッチした。さすが夫婦。

「受験めんどくせー」弟が言つた。『あー死にてー』

「こいつはいつもツイッター並みに本音をつぶやく。勝手に死ねといつも思うけど、母はどうしてわたしにだけ厳しく、こいつはいつもこひに躰けようとしてないのか。夫にも寛容だし。疑問だつた。

そんなこんなで夕飯が終わり、わたしは足をひきずりながら階段を上がり、自室へ戻つた。ベッドにダイビングし、うつ伏せの状態で枕を抱えた。溜に溜めたため息をふあーっと枕カバー越しに注入する。

本日学校で起きた様々できじとが脳裏によみがえつた。フランシュバツクと言つたほうが適切かもしね。わたしはうめいた。意識を失つていたはずの入学式の様子まで鮮明によみがえってきた。とても背の低い校長先生の式辞が

「みなさん、まずは入学おめでとうございます。えー、新しい環境で高校生活を送るにあたり、みなさんは大きな希望と期待に胸躍らせ、いまわたしの退屈な式辞に耳を傾けている」と思ひます

「

力バンの中の携帯電話がういんういん震えている。部屋に入ったときからずっとだ。わたしは枕を顔にぐりぐり押しつける。

「新たな経験、新たな出会い、勉学に部活動、文化祭 高校三年間は、重要です。将来社会人として羽ばたくにあたり、高校生活を精一杯過ごし、充実したものにしていただきたい。もちろん不安もことあるでしょう」

まだ震えつづけている。だんだん神経に障つてきた。

「あー、もう」

わたしはひとりごとを言つてベッドを這い進み、前足から絨毯に下り、四つ足のままカバンに向かつた。单なる思いつきで口を使って蓋を開け、ベロを差し込んで携帯電話のストラップをひっかけ、外に出した。ちょっと頭のおかしいことをしなければバランスが取れないような気がしたからだ。

校長先生はまだ式辞をつづけている。

「二十一世紀が丘の特色、それは多くの変人を育成するカリキュラムにあります」

携帯電話を見る。着信は五千七百四十九件に増えていた。だれなんだ。わたしになんの用があるというのか。そして五千件以上のメールを保存できるわが携帯電話の性能にも少し驚いた。

「みなさん、歴史を振り返つてみてください。どの分野においても、偉業を成した人物はみな変人ではありませんか。変人は世界を大きく変える。なぜか。それは頭がおかしいからです。偉大な発想は凡

人からは生まれません。いまの日本がもつとも必要としているもの、それは変人なのです。変人が必要なのです！ 突拍子もない行動、頭が狂つたとしかいいうのないアイデア 二十一世紀が丘はあなたたちを立派な変人へ成長させます！ 若きヘンテコから完全無欠な変人に！ あなたがたは社会に出たあと、だれにも理解されない変人として世間に後ろ指をさされながら数多くの偉業を成し、後世に名を残すことになるでしょう！ みんな有名になりたい！ 愛されたい！ 尊敬されたい！ だつたらここで学べ！ そして羽ばたけ！ 変人として人生をまつとうしてください！ 入学おめでとう！」

後半プロパガンダ臭を漂わせつつ、校長先生の式辞が終わった。わたしは携帯電話のメーラーを開いた。一覧が表示される。

「助けて！」

どの件名にもそう書かれていた。

## 12話 助けて！ マチナさん（後書き）

ようやく学校の目的が判明しました。「学校側と生徒側の対立」という構図が生まれ、ストーリーが流れ出しそうな感じです。なんとなく。

## 14話 いいかげん助けるー マチ子ちゃん

翌日の放課後、わたしはナベさんを誘つてショッピングに繰り出した。お買い物せずにはいられなかつたからだ。学校は次の日も普段どおりだつた。つまり、いろいろと乱れ飛んだ。それ以上は思い出したくもない。今後正気を保つていくには、少なくともいまの四倍はお小遣いが必要になりそうだつた。

ナベさんは本名を渡辺美加という。とってもふつうだが、中身はふつうじやなかつた。といつてもわたしや高校のみんなみたいにヘンテコな能力があるわけじやない。中学時代の友達は、ナベさんにしつくりきそうな呼び名をあれこれ提案しては実践したが、結局どれも定着しなかつた。ミカ、ミカリン、ミカミカ、メガネだけナベさんはナベさんのままだつた。「はあ？ なにそれ」で、ゼんぶ却下。ほんとうにいい性格をしている。愛想はないしぶつきらぼうだし、メガネの奥にきらりと光るまなざしはいつもだるそうだつたが、なぜかいつしょにいると安心する。中学二年で知り合つてからこれまで「わたしたちつて似てない？」と五十四回くらいたずねかけたんだけど、実際に聞いたりやつぱり「はあ？」と言つぱずだ。

「ケータイ、鳴つてるとよ

わたしたちはお買い物を一段落させ、カフェのオープンテラスで休んでいた。といつても、一段落させたのはおもにわたし。ナベさんが買つたのはチャールズ・ディケンズの短編集だけだつた。

ほとんど口を動かさずに言い、ナベさんはわたしのバッグを指した。

「いいのいいの。気にしないで」

「チェックしないの？ 新しい友達からかもよ」

「ううじゃない。しないほうがいいのだ。」

「ただの迷惑メール」わたしは軌道修正したくてどうでもいい質問をした。「で、どう、高校？」

ナベさんは頭がいい。県でいちばんの進学校にも余裕で合格できるはずだつたんだけど、なぜかナベさんは一番田をえらんだ。理由は知らないけど、とてもこの人らしい。

「んー？ まあまあ」

相変わらず冴えない返事。じわっとコーヒーのストローを加え、音を立てずにひとくち呑んだ。「あんたは？」

「最悪。 つて、会つてから二回、十回くらい繰り返してるんだけど」

「メールあつたよ。オネエから」

どこからともなく携帯電話を取りだし、器用に片手で開いた。わたしに画面を向け、メガネの奥をきらりとさせた。

「マチ子が無視しつづけるのー、ってさ。新しい友達ができたらとたんに知らん顔かよ、って書いてる」

「はあ？」

携帯電話を奪い取り、メールを読む。たしかにそう書いてあつた。

ちなみにオネエは、唯一わたしと同じ中学から一十一世紀が丘高校へ入学した子だ。大親友というほど付き合いはなかつたけど、まあ小親友くらいだ。でも親友には変わりない。

「無視つて 一度も会つてないんだけど」

「知らんよ、あたしに言われても」

たしかに中二のときとちがつて、クラスがちがうと遭遇する確率も減る。だけど無視した覚えなんてない。この一日間、一度も見かけていないのだ。

もしかして。

「うーん、うーん。

「あーもう、イライラする」ナベさんがわたしのバッグに手を伸ばした。「ピンクローターでも仕込んでんの？」よこして。あたしが見る

わたしは背中側にバッグを隠した。チャイをすすつとすすつて時間稼ぎ、なんすかそれという顔をナベさんに向けた。「ローターつて？」

「は。ふつうはローターつて訳さないんだけど そうだね。知らないんだからしょうがないつか。そうかそうか」

それはともかく。わたしはさりげに話題を軌道修正し、結局高校の話をすることになった。

「 それはいいね」

話し終えると、ナベさんが感想を漏らした。話をしたせいで、わたしの脳裏には一連の凶行が鮮やかによみがえつていた。

「いい？ なにが？」わたしが言った。

「楽しそうじゃん。いかにも新天地って感じで」

「どーこーがー？」わたしはぐつと首をもたげ、つばを飛ばしそうな勢いで反論した。話が盛り上がり興奮したりするといつも出る癖だ。「あれば高校生活とは言わないよ。アトラクションだよ。TBSでやつてるやつみたいな。担任の先生は時間をぐだぐだにするわ、ドアはしゃべるわ、女の子にいきなり体重を当てられるわ、保健の先生にスカートの寸法直しをさせられるわで」

「はーあ？」ナベさんはテレビドラマを見る会社の重役のようになりふんぞり返つた。「なんだね、それは。白眉夢かいね」

思わず口もる。とにかくナベさんはわたしのヘンテ口能力に気づいているのかという問題があるんだけど、結論から言つと、わからなかつた。鋭いナベさんのことだから気づいているのかも知れないし、ただの変わった子だとしか思つていかないかもしれない。気づいていよつとあえて言わないというのもまた、ナベ流だといえる。わたしもあえて相談しよつとは思わなかつた。これまで。

「まー、じつちも多こよ、へんなやつ。どこにでもいるよね。さつきあんたが言つたことは、真に受けてないよ。あんた大げさなところがあるから。あたしはあんたが慣れない環境を拡大解釈し伝えてるんだって解釈してるわけなんだけど」

「ういーん、ういーん。

「よこせ」サッと立ち上がる。今度はバッグをひったくられた。「んー、なになに」

わたしはカップに口をつけつつ、上田遣いでナベさんの反応をうかがつた。

「助けて、助けて、助けて、助けて、助けて、掛ける七千六百九十一件」

親指でぐるぐるスクロールしながらつぶやく。そして顔を上げ、わたしを見た。

「助けないの?」

## 14話 いいかげん助けるー マチ子ちゃん（後書き）

13話は縁起が悪いので飛ばしました。で、今日はとてもふつう。ふつうの人も出さないとゲップが出るよなあ、変人ばかりじやと気づいたので。

## 15話 そりまでロッカーが壊つならば

昨日いちばんのグッズアイデアは、携帯電話のバイブ機能をオフにすることだった。これでもう微振動に悩まされずに済む。今日登校して朝までに起つたことは、並木通り前のローソンが突如復活していたことと、一年一組の教室の位置が若干変わっていたことくらいだった。

あと、ロッカーに話しかけられた。

お買い物のあとナベさんに言われたこと。

「オネエが見つからないんじゃなくて、気づいてないだけなんだよ。あんた、いつもぼんやりしてるから。見逃してんの。聞き逃してんの。いろいろとね」「ね」

というわけで、わたしは校舎に入るなりイヤホンをはずして周囲の音に耳を傾け、なるべく目を大きく開き、対象をひとつひとつ確かめるようにものを見ながら教室へ向かった。あまりにもわたしの目が皿すぎたのか、何人かにぎょっとして振り向かれた。それでもオネエと国交断絶してしまうよりはマシだ。それにこれで、見えないにかが見えるようになれば。

いない。それともいないよう見えるだけなのか。わたしは二歩ごとに後ろを振り返りながら教室に入ろうとして、意地悪なドアに側頭部をぶん殴られた。

頭を振る。というか、単によそ見していただけかもしね。

「荷物を預かってあげています」

「いつまでロッカーを開けてカバンを入れると、ロッカーに話しかけられた。」

「助けてあげてください」

閉じようとする反対側にぐつと力がこもった。ゆっくりと手を離す。ロッカーはかすかに扉をぱくぱくさせ、陰気な声でつづけた。

「現実から逃げないで。メールを見てください」

ロッカーは口を閉じ、ガシャガシャ音を立てて縦横斜めにゆがんだ。梅干しの種を出そうとしているみたいだ。

ペッと吐き出した。慌ててキャッチする。

携帯電話だ。バッテリー部分が異常に熱くなっている。二日からこら休みなく働かされ、もう過労死寸前といった感じだった。

「あなたの力が必要なのです。それにあなたは、ぼくに借りがある

「借り？」

思わずロッカーに答える。まわりを見まわしたが、学校の備品と会話するわたしにへんな顔を向ける子はいなかつた。当然かわたしは思い直した。みんなのほつがよつほどへんだから。わたしなんかかわいいもの。

「借りつてなにが？」わたしはふたたびたずねた。

「当然でしょ、ロツカーなんだから」

「ぼくをロツカーだと思つていらっしゃるんですか?」

「もちろん」

くつついた両隣のロツカーを巻き込んでガシャガシャとがぶりを振つた。

「あなたには失望しました」

わたしのカバンを勢いよく吐き出した。胸にじすんと当たる。

「いいですか、当たり前を当たり前と思つてはいけません。ぼくらロツカーがどれほど重要な役割を担つてているかを思い出してください」

「カバンなら机の横にひっかけるからべつに」

「ぼくらは荷物を預かる。保管する　あなた以外のだれにも触れさせないように、そして荷物はたいてい、本人自身よりも重要な場合が多いのです。とくに高校生の場合は」

中身がカラッポだと言いたいのだらうか。

「そうです。あなたはとくにそう。だからぼくが選ばれた。ぼくはマサチューセッツロツカーレ大学（MIT）を首席で卒業している。建築学の博士号とハーバード・ロースクール卒業後は弁護士資格を取得し

「はよー」

正反対の底抜け楽観声に話しかけられた。アヤたんがするするつと背中をとおり抜け、ついでにわたしのお尻にひとつと手を触れていった。「席すわんなんよ。今日は玲乃お嬢様はいらっしゃらないから」

「どうして?」

「転校していくの」

「はあ?」

ロッカーが「失礼ですがよろしいでしょうか」という感じでわたしの肩に触れた。わたしは振り向いた。

「あなたに質問してよろしいでしょうか?」

開始のチャイムが鳴った。

「もう授業はじまるんだけ?」 時計を指さす。

「ひとつは「ロッカーは眞実のみを答える」、ロッカーは完全に無視してつづけた。「ひとつは「ロッカーは虚偽のみを答える」、問いかけています。答えるのはひとつのロッカーだけです。答えはイエスかノーのみ。わあ、問い合わせなさい。いすれが正しきロッカーなのかを」

隣のロッカーが軽くうなずいた。なんのこつちや。

「答えはこうです」わたしが考えようともしないうちにロッカーが言った。「いずれかのロッカーを指さし、『こちらが正しいロッカーかとたずねたとき、おまえはイエスと答えるか?』と問うのです。眞実のみを答えるロッカーならば、正しければイエス、まちがつていればノーと答えるでしょう。嘘つきロッカーならば」隣のがニヤリとした。「正しければウソを言つのだからノーと言つはずだがイエスと答えるかとたずねられているのでイエスと答える。まちがつていればイエスと言つはずだがイエスと答えるかとたずねられているので答えはやはりノーとなる」

ロッカーは言葉を切つた。しゃべりすぎたのか若干息切れしている。

「正しいロッカーってなに?」わたしはとりあえずたずねた。

「ぼくの賢さを知つてほしかつただけです。それだけ」パカツと扉を開ける。わたしはそろそろとカバンを入れた。バタン。ガシャツ。鍵がかかつた。「賢いぼくはもう一度忠告する。携帯電話を見なさい。そして助けてあげてください」

それつきりだんまりになつた。わたしはインフルエンザ並みに熱を持つ携帯電話を眺めながら、玲乃様の席に着いた。転校してくる? よくわからないが考えないに超したことはない。

いちばん新しいメールを開く。件名はやはり「助けて!」だった。先生が来ていなことを確認し、本文を読んだ。

「わたしの名前は佐藤洋。といつても、富城県出身の元プロ野球選手とはなんの関係もありません」

## スクロール。

「わたしは二十一世紀が丘高校二〇〇八年度の卒業生です。そしてわたしは『飲酒運転をなかつたこと』でできる『能力』を持つています。専門的な話になるので割愛しますが、ようは検問でひつかかつたらアルコール検査を拒否し、『ああわかつたよ、飲んだよ、飲みましたよ』と逆ギレし、あらかじめ用意しておいた酒瓶をぐいぐい煽るのです。そうやってなかつたことに対するのです。とはいっても、あなたにはなんのことかさっぱり理解できないでしょうね」

それでもたぶん捕まるような気がした。

「いまではわたしは完全無欠の変人です。みなそうです。そう教育されたのです。あなたがいまかよつて二十一世紀が丘高校に。校長の式辞を聞きましたか。洗脳はそこからすでにはじまっている。わたしはいま、働いていません。いわゆる二ートというやつですか。変人すぎてだれも雇ってくれないので。それに近々、自己破産の手続きを行う予定です。働いていないのに酒を飲み過ぎたのです。いま鼻で笑いましたね？　しかしあたしは、酒を飲まなければいけないのです。検問があつたとき素面だつたらどうします？　どうやつて検問で、警官に飲酒運転を疑わせることができるのです？　粕漬けは嫌いです。そしてわたしの人生は崩壊しました。床に落とした一升瓶のように」

ガラガラガラ。富田先生が入ってきた。携帯電話をサッと机にしまいこむ。

「マチ子さん、助けてください。わたしをこの地獄から救い出してください。みんなを救い出してください。そして 気をつけて！　変人が偉業を成すなど、嘘つぱちもいいところです。変人は変人

でしかないのです。変人になつたが最後、つらく厳しい残りの人生が待ち受けています。助けて！ そしてどうか卒業しないで！」

最後の文面が脳みそにこびりついている。「卒業しないで！」先生は教卓に立ち、いつものだるまさんが転んだ方式でいきなり時計を見上げる。

「えー」向き直つて言つ。「転校生が来ました。みなさん仲良くなしてあげてください。少なくともわたしがいるところでは」

全員がドアに注目する。髪をサッと手で払い、ナイスボディの女の子が胸を張つて登場した。アヤたんの言つとおり、たしかに玲乃様は転校してきた。

「転校できる能力だよーん。玲乃様は好きなときに転校しつづけることができるの。といつても、在籍している高校に限るんだけどねー」

「というメモがアヤたんから飛んできた。同じ高校に転校しつづけてなんの意味があるのか。」

「禊玲乃。よろしく」

フツと笑みを浮かべる。三日前にすでに会つてているのに、みんなは（とくに男の子は）興味津々といった感じで玲乃様を見上げている。なるほど、このためか。

## 15話 そこまでロッカーが言つならば （後書き）

だんだん形式が似通つてきた。まあひっぱりすぎもひっぱりすぎないので、先へ進みます。

## 16話 いつしょにい?

平凡と席にすわる玲乃様の周囲に、妙な地場が形成されている。転校生が来ると（しかも美人の女の子だと）たいてい探し合ひみたいな空氣になる。休み時間になると女の子はこれまで以上の結束力で仲良しグループとひつつき固まり、気にしていませんよと言わんばかりに転校生とはまったく関係のない話題で大盛り上がりした。だけどみんな神経の七十パーセントほどが玲乃様のほうに向かっているのは見え見えだった。

男の子はもっとわかりやすい。トイレに入ったとたん表情も口調も言つてる内容も豹変する女の子とちがつて、ちょっと離れたところからひそひそ話し、ときおり羨ましそうにチラ見している。たまに我慢できなくなつたらしい子数人が席を立ち、話しかける。玲乃様は常に超然としている。自信たっぷりな笑みを口元に浮かべ、おもしろがるように男の子を見まわしながらアホな質問を余裕でいなしている。するといつの間にか、他の子も引き寄せられるように続々と集まつてくる。人だからで主役の姿が見えなくなり、相対的に脇役にされた女の子はなるべく離れたところから意地悪っぽい視線を送つては「あーやだやだ」とため息をついた。

というのが毎日つづいた。

あのお嬢が転校しまくつているのは、たぶんああいうのが好きなんだからだと思う。それはいいとして、まわりが毎日おんなじように新鮮な反応をするのが理解できない。お嬢のボケに乗つかつてあげているのか、それとも周囲に転校生として認識させることもできる能力なのか。わたしでさえお嬢が転校生ではないことに気づいている。アヤたんも気づいている（例によつてかなり不気味がつては

いるけど)。

もしかしたらわたし、以外と見えているのかも。

身勝手な転校生の話は置いといて。お昼休み、わたしはアヤたんと図書室にいた。

「 いっしゃ来て

わたしはそつと言つてアヤたんの手を引き、戦前からあるんじやないかと思えるよつた汚らしい本が並ぶほこりつぽい本棚をとおり抜け、隅の暗がりに落ち着いた。アヤたんはなんでか知らないけど異常に興奮していた。顔を真つ赤にし、目をきらきらさせてわたしを見上げ、わんこみたいにハアハアいつている。この子だいじょうぶだううか。

「じつは

望まないなにかがはじまるまえにわたしは話を切り出した。携帯電話をいじくつて二〇〇八年度卒業の〇八佐藤なんとかさんのメールを表示し、アヤたんに渡した。

アヤたんはつまらなそうにむつつりし、受け取った。まつげの下の眼球をわずかに動かしつつメールを読み進める。

「『 どうか卒業しないで』」

一通読んでも二通読んでもいつしょだと思ったので、あれからわたしはざつとほかのメールを眺めてみた。どれもだいたい同じ内容だった。物心ついたころからヘンテコな能力を持ち、二十一世紀が

丘高校に入学し、完全無欠の変人として世に送り出され、偉人になるどころか社会不適合者として悲惨な人生を送っている。学校の方針はまちがっている。卒業してはいけない ぜんぶ真に受けければの話だけど。そしてどれもこれもわたしに助けを求めている。

「どう思つ?」

「どうちが? 助けるほう? それとも卒業のほう?」

「えーと」アヤたんは怒ったようなへの字口でわたしを見つめている。かびくさい空気を吸い込み、鼻がむずむずしてきた。「卒業の」

クシッ! クシッ!

「いまのくしゃみ?」わたしにたずねる。

「そう」鼻をすする。

「あたしに聞いてるの? どう思つつかって」

「へッ!」

「おっさんみたい」アヤたんはほそりと言つた。「どうちがでもいいよ。あたし、自分の意見持つてないんだ。頭の中は他人の情報でいっぱいだから。自分が入り込む余地がないの。だから正直、どうでもいい。どうでもいいって考えたんじゃなくて、考えられないからどうでもいいの」

「変人として教育されるんだよ? なんとかしなくていいの?」

「なんとかって？」

わからない。

「助けてあげるの？」

それもわからない。

「どうしてマチ子さんに助けを求めてくるんだ？」

「そう、それ。不気味でしょ？ なんでわたしなの？ そう思わない？ わたしなんてなんの取り柄もないし、それどころかふつうの人が見えるものまで見えないし、それに」

アヤたんがじっと見上げてくる。わたしの言葉はいつの間にかフードアウトしていた。

「不気味といえば、あの転校生が言つてたよね、マチ子さんの能力について。『その状況で見えてほしいものが見えない』って

正直覚えていない。「どうだけ？」

「なんであいつのほうがあたしよりマチ子さんに詳しいわけ？」怒り出した。「あつたまくる。転校生のくせに。マチ子さんはあたしがいちばん詳しくなきゃいけないのに」

「ほんとかどうかはわからないよ。できとうに言つたのかも」

アヤたんは相変わらずむーんと怒っていたけど、わたしがそう言

うと少し悲しそうにふつと目もとが変化した。わたしとしては、ほんとうにどうしていいのかわからない。この高校にも、能力がうんぬんといったことにもぜんぜん慣れていない。この高校は、疑う余地なくヘンテコだ。たしかに三年もいたら頭がおかしくなるはず。でもほかの高校に編入はできないし、先生に「おたくらの教育方針はまちがっています」とも言えない。言つたところで聞いてくれるとはとても思えない。もつと賢かつたら、テレビドラマみたいに謀略を張り巡らせ、学校と対決し、そして勝利を手中にできるのに。

卒業したらどんな変人になってしまつたのだろうか。と、わたしは突然ひらめいた。

「話、聞きに行つてみない？」わたしは言つた。

「ん？」

「『』の佐藤なんとかさん』。というか、だれでもよそそうだけ。ほんとかどうかわからないけど確かめないと不安だし、ほんとだつたとしたらどのくらい悲惨な人生になつてるのか気になるし』

アヤたんのまぶたが食虫植物みたいにパカッと開き、大きな瞳がグリッと上方に向かって動いた。若干疑わしげなまなざしでわたしを見る。

「『行つてみない？』とはつまり、あたしといつしょにひとつへ。

「もちろん」細かく十一回くらいうなずく。「行かない？」

「つまりあたしを誘つてるんだ？」

「もちろん」

「つまり今日、授業が終わったらふたりでお出かけするんだ? ふたりつきで」

「 話を聞きたくな」「やんわりと訂正する。「だからわたしと付き合ってくれる? あ、付き合つてこいつはそういう意味じゃなくて」

「付き合つてーーー。」

それがNGワードだと気づいたときにはすでに遅かった。アヤさんはぴよこーんと飛び上がり、とたんにもとのアヤたんに切り替わった。わたしはお休み終了のチャイムが鳴るまでたっぷりとアヤたんに抱きつかれ、胸に顔をぐりぐりこすりつけられた。

「こべいべいべい」

## 1-6話 こっしゃりやー（後編）

いろいろ見逃している感が。ソリもでぐねとかひかでにインプロではなくなっています。頭の中に話題がどあがつてくるんですね。修正点もなつきり見えていぬし。

## 17話 愛犬にフルネームを『与える男

放課後、わたしはアヤたんにひきずりられるよつとして校舎を出た。駐輪場に入り、愛車のママチャリ ブレーキがぜんぜん効かない句をひっぱり出し、外へのろのろと押した。アヤたんはどうしてもホッピングをやめられないようで、ボブのショートヘアをぱたぱた飛び跳ねながらわたしの到着を待ちわびている。八歳の女の子の頭上にブルドーザーでチロルチョコを二十万個ほど降らせたらこんな感じになると思う。男の子ならつまご棒。

この子、友達いなんだろ？か。ふと考えた。やついえはわたし以外の子とつるんでいるところを見たことがない。

自転車の森から脱出し、サドルにまたがり片足立ちする。振り向いてたずねた。「チャリン」は？

アヤたんは答える代わりににーっと笑みを浮かべ、荷台にお尻を向けてひょいと飛び乗った。お姫様すわりでわたしにしがみつく。

「さあ、こつでもいいよ」

「なにが」

「この状況だと『いつでも出発していいよ』って意味だけど」アヤたんが言つた。「ほかのもどんとこ。なんなりいまーこでー」

わたしは急いで出発した。正門を抜け、枯れ木通りを抜ける。両端にしづらつと並ぶ桜の枯れ木はいつ見ても陰惨だ。

「きれいな桜。いつしると胸の奥がほんわりしていくね」

「どうが？ 地獄の一丁目って感じなんだけど」

「そうか。マチ子さんには見えないんだ。このきれいな満開の桜が」

「ふりふりと角を曲がる。なにげなくコンビニを見てちょっとした。ローンが佐藤商店に逆進化していく。」

「あれ、なにに見える？」わたしは指をした。手を離したせいで前輪がかくつと横を向く。

「フアミスマ」

「フアミスマ」

「だつて緑色だもん。なにに見えるの？ 佐藤商店とか？」

「そんなこんなでわたしたちは、一〇〇八年度卒業生、佐藤洋さんの自宅に到着した。

太ももに軽い張りを覚えつつ、わたしはチャリンコから下り、佐藤さん宅を見上げた。アヤさんは元気いっぱいだ。当然か。道中アヤさんがしたことと言えば、わたしのおなかにしがみついてぶつぶつぶやき、ときたまおなかの上とか下とかになにかの意図を持つて手を這わせただけだった。

「一軒家だね」アヤさんが見上げて言った。「小豆色のトタン屋根。築後三十七年」

佐藤さんは事前にメールをやり取りした。携帯電話はいつも鳴り止まず、ひと文字打つたびにメールが着信した。どれもこれも助けて、助けて、助けて。授業をひとつまるまる使ってやつとこ住所を聞く。「うまいこと学区内だつた。学校からチャリンコ時間で十五分と離れていない。今日の放課後に行つてもいいかと言つと「とんでもない」と書かれた返信が来た。どっちなんだ。

それはいいとして。気づくとアヤさんにしがみつかれていた。体が慣れすぎているようだ、なんとかしないとこのままでは などと考えつつ、せまい庭先に足を踏み入れる。

「ワン！ ワン！ ガツ 」

喉になにかがひつかかり気味なわんこの吠え声がした。びくりとして顔を向ける。アヤさんはわたしを突き飛ばすように離れ、大きく一步あとじさつた。壁際の茂みにがさつと足を取られ、慌ててバランスをとる。顔がひきつっている。

「ワワワン！ ワワン！ ガツ 」

柴わんこだつた。犬小屋につながれ、わたしたちに鼻先を向け、一定の間隔で吠えでは喉をつまらせを繰り返す。小屋はご主人のと同じすすけた小豆色の屋根で、わんこの体で半分見えないけどフレートには「パク」と書いてあつた。

「ワン！ ガツ 」

「ダメダメダメ、犬はダメ。ほかの動物もしかり 」 アヤさんが聞いたことのないひきつった声でまくし立てた。「なぜなら動物はなにも考えてないから」

わたしは逆に柴犬大好きっ子だった。毛並みは若干荒れているが、なかなかかわいい。「パクー。いい子いい子」と呼びかける。「ガツ！ ガツ！ ハツ！」窒息死しそうな吠え声。パクはさらにテンションションを上げ、ぐるぐる円を描くように暴れまわった。鎖が踊り、体に隠れていたプレートがぜんぶ見えた。

フルネームはパク・チソンだった。

犬にこういう名前をつけるのは感心しない。さすがわが校の先輩だと思った。そしてべつのほうから、このまま引き返したほうがいいんじゃないかという声が聞こえてきた。

「ひーつ！」

とくに意味もなくアヤたんがお尻から茂みに沈みこんだ。手を差し出し、救出する。「だいじょうぶ、吠えるのは最初だけだよ。そういうもんなの」

「なんで犬の考えがわかるのー」声がひっくり返っている。それから怨念めいた声でぶつぶつとつづけた。「い、犬だ、犬　犬は殺

せ　」

逆徳川綱吉だ。

と、玄関の引き戸がガラガラと開いた。わたしは振り返る。サンダルをずりつと鳴らし、三日は風呂に入つていなそうなジャージ上下の男性が姿をあらわした。

## 17話 愛犬にフルネームを与える男（後書き）

アヤたんは完全にレズキラになつてしましました。潜在意識に秘められた欲望ですね。あとさわやかレズなら女主人公でもいけるんじゃない？ と思つたり。どうなんでしょうね実際。

## 18話 敬語も使えないようなやつは社会人失格だ！

「　メールの人？」

愛犬に韓国人サッカー選手の名前をつける男が言った。寝癖がつきすぎてテカつた鉄腕アトムみたいになつていて髪をがしがしこく。半透明の粉が舞い、夕日を受けてきらきらと輝いた。そして肩に降り注いだ。

わたしは顔をしかめないように注意しつつ、よそゆきの声で答えた。「はい、メールの人です。」んばんは　」

「あたしはメールの人を愛してる」アヤたんが言つた。「片思いなの」

佐藤洋さんらしき人はまったく表情を変えず、目だけを動かしてアヤたんを見た。

「町田マチ子さん」

「そうです。メールの件でいらっしゃいました　」

やぶにらみの田がわたしを捕らえた。メールによると無職のひきこもりということなので、たぶん一日じゅう部屋でパソコンの前にすわってゲームでもやっているにちがいない。いつだつたかNHKのニュースでそういうのを見たことがある。

「ふつう自分にいらっしゃったって言わないよ」ぼやっと言つた。

「あ すみません」

たつふり一十五秒ほどわたしをにらみつけ、それからぐるりと背を向けた。「 入つて」

奥に消える。わたしはアヤたんと顔を見合せた。

「どう思う?」 ささやく。

アヤたんは答える代わりに例のチロルチョコスマイルでにんまりした。「えつ?」

そんなわけでわたしたちは佐藤洋さん宅にお邪魔した。靴を脱ぎ、そろそろと進む。中は薄暗く、板の廊下は歩くたびにぎしぎしと音を立てた。家じゅうにまとわりつく怨霊が取り憑いたような雰囲気はいいとして、わたしとしては佐藤さんらしき人が自己紹介もせずに裸足で一階に消えたのがかなり気になっていた。お客にスリッパも用意しなかつた。母ならこういうもてなしあげつたに許さない。たぶん佐藤さんは一歳児向けのピアノ教室からやり直させられるだろつ。

「一階に上がつていいのかな 」

たずねているそばからアヤたんはとんとん一階に上がり、姿を消した。あれ、なんかスカート短くなつてない?

一階は物音ひとつせず、廃屋のようだつた。台所も居間も真つ暗。二階はさらに陰惨だつた。一歩進むごとに、なにか見えないものに押し戻されているような感覚を覚えた。わたしのことだからほんとうに見えていないだけかもしれないけど

そして佐藤さんの部屋は、さしづめ伏魔殿といったところだった。

「入つて」陰気に言ひ。『好きにすわつてよ』

すわれる場所がなかつた。洗濯物と食べ散らかしたコンビニの容器と紙コップの山だ。床さえ見えない。ソファはあつたが、鼻をかみまくつたのかまるめたティッシュがいくつも転がつていて、おまけに脱ぎっぱなしたよれよれのトランクスが背もたれにひつかつていたのでとてもすわる気にはなれなかつた。洗いすぎなのか洗わなすぎなのか、パンツは白と水色のストライプが融合していくまったく新しい色に進化していた。

アヤたんでさえ判断に困つている様子だつた。あんぐりと口を開けて見まわし、洗濯物の海に膝下まで埋もれながら立ち廻りしている。

「あの、外で話しません?』

わたしは反射的に提案した。声がひきつっている。佐藤さんはじろりとにらみ、おそろしく背もたれの長いメカニカルなイスに腰掛け、慣れたしぐさでゆつたりともたれた。パソコンのデスクにはモニターがふたつとキーボード、携帯電話がみつと、NHKの番組で見たようなフィギュアが数え切れなほどの置かれていた。

『助けてほしい、』のぼくを

事務的な声。そつだりつわたしは素直に思つた。同じ立場ならわたしでも助けてメールのひとつも送るはずだ。

脚を組んでつづける。ジャージの裾はジッパーが壊れてツマミの部分がぱらぱらしていた。

「助けてほしー」また言つた。「助けてほしーんだ」

「どう」「わたしは口もつた。そういうばなんのために来たんだっけ? アヤたんを見る。アヤたんはおつきな目玉をぐるつとまわした。「やうだ。あの助けるつていうか、わたしたちはまずお話をお聞きになりたくて」

「お話をうかがう、だろ」また敬語を指摘された。「なんでわからぬのかな。『お聞きになる』は尊敬語だろ。目上の人に対するとときは謙譲語を使つのが正しいんじゃないかな。もしくはただ『聞きたくて』でもいいんだ。へたに敬語を使おうとするから『アイスカフュラテ』でよろしかつたですか?』なんてへんて『敬語が幅を利かせるようになるんだよ、まつたく。世の中腐り切つてるよな? 失望だよ。とにかくでなにか飲む?』

いまさらだけど帰りたくなつた。世の中より佐藤さんと部屋のほうが真つ先に腐るんじゃないのかとPsi了口には出せなかつた。

進められたなにかの飲み物は丁重に辞退し、やつやく佐藤さんの話をおうかがいすることにした(立つたまま)。

「そう、ぼくはきみたちのかよつー十一世紀高校の卒業生だ。飲酒問題を抱えてる

非常に汚いマグカップを煽つた。非常に長いゲップをかます。

「で？」と佐藤さん。

「で？」とわたし。

「で？」ついでにアヤたん。

「話を聞きたいんだろ」

「ああ　そう、そうです」やつぱりなにを聞き出すか忘れてしまつたのでアヤたんを見る。アヤたんはふたたび目をぐるりとし、ひとことでは言い表せない複雑な動作でわたしに伝えてきた。それで思い出したわたしもすごい。「つまりですね、どうして卒業してはいけないのか　ていうか、高校の三年間でどういう教育をされて

その、ていうか、佐藤さんがそんなふうに　あの、人生が狂つてしまつたのか、お聞きしたいんです。その、ていうか　」

「あのその言こと過ぎだろ」佐藤さんはぴしゃりと言つた。「何回『ていうか』を使うんだよ。ひとつで要約できないの？　まったく

「

わたしは思わず天を仰いだ。板が腐つてているのか長方形の穴ぼこが開いている。そして失礼と知りつつも「あー」とうなつた。もう帰ろう。ほかにも候補は一万件近く溜まつてているんだから、もう少しマジック変人に当たつたほうがいい。

と、アヤたんが洗濯物をじやぶつとさせ、一歩進んで言つた。

「なんで犬に『パク・チソン』なんて名前をつけたの？」

18話 敬語も使えないようなやつは社会人失格だ！（後書き）

さあ、どうしてなんでしょうか。答えは明日出るはず。たぶん。  
それにしても進まないぞ。

## 19話 今晚のオカズはひよークラフ

「なんだって？」佐藤さんが言った。

「だから、なんでパク・チソンなの？」アヤたんが言った。「あたしとしてはそれ以前に犬を飼っていること自体が疑問なんだけど。あんな、言葉も話せないバカな生物を身近に置くなんて」

「話がよけいややくしくなつてきた。そしてわたしはまたまたなにを質問しようとしていたのか忘れてしまった。」

「飼つてはいない」佐藤さんが早口で反論した。

「じゃあおもての柴は？」

「パクはぼくのパートナーだ。対等なんだよ。犬じゃない。仲間なんだ。だから」

佐藤さんは無精ヒゲの生えた顎をこちらに向けてマグカップを煽り、中身を飲み干した。「かー」と熱い息を吐き、長大なゲップをかます。たぶん予想は外れていないと思うけど、中身はお酒だ。佐藤さんは真っ赤な顔をしていて脂ぎった髪が額にべつたり張り付いている。そしていま気づいたんだけど、部屋はなんとなくすえたにおいがしていた。

「対等なんだ。だから名字をつけた。名字がなければ出生がわからないじゃないか。あまりにもかわいそうだ」

「佐藤にすればいいじゃん

「あー」

佐藤さんははうなつて、モニターの横にあるウイスキーかなにかの瓶をつかみ、マグにビールを注いだ。乱暴に戻すと、フィギュアにぶつかつてもつれ合つように洗濯物の海に落とした。

グビッシュ、グビッシュ。一気飲みした。

「ああ　いい。いい感じだ。もう少しで致死量に達する」その言葉に偽りはないわうだつた。田は半ば白目を向き、阿呆のよつて口を開けながらぐいぐい揺れている。「いいぞ。血中アルコール濃度がいい具合だ。そろそろ運転したくなつてきた」

「あのー」わたしは口を開いた。「それよりわたしの話を　できれば高校在学中ごじのような教育を受けたのかを教えて　」

みなまで言えなかつた。佐藤さんはいきなりびくつと上半身を痙攣させ、きよろきよろした。

「やうだ。検問。ねずみ取りはどじだ？」

イスをぐるつと半回転させ、かがんだ。段ボールから平べつたい銀色の機械を取り出す。イヤホンを耳に押し込み、つまみをいじくつた。

「いいぞ。近くだ」猫背で顔を近づけ、熱心にのぞきこむ。「警察よ、おれを捕まえてみろ。検挙してみろ。腰抜けの能なしどもが。おれは逃げも隠れもしないぞ。酒は飲むけど　」

「警察無線の傍受ね」とアヤたん。

わたしはかぶりを振つて、部屋に一步踏み込んだ。なんだか腹が立つてきた。なんでわたしに助けを求めてきたのかもビックリやつたらわたしが助けてあげられるのかもまつたくわからなかつたけど、この際そんなことはどうでもいいという気がする。仮に他の人は助けてあげるにしても、こいつだけは「めん」いつも。「一〇〇八年卒業だから、佐藤さんはたぶん一十一歳くらいだろう。こに年して自分のことしか考えてない。ほかにできることがないから、唯一の得意にしがみついているのだ。悩みがあるのはみんな同じなのに。

「質問に答えてください」わたしはぴしゃりと言つた。「なんのために呼んだんです？」せつから来てあげたのに、こきなり酔っ払つて

「そんなこと、だつて？」無線機に顔を向けながら言つた。「きみたちにそんなことをそんなことと言つ権利があるのか。敬語もできないくせに。どうすりやいいんだ。じゃあぼくはどうすりやいいんだよ？　あ？　いつたいどうすれば？」

うつろな無表情でぼくはそとしゃべつていだが、次第に意識が警察無線から離れていくのがわかつた。天井付近を漂い、やがてふつと現在から消えた。なぜかわからないが、見えた。

佐藤さんの下まぶたに涙がこじんできた。

「みんなそうだ。飲酒運転は悪だと決めつかる。ぼくはなにもしないのに」

「悪だよ」アヤたんが口をはさんだ。「悪こじりしてねよ」

佐藤さんは無視する。「ぼくから飲酒運転を奪つたら、もうなにも残らないんだ。なんとかしろって？　は！　いまさらどうすればいい？　どうやって生きていけばいい？　生活のことじやない。ほくの自尊心のことさ。できることをせず、みなと同じ人生を生きる。そこに人間として生きる意味はあるのか？　ただ生きるだけなら簡単だ。だけじゃ動物と　犬と同じじゃないか。だからだよ。だから犬にパク・チソンとつけたんだ。ぼくの人生は犬並みだつていう意思表明さ。ぼくにはできることがある。世界を変えられるんだ　おもに飲酒運転業界で。だけど天才は世に理解されない。そしてはやく気づきすぎたのがまちがいだつたんだ。ぼくは神童だつたんだ。なのにいまはこんな　ああ　」

ガラガラガラ。顔を押さえて悲嘆に暮れている佐藤さんをなんとなく眺めていると、玄関の戸が開いてだれかが入ってきた。楽しそうに談笑している。弾けっぷりからすると年の近い男の子だ。

一階に上がつてくる。どこかで聞いたような声。

「おまえ、ちやんと見てろつて言つたら？　いつぞの段階で工口本がひよこクラブにすり替わったのか　」

田澤だった。もうひとり、真っ黒顔の丸坊主がついてきた。

ふたりはわたしを見てぎょっとし、立ち去つた。

「町田さん？」田澤がかなりおびえた様子で言つた。

「町田つて？」

丸坊主が言った。田澤の脇をすり抜けて近づいてくる。いかにも野球漬けですといつ零困気が漂っている。わたしは一步あとじをつけた。

わたしにチラシと皿を向けたが、田澤の幻視と正反対でまったく興味なしといった感じだった。部屋をのぞきこみ、佐藤さんに声を掛けた。

「兄ちゃん、酒買つてきた」

わたしはアヤたんと顔を見合させた。すっかり忘れていたけどアヤたんは立ちっぱなしの洗濯物に埋まりっぱなしだった。なにかの病気感染するのも時間の問題だと思った。

佐藤さんはうなだれたままだった。と、顔から片手を離し、よこせという感じで手を振った。

「酒？」わたしは丸坊主にたずねた。あ、思い出した。田澤の前の中席の子だ。「ていうか、兄弟なの？ ジャあ名前は佐藤？ だっけ？」

「『ていうか』って言つた、佐藤兄たぶんがつぶやいた。「それに佐藤は名字だ。名前じゃない」

「おれ、佐藤じゃないよ。兄貴だけ」

「兄弟なのに？」

「あー、しまじろうだ」アヤたんがざぶりと洗濯物から抜け出し、舌を出しながら這い進んできた。廊下に出るとわたしを見てつづけ

た。「これ、島。」の一家は親兄弟ペット全員名字がちがうの。能力つてわけじゃないけどね。情報伝えるの忘れてた。犬のせいで頭がぶつ飛んじゃって」

島は伏魔殿に侵入し、パソコンデスクにマック「リと書かれたボトルを置き、元気づけるように兄の肩をぽんと叩いた。

「ちなみにしまじろうの能力はバカなこと。とてつもないバカになれるの」

神妙な顔で戻ってきた。ふたたびわたしをチラ見するが、バカには見えなかつた。運動部特有のかなりエロパワーが有り余つてそんな顔ではあつたけど、男の子はだいたいみんなそうだ。

とくに奥の方でわたしを見てわなないでいる田澤。

「お酒　　帰りに買つてきたの?」とわたし。

「ああ、田澤に頼んだ。コンビニに連れてつて、『マックスコーヒー買つてきて』って言つんだよ。そつすると酒を買つてくれる。知つてるんだ、おれら付き合いで長いから」

つんつん頭がうんうんうなづいた。

「で、代わりにこいつがご所望のエロ本買つのに付き合つてやるんだけど、自分のためにはなにもできないのな。いつもたまごクラブ買つてくれるんだ。定期購読したほうが安いってくらいだよ」

「代わりに買つてあげればいいのに」

「 二つのズリネタを? 」「 めんだね 」 そしてわたしとアヤたんを交互に指した。 「 どうだなんぞうちでいるんだ? 」

となりの島の部屋に行き、理由を話した。去り際佐藤さんの部屋を振り返ると、すでにマジ「 」コを瓶から直接煽っていた。 「 きみたち、ちよつと待つてよ。ドライブしたい気分じゃない? ちょうど二才能力あふれる運転手がいるんだけど 」

## 19話 今晩のオカズはひよこクラブ（後書き）

答えになつてないし犬がパク・チソンは危険な香りがしますね。人  
気ないから攻撃されることもないでしょうけど。

「なるほど」

わたしが説明すると、しまじろうは腕を組んで神妙な顔をした。何度もしつこじょうだけど、しまじろうはとってもふつうに見えた。手荒な印象があつて、相手を威圧するような雰囲気がある。かなり苦手なタイプだった。でも二十一世紀が丘の変人どもと比べれば、どつちがマシかは言つまでもない。むしろ頼りたい気分だった。

「それもいまのうちだよ」アヤたんがわたしの思考を読んで言つた。ゆつくりとかぶりを振る。「見てて。突然バカに豹変するから。ビックリするよ。一度見たら忘れられないよ。あたしでさえ圧倒される。予想がつかなすぎて」

しまじろうはアヤたんを牽制するように見た。おれの秘密をばらすな、というよりも、たんにやかましい子にいらっしゃっているだけのようだに見える。

「このままだと、おれらは全員三年で変人になるわけだ」

私に目を戻して言つた。すごい。わたしが一日かかつて説明した内容をあつたり要約してくれた。

「やつやつ」

「三年で兄ちゃんみたいになるのか」

うなずきがたく、わたしは首をねじつていまかし、窓の外を見た。

すでに日が暮れかけている。また問題がひとつ。といつても個人的な問題だけど。毎日午後七時きつかりにはじまる夕飯に間に合わなければならぬ。

「どうすればいいか」「

と、しまじろうは振り向いて田澤を見た。田澤はハツと顔を上げた。「なに?」「

アヤたんはいじわるっぽい笑顔を浮かべながら、かかとで田澤の太ももをうりうりしていた。たぶん意味はないと思う。

「つまり、解決するためには以下のいずれかを実行しなければならない。べつの高校へ編入する、学校を変える」「

「無理だよ。考えたけど」わたしは口をはさんだ。

「もしくは世間に訴える

「んん?」

「だつて、どう考へても学校の方針はまちがつてゐるだひ。『変人を育てます。』なんてや。わざや中には偉大な人物も生まれるだらうけど、あまりにも乱暴すぎる。マグロを地引き網で取るようなもんだよ。てつとりばやいけど傷物になつたら値が落ちる」「

だんだんしまじろうが漁師に見えてきた。

「どうやって世間に訴えるの?」

「このにある。たとえば」

「ついでつせれでいる田澤は、相変わらず情けない顔でアヤたんに田を向けている。抵抗しないところを見るともしかして喜んでいるんじやなかろうか。

「でもここナビ。

「たとえばネットで実情をバラすとか」

「退学になるんじやない?」

「もちろん匿名でだよ。世論を動かすんだ。ＮＨＫが取り上げるまで」

「ほかには?」

「近隣住民にも訴える。頭のおかしい高校だつてのはみんな知ってると思つけど、たぶん実情は知らないはずだ。とくにこれから高校受験が控えてる子を持つ親。関心が高いはずだよ」

「うー。バカどこのか立派な軍師だ。もしかしたら、ほんとうにどうにかできるかもしない。世論を動かし、ＮＨＫの特集で取り上げられ、高校は方針を変えざるを得なくなる。

「うしてこんな子が二十一世紀が丘高校にいるんだ。やっぱりどこか狂つっていて、それが表に出ていないだけなんだろ?」

「じゃあ、やつをはじめると。『明日にじよつ』なんて言つてる

と一気に二十歳になつちまうしな。世の中やつこつもんだ。異論はないか?」

「 もうひん。お任せする」とわたし。

「マチ子さんとこつしょに? やるやる!」とアヤたん。「男どもがつつとおじいけど、隙を突いてふたりで抜け出せば」

全員の視線が田澤に突き刺さつてゐる。田澤は顔を上げた。「なんでおれ見てるんだよ?」

「おまえの力が必要なんだ」話をまつたく聞いていなそうな友人だつたが、しまじろうは辛抱強く語りかける。「その狂つた能力が必要なんだ。おまえはなんでもできる。やりたいと思つたこと以外は

」

「しまじろうだつて狂つてるだろ」

「おれが助けてやる。つまり、コンビニでユロ本を買うのと同じ要領だ。友達は助け合つてこそ友達だ。だら? 他人の行為を無駄にするな。他人にすがるのは弱い行為じゃない。わかつたか?」

やつぱりわかつていなさそうだが、田澤はうんとうなずいた。顔はそこそこかわいいんだから、もうちょっと堂々としていれば彼女のひとりやふたりすぐに見つかるの!。もうひんわたしはほめんだけ。

そんなこんなで、わたしたち四人は双六でもするみたいに膝を寄せ合い、作戦を練つた。

「まづは？」わたしが言った。ちょっと楽しい。

「ソーシャルメディアを活用するんだ」

そーしゃるめでいあー？ しまじりつ以外のバカ三人が同時に首をひねつた。

「ツイなんとかとか、あるだろ。さつそくアカウントを作成しよう。おまえは……」と田澤に言う。「辺境の個人サイトをつくれ。言つておぐが人気のないサイトだぞ。そうすればたぶんアカウントを取れるはずだ。しかも十五万個くらー」

さすが親友。よくわかってる。

「小説載せてもいい？」恥ずかしながらといつ感じで田澤が言った。  
「中一の」ひから書きためてる自信作が……」

「おもしろくないやつ？ ならいいぞ」

「おもしろこよ。というか熱い」

と言つたが全員に無視された。

「そして？」とアヤたん。

「ひとり」とつぶやきまくる。「一十一世紀が丘高校は変人の巣窟」とか。誹謗中傷するんだ。そして一の矢として……」

当の本人が一の矢をつげなくなつた。突然口ごもり、かすかに顔を震わせている。目は正面をカツと見据え、焦点を失い、遙か過去

をそのままよつてこるよつて見えた。

「そーーの矢 ガツ！」

なんだか聞き覚えのある擬音を鳴らした。喉がびぐびくと動き出す。エイリアンかなんかが出てきそうだ。

「ガツ！ ガツ！ ワンー ワンワンー」

パクそつくりに鳴き出した。わたしはスカートを押さえながら畳の部屋をずりすりとあとじわつた。ふすまが背中にぶつかる。

「そーあ、はじまるよー」アヤたんが目をきらめかせて言った。  
「しまじわつの異次元バカ劇場！ よつてらつしゃい見てらつしゃい」

## 20話 しまじりつ、異次元バカラ軍師。（後書き）

犬のパクとの人格交代とか？ もうとどんでもない狂いつぶりにしたいものです。

## 21話 ほんとうのカレー部に入れつつ…

われらが軍師しまじゅうは、四つん這いになつて本格的に犬になつた。

「ワン！ ワン！ ガツ　　」

「うひうひ」と六畳間を巡回する。アヤたんは「うひょー」という悲鳴だか歡喜だかわからない叫び声を上げてしまじゅうを飛び越え、わたしに向かつてダイビングしてきた。あつと気づいたときにはもう遅く、非常に楽しそうなドアップの顔が田の前に迫り、逃げようかどうか迷う間もなく次の瞬間にはふにやつと抱きつかれていた。

うーん。だんだんこの感触に慣れてきたような気がする。これつてますい。

ぐだんのしまじゅうは大きな犬小屋を三週ほどしたあと、学習机の脚に鼻先をこすりつけはじめた。しばらくクンクンにおいを嗅いだあと、方向転換して後ろ足を上げた。

どう見てもおしゃこの体勢だった。

「やめさせないの」アヤたんの縦四方固めを受けながら、わたしは田澤にいった。「友達でしょ？ やめさせる方法を　」

田澤はたまごクラブを読んでいた。ふと顔を上げる。

「むりむり。こいつがバカになつたら最後、だれにも止められないんだ。ていうか、べつにいいじゃん。干渉するなよ。だれにも迷惑

かけてないんだし」

しまじろうが動きを止め、わたしに顔を向けた。その顔はもはや人間のものではなかつた。八割がた犬のものだつた。すこみのある笑みを浮かべたので、襲いかかられるんじゃないかとわたしはアヤたんを半ば引きずるように部屋の隅にあとじさつた。

襲いはしなかつたが、代わりにズボンのチャックを下ろしはじめた。

その後のことはわからない。というか、わからなくした。わたしは顔を背け、ぎゅっと目を閉じ、現実を閉め出した。そして逃避行動を取つた。お花畠一面に咲き乱れる芳香剤を思い浮かべる。じょーっという音とほのかな刺激臭がした。するとなぜかコップ一杯のレモンジュースと栄養ドリンクが思い浮かんだ。わたしは耳をふさぎ、べつのことを考えた。そうだ、家に帰らないと。今日の夕飯はカレーだつたんだ。弟のリクエストで。わたしもカレーは大好き。母のつくるカレーは絶品だ。隠し味にはヨーグルトと。

ぶりぶりぶり。

「ああー！」しまじろうは歓喜の絶叫を上げた。「すっきりした！すっきりしたぞー！」

わたしは思わず自らを閉ざしてしまった。

「というわけで、作戦を開始する」いきなりふつう声で言つた。「覚えてるか？　ツイなんとかツターやミクなんとかシイを活用し、わが校の非常識ぶりを暴くんだ。若者らしくな。そして同時にご近所へ突撃訪問だ。だが、失礼のなにようにしろ。これは遊びじゃな

い。まじめに訴えかけるんだ。少なくともおれは真剣だ。なぜならおれたちだけじゃなくみんなの将来が おい、おれの顔を見る。なんでみんな口を閉じてるんだ？ 緊張してるのか。まあいいや。とにかく世論を味方につけるんだ。そしてNHKの特番に出る。わかつたか？」

だれも答えない。アヤたんがわたしの耳たぶに唇をつけ「牛並みだよ」とささやいた。

氣づくとわたしは自分の部屋にぼーっと突っ立っていた。携帯電話を握り締めている。制服姿で、すでに午前十一時を過ぎていた。

たぶんカレーは食べてないだろう。それだけは確信できた。

ういーん、ういーん。アヤたんから着信。

「だいじょうぶ？」

わたしは呆然と答えた。「だいじょうぶかどうかすら覚えてない」

「いや、だいじょうぶなはずだよ。マチ子さんが氣を失つてから決死の看護をしたから」

「アヤたんが？」

「いんや、みんなで」

それはだいじょうぶじゃない。と、足もとから首筋にかけて鳥肌のビッグウェーブが駆け上がってきた。あわてて全身をチェックする。ブレザーを脱ぎ、たくしたシャツの裾をひっぱり出し、指をも

つれさせながらボタンをはずし、スカートを脱ぐ。表を見たり裏を見たりひっくり返したりしてチョックしたが、制服にカレーのシミらしきものはついていなかつた。よかつた、今晚はどっちのカレーは食べていなにようだつた。

「もーす」

携帯電話のスピーカーからアヤたんのきこせん声が聞こえた。「もーす！ 聞いてる・？」

「ちょっと着替えるから」 それにお風呂も、だ。バスオイル三倍にボディーソープを使い切つて とにかく一刻もはやくリセットしたい。将来なんか知つたことか。「話はまた明日といふ」と

「明日はないかも。マチ子さんには」 隠鬱な声。「ツイなんとかッタ、見てないんでしょ」

「んん？」

「おーい、姉！」 弟の声。「先に風呂入るぞ。髪の毛につぱい落とすぞ。いいんかー」

「待つて！」 わたしは叫んだ。下着姿のままその場で無意味な一回転をし、ベッドに脱ぎきはなしたスウェットを慌てて着込む。

「もーす」

なんなんだ、もう。

「もーす！」

「えつ？ マナナさんも鳥取県出身？ ちがうよね。鳥取県だって知ってるもん。まあ下手でも『モーす』なんて言わないんだけど」

「

「やつさんの話は？」

「ああ、ツイなんとかツター？ あれからあたしらアカウント取つて、学校の教育方針について鋭い指摘を繰り広げたじゃん？」

「まつまでもなく、まったく覚えていなかつた。『そつなの？』

「で、ものす』」勢いでフォロワー増やして。 あ、そつそつ、田澤の小説読んだ？ 痛すぎだよ。ある意味名作っていうか

「かなりどうでもこー」

「で、匿名をいいことに』おれも一十一世紀が』『わたしもじつは』って感じで大盛り上がり大会になつた。ほんとに覚えてない？ マチ子さんもけつ』『えげつない』とを順調にツイツイしてたんだけど」

アヤたんが口もつた。

「なに？」

「御御坂先生に見つかっちゃつた」

「おみさか？」

アヤたんはへー、とため息をついた。

「おもこマチャナさんがね

## 21話 まことのカレー部に入れつつ---（後書き）

やつぱりシモネタ。疲れてるんでしょ？が。これが偽りなき自分、つへいとじょうな（コライドでせつたい修正あるせや）。

## 22話 行き遅れヒッヂのガチンコ個人(はあと) 授業

次の日、朝のホームルームが終わるとわざわざお呼び出しがかかってた。言つまでもないけど、悪いことほど予想どおり事が運ぶものだ。

ひとつ言つておきたい。わたしは昨晩なにをしたのかまったく記憶になかった。思い出そうとしても思い出せない。ツイなんとかツターに登録した覚えもないし、わが校に対して毒を吐きまくった覚えもない。わたしは廊下をなるべくゆっくり歩き、だれに対して言い訳してるとかわからないけどまちがった方向に進んであそいえば職員室はこっちじゃなかつたよねとかつぶやいて引き返しながら携帯電話をチェックしたりなんかしていた。

悪い予想がまたひとつ。ツイなんとかツターがお気に入りに登録されていた。アクセスしてみると、わたしのアカウントもしつかり作成されていた。これでふたつ。

コーナー名は「町田マチ子さん@男はいっさい興味なし」だった。これは予想外。なんでバしたんだろうね。ほかにもつっこみたいところがなくもなかつたけど、それはのちほどたつぱり追求することにした。

残念ながら職員室に到着してしまった。足音を殺しながら中に忍び込む。そういうばの先生に呼ばれたのか聞くのを忘れた。このまま十秒経つても気づかれなかつたら、先生が不在でしたということを教室に戻るつ。

カウント九・九七のところで、若い女の先生がすたすたとやつて

きた。なにも言わずにわたしの腕をつかみ、隅っこにある小部屋にひきずつていった。パンプスのカツカツいう音から察するに、ノーベル物理学賞をくれるつもりではないことだけは確かなるつだつた。

先生は乱暴に扉を閉め、ガチャッと鍵を掛けた。やはりなにも言わず、サッとちやぶ台を指さした。向こうにすわれとこいつことだらう。

言われたとおりにすわり、正面に腰を下ろした先生をおずおずと見上げる。色白で面長、目鼻立ちがはつきりした美人だった。肩まである髪を七二きみに分け、ゲゲゲのなんたらみみたいに片田が前髪で半ば隠れていた。そして比喩でもなんでもなく、こちらをこらみつける表情は完全に妖怪めいて見えた。

思い出した。どこかで見たことがあると思ったたら、入学式で校長先生をいじめてた先生じゃないか。かなりイヤな予感がした。

「『一十一世紀が丘の御御坂は三十一歳独身、性格最悪ドリの行き遅れビッチー、かかってこんかいー』」

どこからか携帯電話を取り出し、画面を見ながら静かに読み上げた。ぐるりと反転させ、わたしに画面を向ける。

「はじめまして。わたしが行き遅れの御御坂よ」腹痛が痛いみたいな名前の先生がイヤミたつぱりに自己紹介した。「これはあなたが書いたの?」

「書いてません」自信を持つて答えた。「まったく記憶ございません」

「あなたの名前じゃなくて。『町田マサト@町田マサト』って」

「ヤラセです」

「じゃあこれは？」『校長』『アサヒ』。かかってこない。」

「それもヤラセ」

「男にこうやって興味がないの？」

「それは偽りです」

「男好きなんだ？」

「アハハハ！」方だとしかこもる

「え？」なに？」トーンを一段階上げておつかぶせてきた。「ビックリして言おうとしたの？ 自分はわたしみたいなビックリじゃないって、つまつあなたはそういうみたいんだ？」

「アハハハではなくてですね」

「なら正確にはどういう意味？」

「とにかく、書いてません。それ」「ひらめいた。「それに、この中の内の『アハハ』で本名を名乗るわけないじゃないですか。ふつうに考えた。どうしたって陰謀ですよ」

「じゃあだれの陰謀なのか答えて」

「それはア　　」

「ア、なに?」

「いえ、なんでも」

「じゃあチューしていい?」

「これなり言つてきた。『は?』

「かかつてこられたいんでしょう? ツイなんとかかんとかによると。  
かかつていいくよ。お望みとあれば　」

わたしはお断りしようとしたし、なんとか口を開いた。けど思考が停止していたので人間の言葉が出てこなかつた。あうあうしたあげくによくやく出てきた言葉らしきものはこれ。

「ガツ」

「なにそれ? 犬語で『はやくわたしを襲つて。』ってわたしをめちゃめちゃにしてほしいの』って意味?」

右に右折するみたいな名前の先生は、田にかかつた前髪を手の甲で色っぽく払い、ゆっくりと腰を上げた。膝立ちになり、太ももをこすり合わせるようにしながらちやぶ台をまわりこみ、わたしの側面ですとんとぺったん!とわざわざした。

先生はわたしの髪をそつとかき上げ、耳もとに息を吹きかけた。首から上が金縛りにあつたみたいに固まつた。なんとか田玉を向け

ると、行き遅れのビッチは唇をゆがめてニヤリと笑みを浮かべた。

「次の段階に進んでいい？」

「ダメ」わたしは言った。

「じゃあ仲間の名前を言って。その子もめちゃくちゃにしてあげるから。三人で。専門用語でなんていうか知ってる? 三年で文系クラスを選考したら教えてあげる」

۲۷۰

「んん？ いまのはあえぎ声？ それとも名前の一部？」

すごい。まさに進むも地獄、退くも地獄だ。わたしはどんどん追い詰められていった。ちなみにこの「すごい」はなにかがすごいという意味ではなくたんに追い詰め方がすごいという意味でべつだんそういうった意味はないのだった。

「『ああん（はあと）』って書いたら許してあげる」

「ああん」わたしは元氣だった。「ああん」

「ダメダメ。はあとがない。感情がこもってない。そういうこざかしい真似をしていいと思ってるの？　じゃあお望みどおり次の段階に進むね。職員室に扉一枚隔てた小部屋で生徒とこんなことをしちゃつたりして　」

先生はぐーっと顔を近づけ、じぶんじとをしながらあぶなじとをそんなふうにはじめた。残念ながら詳細を説明するじとせできなー。

「アヤたんです」というわけで、わたしは速攻で自白した。「一年一組。わたしの大親友。あの子がわたしを騙つてツイなんたらかんたらで学校や先生がたの悪口を」

「ツイうんたらかんたらで?」

「ツイうんだかへーだかで」

五分後、アヤたんがわたしの隣に正座していた。

「御御坂先生は対象の弱点を的確に突くことができるの」わたしに非難の目を向けつつ、役割どおりしつかり解説する。「トラウマを植え付けることによって人生を破壊できるという能力ね。マチ子さんの裏切り者。あとでお仕置きしていい? うちの両親、今日は泊まりがけで温泉に行つてるから」

わたしは完全に退路を断たれた。いっそ「男はいつさい興味なし」になつたほうがいいのかもしれないふたりの熱視線を浴びながらわたしはそんなことを考えていた。

## 22話 行き遅れヒッヂのガチンコ個人（はあと）授業（後書き）

申し開きの言葉も「やせん」という気分。わたしのペルソナが草葉の陰で泣いております。もちろん両親もね！　でも以外とうまく進んでない？　ないか。

## 23話 玲乃様、助ける。

わたしたちはようやく解放された。初犯といつことで厳重注意プラスアルファで済んだんだけど、職員室から教室へ戻る途中、わたしはまともに歩けなかつた。おもにプラスアルファのダメージによるものだつた。

「スゴ技だつたね。あそこまで生徒にやつてしまつなんて、あたし知らなかつた。情報アップデートしなきや」「

アヤたんにほんと担がれるようにして教室に到着する。休み時間のようだつた。クラスメイトのみんなは思い思いのポジションでだらだらてれてれしている。わたしは席に着き、時計を見ようと力を振り絞つて顔を上げた。壁掛けの時計は相変わらずふざけまくつていってまつたく時計の役を成していない。目の端に黒いものが映つた。顔を向ける。しまじろうが横すわりして体ごとわたしに向かい、むつり顔で申し訳なさそうになついた。いまのところ正気のようだ。

その後ろの田澤は、真剣な顔で携帯電話に向かい、せわしなく親指を動かしている。もつやめてくれ。作戦は終わり。

「ではホームルームをはじめます」富田先生が入つてきた。「みなさん席について。ほらほら」

だらだらと席に着く。まだ一週間しか経つていないのでみんなすつかり慣れ切つている。

「まずはじめに転校生の紹介を

」「

みんながざわつたはじめる。教壇側のドアから玲乃様がさつやつと入ってきて以下省略。

「みんな仲良くなれるよ！」。それから町田

「名前を呼ばれた。」「はい」

「ホームルームが終わつたら、至急職員室に行へよ！」

「はあ？」思わず友達用の返事をしてしまつた。「もう行きました。その帰りで」「

「そうだったかな。自信がないな。でも言われてみればそんな気が

」

サッと時計に振り向く。時計は油断しそうしたのか一瞬もとに戻るのが遅れ、長針と秒針をこんがらがらせてあたふたしていた。慌てて取り繕つた時間は八時四十分。わたしとしてはすでに時間が幻想であることを知つていたし、先ほどあの行き遅れビッチの御坂先生と六十分一本勝負を繰り広げてきたばかりなのだ。なにより体が覚えている。

「まあ、とにかく行つてくれ。いいじゃないか、行くだけなら。べつに行きまくつても構わないだろう。若いんだし」「

なんのことだかさつぱつわからなかつたけど、なんだかんだいつも先生には逆らえず、まあもう一度行くだけならいいかといふことで席を立ち、職員室へ向かつた。

職員室では例の女教師が待ち構えていた。まつたく同じシチュエーションと表情と動作でわたしを小部屋にひきずりこみ、同じセリフと同じ詰め寄り方と同じウルテクでわたしにリターンマッチを申し込んできた。

結局わたしは十三回試合をし、ぜんぶ負けた。セコンドのアヤさんは毎回飛び入りしては毎回わたしを裏切り、背後からパイプイスで襲いかかった。

「それから町田。ホームルームが終わつたら至急職員室に」

「ぐだぐだもいいかげんにしてほしい。わたしは十四回戦田を申し込まれそうになり、机に突つ伏しつつ、ついに言つた。「イヤです」

富田先生は老朽化したドラえもんみたいな顔を曇らせ、不思議そうに首をかしげた。

「なぜそんなに制服を乱し、息も上がつてゐるんだ? 寝坊してパンをくわえながら走つてきでもしたの?」

と、ドラえもんがニヤリと邪悪な笑みを浮かべた。 ような気がした。もしかして富田先生もグルか。あんなすつとぼけた顔してるのは? でも高校を批判して教師を中傷したのだから、教師全体で報復があつてもおかしくない。

「なんでわたしだけ?」

「とにかく職員室へ。ああ、それから転校生が来たぞ。みんな仲良くしてやつてくれ」

がくんど首が落ち、おでこをもろに天板にぶつけた。も「ひづり」でもよくなり、そのまま寝た。

体がビクッとした反動で机を蹴飛ばし、自分で自分をビックリさせて目を覚ました。ハツと顔を上げ、見まわす。窓の外はオレンジ色の夕日に染まっていた。教室にはわたしを含めて五人しかいなかつた。ぜんぶ知った顔なのがまた最悪だつた。

「おやよひづります」アヤたんが言つた。「回復した?」

頭にもやがかかるつている。それと長く昼寝をしすぎたときの罪悪感みたいなものも感じた。

「ああん?」わたしはなんとか田の焦点を合わせながら言つた。

「ああん、じゃないぞ」しまじろうがゆつくつと近づいてきた。「作戦は失敗だ。おまえの失態のせいだ」

「わたしの?」

「そうだ。だがこれくらいのことで諦めるわけにはいかない。だから軌道修正する。それを話し合つんだ。貴重な放課後を使って」

「どんな作戦?」

田澤があたふたと両手を動かした。「ダメ 考えさせたら

なにがダメなんだと思いつつなんとなくじみじみを見上げ、一瞬でなにがダメなのかがわかった。これはダメだ。しまじろうはまじめくさつた顔で「作戦は」と言いつつ額に手を持つていった

んだけど、次の瞬間にはとてつもないアホになっていた。口のアホ顔で全体をくねらせながら「おまえのかーちゃんシベリア生つまれー」とかわけのわからない異次元ギャグを飛ばしました。

「……この三歳後が心配だよ」

田澤がぽつりと言った。三年待つ必要はないかも しまじろうのハイパーテンションギャグを眺めながらわたしは密かに思った。

「「ジビもチャレンジ!」「ジビもチャレンジ!」一転して卑猥なポーズを取る。「おとなもチャレンジ!」

「あたしたちの三年後も、でしょ」めずらしく心配げな顔でアヤさんが言った。「変人として、だれにも顧みられず」

「大学も行けず」田澤が卒業生の言葉みたいに引き継いだ。「就職もできず」

なんなんだこれは。妙にシリアスな空気が醸し出されている（約一名を除く）。

と、窓際にひとりすわっていた万年転校生が切り裂くような聲音で言った。

「もうネタ切れなの？ 情けないつたらありやしない

「なに？」アヤさんが囁みついた。「あんた、関係ないでしょ？ それよりはやく帰らなくていいの？ 明日も転校してくるんでしょ？」

玲乃は頬杖をついて笑みを浮かべ、おもじろがるよつこりひらを眺めている。ライトブラウンの髪の毛が西日を受けて輝いていた。ちょっと後光に見えなくもない。

「言つてくれるじゃない。せっかく知恵を貸してあげようとしているのに」

「ネタはあるぞ!」しまじろうが叫んだ。「ホントリーナンバー二番、しまじろうです。『元気な胎児』やりまーす」

ヘソの緒を噛み切りながら暴れまくる胎児から目をそらし、わたしはアヤたんと顔を見合させた。ここは黙つて知恵を借りたほうがいいかもしねない。

## 23話 玲乃様、助ける。（後書き）

ちょっと復活した感が と思っているのも自分だけ？ ともかく  
これで次のステージに進めそうです。

## 24話 無理やり歓迎会、そして

わたしとアヤたんは頭を下げてお願いした。といつても、社長が家に来たときに父が見せた最敬礼と比較すると十分の一へりいの誠実さだつたけど。

つづいて田澤も頭を下げた。この子の場合はあと二年でバカになるという現実に危機感を感じているわけではなくて、ただたんに他人に流されやすいだけのようだった。

「マチ子さん？」脈略なく玲乃様が言った。「これ、見える？」

なんのことがと面を上げる。手のひらを上に向け、なにかを持つような格好でこちらに腕を突き出している。玲乃様自体が西口を受けて輪郭がぼやぼやしているんだけど、少なくともわたしにはカラッポに見えた。

「そんなもん学校に持つていいの？」すかさずアヤたんが言った。「校則違反だよ。倫理的にもまちがってる」

「わたしはマチ子さんに聞いてるの」ちびっ子はすつこんでなさいよ、とも言いたげな冷たい視線を向ける。「ちびっ子はすつこんでなさいよ」

実際に言った。アヤたんは顔を真っ赤にして口を開きかける。

「見えない」わたしは急いで言った。

「じゃあこれは？」

逆の手を向ける。

「見えない」

「なるほど」

玲乃様はうなずき、両手を後ろにひっこめた。しばらくしゃべりながらやつたあと、背筋をぴんと伸ばして向き直った。思い出したように、サツと前髪を払う。

「つまり、あなたたちはわたしの助けを求めているわけね。背に腹変えられず、恥を忍んで、転校生で立場が弱いはずのわたしに全員で頭を下げて」

約一ヶ、上げていない者がいた。詳細は省くが某吉本ジュニアの若者だ。こまは中國人に脳を食べられているおサルの真似をしている。言われなきやわからぬ程度のデキだつたけど。

「あっ、やめて！ そこは海馬 ああっダメ！ 側頭葉はダメ！ そこ弱いの。言語中枢が」

しまじろうが中國人家族に視床下部を食べられていると、玲乃様が言つた。

「歓迎してよ」

「はあ？」わたしとアヤたんのハーモニー。「なにー？」

「だつて転校生だもん」しづと叫ぶ。

「あんた転校生じゃないよ」アヤたんが威嚇するよつなダ!!声で言った。「知ってるんだ。ちやほやされたいからといつ理由で毎日転校を繰り返して」

「転校初日つて、不安でたまらないのよ？ みんな仲良くしてくれるのがな、意地悪されたりしないかな、友達はできるのかな、最初に友達になつた子が真性レズビアンだつたりしないかな、などなどなど」

ウソつけ。

「つまりなにが言いたいんだよ」田澤が言った。めずらしく男らしい。けど玲乃様にひとにうみされるととたんにしゅんとなつた。

「いめん」そして謝つた。

「まあ、あなたたちの将来はつまり、わたしみたいに不安な転校生に対して思いやりを持つて接することができるかどうかにかかっているつてわけよ。ところであれ、したことないの。やつてみたいいなー」一同を見まわして言つた。「ボウリング」

そんなわけで、わたしたちは不安におびえる転校生を元気づけるためにボウリングに繰り出した。総勢五名。レーンが空くまで三十分待つた。今日も夕飯に間に合わなそつだ。そして母に怒られる。

変人高校にかよいはじめてから、わたしの株は一気に落ちてガムのようになに底にへばりついている状態だった。そしてわたしの汚名を返上するためには、なんとしてもわが高校を変革する必要があるのだ。

十三番レーンという西洋的には縁起の悪いところを割り当てられ、とにかくにも無理やり新入生歓迎会がスタートした。

妙に静かなジャンケンをし、順番を決める。はじめはしまじろうだった。

「勝ち負けにこだわんなよ、楽しもうぜ、遊びなんだから そういつ考えは嫌いだ。おれはいつだって、なにをするにも真剣なんだ」

いつのまにか正気に戻っている。放課後なので脳みそは働いていないようだった。ご本人様と同じ真っ黒い十五ポンドのボールを軽々と持ち、大きく腕を振り上げ、レーンど真ん中から剛速球をぶち込んだ。

カーラン。ストライク。さすが運動部。

つづいて玲乃様。ブレザーを脱いでサッと立ち上がり、黄色いボールに指をはめ、しなやかな動作で位置に着いた。首をひとつふりるとキャラメルみたいな色の髪がシルキーに踊った。

カーラン。動作も優雅ならボールの軌道もエレガントだった。わずかにカーブしながら九本倒した。端っこを一本残すあたりが人気取りに余念のないお嬢らしいという気がした。

モデル歩きで戻ってくる。表情を見る限りは楽しいんだかどうだか判断がつかない。

「おわー、溝だー！」

アヤたんはいわゆる典型的な女の子投げで、とことこ進んでファウル直前で立ち止まり、両手でぼとつとボールを落つことし、そしてなぜか急いで戻ってきた。「溝だ溝だー！」

座席はたつぱり空いているのにわたしの膝の上にすわった。

「なにをそんなにかじこまつてるんだ?」しまじりうがコーラの缶を煽つてから、わたしに言った。「背筋が打ち解けてないぞ。ぴたりと閉じた膝がよそよそしい雰囲気を醸しているぞ」

「ふつうだよ」アヤたんを膝にのつけながら答える。ほんとにこれがふつうなのだ。この体勢以外にどうやってすわるといつか。文句なら母に言つてほしい。

「美しいじゃない」玲乃からフォローが入つた。「まさに大和撫子。ね?」

だらりと笑みを返す。よろこんでいいんだろうか。と、玲乃様は急にわたしの顔をのぞきこみ、なにかをつまんでふらふらするように目の前で手を動かした。「とこりでこれ、見える?」

「手しか見えない

「なるほどね

なんなんだ、いったい。

田澤がさりげなく九ポンドのボールを抱え、セットしている。だれにも注目されていないと言つたほうが正しいかもしない。

ちらりと振り向く。じつに寂しげだった。

「忘れるな、おれのアドバイスを」しまじろうが倒置法で声を掛けた。「あえて敵に塙を送るぞ。まっすぐ投げるな。ピンを狙うな。あとは自分で考えろ」

たしかに田澤の能力なら、まっすぐ投げたらガターは確実。それどころかまちがってこっちのほうに飛んできただれかの頭に直撃するかもしない。さりげなくアヤたんの背後に隠れる。

田澤はどつするか決めかねていた。うーんという感じで足踏みし、またこっちへ振り向き、前を向き、よしどうなずいた。ゆっくり前進し、腕を振り上げ、そして隣のレーンに投げた。

ところで、隣のレーンには他校の男子生徒がいた。ちょっとお近づきになりたくない感じの男が六人ほど。だらしなくイスに寄つかって、だれかが投げるたびに大げさな調子でグラグラ笑い合い、アメリカンなハイタッチをしていた。なんとなくこっちを意識している様子だ。

田澤が投げるのとほぼ同時に、チンピラ予備軍みたいな男が思いつきり振りかぶつてボールを転がした。そして予想どおりというかなんというか、田澤が投げ入れたボールが横からタックルしてチンピラのボールをはじき飛ばし、そのまま溝に押し込んだ。田澤のボールは反動で自分のレーンに戻ってきてふらふらと蛇行し、スイートスポットから斜めに進入して見事なストライクを決めた。

カーン。

「なめてんのか、おい」

さまにならないガツツポーズを決めている田澤を、チンピラが突き飛ばした。田澤は子鹿のようによろめき、あっさり床に倒れた。これも百二十パーセント予想どおり。

24話 無理やり歓迎会、やして（後書き）

なんかまとも？まあ自分のことなので、このまままともにひりへ  
とは思えないんですが。

チンピラくんは田澤に一歩、一歩と近づき、口陰をつけるように覆いかぶさった。

「どうこいつもりなんですかー？」 わざとらしく丁寧な口調で言つた。そしてこきなり喉の奥でうなるように威嚇する。「おまえ、殺すぞ。どこの高校よ？」

田澤の顔という顔がひきつっている。通常であれば動かせないはずの耳までひくひくと痙攣し、本体から逃げ出さうともがいていた。二つもな（とこ）うほど付き合ひてもいな（けど）男なのに情けないやつぢや、でおしまこにするところだ。だけど相手は、たしかに怖すぎる。高校はわからないけどたぶん三年生だろう。邪悪な石川遼みたいなルックスで、体の大きさ以上に威圧感があって、体の隅々から非常によろしくない元気があふれ出している。

人殺し宣言をしたチンピラくんは「ふつ」と言つて拳を振り下ろした。田澤はびくつとして顔を背ける。殴るふりだった。チンピラくんは冗談だよーんという感じで仲間に振り返った。ギャラリーは大爆笑。

最悪。

「おーい、泣くなよー」

ギャラリーのひとりが田澤に声をかけた。憎くて憎くて、わたしは胸が悪くなつた。ギャラリーその一の言つたとおり、田澤はいま

にも泣き出しそうだつた。鼻水も出でいそうだつたし、正規の手続きを踏んでチェックすればたぶん漏らしているはず。もつ、情けなれすぐだ。

すると、わたしの中でなにかが変化した。どろどろ渦巻く憎しみの奥から、きゅんきゅん締めつけられるような感情がわき起こつてきた。膝の上のアヤたんを突き飛ばして助けに入りたい、アホの腰抜けを守つてあげたい そんな気持ち。なんのこれ。

「どこの高校ー？」邪悪な石川遼がわたしたちを見まわし、優しげに言った。「みんな、ちょっとあつちのほうで話さない？ トイレ。な？」

わたしを見て、ニヤリと笑つた。仲間も次々に腰を上げ、扇状の席やボールリターンをまわりこんでゆつくりと近づいてくる。昔DVDで見たエイリアン<sup>2</sup>に似たような場面があつたような気がする。これはヤバい。もちろん、おいしいカレーを食べたときの「ヤバい」とはちがう意味で。

「待て待て」

カレーつながりなのかどうか、しまじろうがすつくと立ち上がつた。おお、男らしい。

「どこの高校だつていいだろ。あつち行つてくれよ」

「あ、やるつもり?」もみあげがやけに長い柔道部体型が言つた。そして首をゆらゆら揺らしながら近づいてくる。「つーか、おまえらが先にケンカ売つてきたんだろ?」

しまじろうの手がちょっと震えている。わたしはそれを見て、またも胸の奥がどろどろきゅんきゅんしあじめた。なぜか怖さはなかつた。ただただみんなが愛おしい。

「これ、見える?」

しまじろうが言つた。スコアが表示されているモニターを指差す。それどころじゃないだろ?と言いかけて一度見した。全員の点数が消えている。

「見えない」

「あつそ」

なんなんだ。つづいて玲乃様は指先モーテルみたいな手を伸ばしてしまじろうの袖に触れ、下にひっぱつた。

「なんだ」しまじろうが振り返つた。

「ここからすわって」鋭くわざわざ。「すわって、この状況を打開する方法を考えるのよ」

考える? ああ、ダメダメダメ。そんなことをしたら と、膝の上のアヤたんがそもそもしながら反転し、くたつとわたしに寄りかかってきた。

「どうかした?」わたしは聞いた。

「」の絶望的な状況で少しでも安心したくて

とくに意味はなさそうだ。しまじろうはしぶしぶといった感じで腰を下ろした。そして考へはじめた。それを見て、玲乃様は満足げに顎を上げ、立ち上がった。

田澤に声をかける。「こんな連中、あなたひとりでなんとかできるでしょ?」

顔をぐちゃぐちゃにしながら振り向く。ほんとうに鼻水を垂らしていた。少年マンガの主人公みたいだ。ただし一巻の、強くなる前の主人公。

はあ? と口を開けて答えた。たしかに「はあ?」だ。玲乃様はなにを期待しているんだろう。十巻くらいまで連載がつづくのを待つつもりなのか。どう考へてもその前に読者投票の結果で連載打ち切りになるのは確実だった。

連中はすでにわたしたちの縄張りに入り込み、せまことじりで「ちや、ちや」とひしめき合っていた。ものすごい威圧感は感じるものの、まわりの目があるからかいまるところ暴力行為は起こっていない。隣に立つた男がわたしの髪の毛に触れた。びくりとして顔を上げ、わたしはなぜかそいつに微笑みかけた。まるでだれかさんみたいだ。ひっぱたきたいのにわたしの顔はお愛想の笑みを浮かべている。

だれか助けて。

「思い出しなさい」玲乃様は命令口調で言い放つた。「あなたは社会のテストで完璧な英語の回答をし、エロ本を買いに行つてはたまごクラブを買い、サッカーをしてはスティーヴ・ナッシュばかりのアシストを見せる。ずっとそうだった。なにをやってもうまくいかない

い。そんな人生を送ってきた。自分がイヤでイヤでたまらなかつた

「

田澤のぐしゃぐしゃ顔が、モーフィングみたいに穏やかに変化していく。

「あなたはなんでもできるのよ。ただちゅうどいズレでいるだけ。だから自分を信じて、ここからを蹴散らすにはどうすればいいかを考えないよ」として考へるの

最後のまつは複雑でよくわからなかつたが、田澤は感じるとこりがあつたらしかつた。玲乃様の言葉を脳に染み込ませようとするよう、「なにじ」とかを口の中でつぶやいてこる。

「……やつ」そして遠くを見るような田でつぶやいた。「だ

きわめてゆくべつと立ち上がる。妙な迫力めいたものを感じる。

石川遼が怯えたようにあとじたる。「なんなんだよ、おまえ

田澤は石川選手を無視し、覚醒した主人公みたいなじぐさで肩越しに振り向いた。「やうじやない」静かに繰り返す。「やうじやないんだ」

「なにが?」玲乃様が聞いた。

「おれが買ったのは

キツと敵に向き直る。

「たまごクラブだ

25話 田澤、覚醒する（後書き）

まともあがれて苦戦しました。

## 26話 (氣を) 落とすんだ、小学生レベルまで!

メンター玲乃様の助言でいきなり覚醒した田澤は、ジャンパゴミツクスでいうとこきなり十五巻くらいすつ飛ばして読みはじめたみたいな強者に進化していた。読者おいてけぼりのありえないオーラを身にまとっている。

「よくも　　」奥歯をぎりぎり鳴らして敵を見上げる。つんつん髪が十センチくらい伸びて逆立つて立っているように見えた。「よくも　　」

なにに対しても怒られているのかよくわかつていいない感じの石川遼選手は、顔を歪めて汗をたらりと垂らしながら一歩あとじさった。いま気づいたんだけど、相手の高校生はべつに某ゴルフ選手に似ているわけでもなかった。ただの高校生だ。わたしが比喩をミスっただけ。

ほかの連中も、無言でふたりの対決を見守っている。レーンみつみつ向こう側の親子連れまで試合を中断し、こちらを見守っている。

「よくも　　」

また言つた。じつやら次の手を考えるために時間稼ぎをしているようだ。表情を変えないまま、田だけがなにかを探してせわしなく動いている。

「だいじょうぶなんだろうか。

「なにやつてゐる。次に進んで」玲乃様が舞台監督のよつと声をか

けた。「相手方は待つてくれない。決めて。すぐに」

田澤はうろたえ、闘気が一瞬ひつこんだ。もとの弱つちい姿に戻つてきょろきょろしあじめる。相手もそれに気づいた。勢いを取り戻しつつある。

「あ」田澤が一点を見据える。「あれだ」

いきなり試合放棄して駆け出し、わたしたちの目の前をすり抜け受付のほうへ向かつた。カウンターに寄りかかり、受付の女の人と熱心に話し込んでいる。

緑色の帽子をかぶつた女の人が嬉しそうに笑つた。ナンパでもしているんだろうか。田澤の後頭部が大きく一回うなずいた。女の人が向かつて右のほうを指さす。わたしたちは全員つられて思わずそちらに顔を向けた。

力「一。みつほど離れたレーンでちびっ子がストライクを取つた。急いで駆け戻り、お母さんに抱きついて褒めてもらいたそうに見上げている。

女の人があんまりに腕を下げる。ふたたび田澤と話し込む。さつきの指差しはまったくなんの関係もないようだった。

お願いしますお願いしますという感じで田澤が頭を下げる、カウンターから離れた。そして近くのゲームスペースに駆け、台にすわり、弾幕系シュー・ティングをはじめた。女の人は受話器を持ち上げ、だれかと電話している。

意味がわからなすぎて力が抜けたのか、連中は全員肩をだらりと

落とした。もつとこつならわたしたちもそつだつた。

突然しまじろうが坊主頭をかきむしりはじめた。柔道部系の男がぎょつとして顔を向けた。

「なにか思いついたの？」玲乃様がささやいた。「もつとよ。もつと考えて」

「うー」喉の奥でうなる。「意味が」

「なに?」

「意味が分からぬ 田澤の行動」

「なぜあんな」と? 親友なんじょ? なぜ? なぜあんなことをしたんだと思つ?」

「おおおお 」しまじろう火山が活動を開始しそうとしている。  
「ぬおお 」

「なるほど」アヤたんが言つた。「理解した」

「なにを?」

「今度の週末付き合ひてくれるなり教えてあげる」

田の前二センチのところに田をぱみぱみつかる。わたしほとつえず態度を保留した。

「わかった!」しまじろうが叫んだ。「ひらめいた!」

わたしは思わず腰を浮かせて逃げようとした。

「なぜ？ なぜなの？」 玲乃様がわらって瘤る。

「トイレ」 しまじりつは歯の隙間からそんなセリフを吐き、柔道部をわらわらとこらみつけた。「トイレに行くかあ」

「ト、トイレ…」

「言つただろお」 ゆりつと左右に頭を揺らす。「わつわつたゞお

「トイレでなにを」

「それはだなー！」 もう辛抱たまらんといった感じで立ち上がる。「それはだなあー！」

「逃げよ！」 わたしはアヤたんにさわやいた。「次の展開はわたしでも予想できる」

「おれがトイレでないと見せられないものを見せよつとしているからだー！」

アヤたんがうなずいた。玲乃お嬢をチラッと見る。玲乃様はやけにアメリカンな仕草でひょいと肩をすくめ、立ち上がった。連中のひとりを押しのけ、前に進み出る。

女の子三人でいそいそと現場を離れる。だれも追つてこない。

「これが　これが　「しまじろうがわなわな震えながら氣を溜めている。

「変人も使いようよ」玲乃様はわたしにわざやいた。「これ、見える？」

「見えない」わたしは答えた。「って、わざからこつたいなんの話？」

お嬢はわたしを無視してカウンターに寄りかかり、受付に話しかけた。「ちなみにわづき、あの子となんの話をしてたの？」

「あの　トラブルに巻き込まれそなうなので呼んでほしいと」

「警察を？」と玲乃様。

「これが　スーパーしまじろうの　」

「いえ、あの　」受付の女の人は口ごもり、小声でつづけた。「バキュームカーを」

「ビッグバンアタックだあ！――！」

そしてそのとおりのことが起こった。しまじろうはクレヨンしんちゃんみたいに尻を向け、そして　具体的な説明はかなり難しいしできたとしても控えたいんだけど、とにかくしまじろうが放出したそれはビッグバンの名に恥じないあらゆる意味で超警級の。

まあいいや。とにかく逃げよう。

26話 (仮を) 落とすんだ、小学生レベルまでー (後書き)

まともじゃなくてホッとした。せめて中学生レベルの想につき  
をしたい……。

## 27話 いじめられ? わたしは拒食症?

とりあえず男どもはほつといて女の子三人で手に手を取り、ボウリング場の玄関を抜けて駐車場に飛び出した。

あとから受付の女人の人も飛び出してきた。これで女の子四人。

「あー、上着がー」アヤたんが立ち止まり、うなつた。「教科書がー」

「諦めなさい。どっちもどうせ必要ないんだから。それよりなるべく離れて」

と言つた玲乃様がジョイナーも責ざめるスプリント力であつとう間に駐車場を横断し、車の往来が激しい片側一車線の通りをノンストップで駆け抜けた。車が次々とブレーキをかけてはハンドルを切つて歩道に乗り上げ、ついでに後ろから追突された。

アヤたんがわたしの手をとつて走り出した。「まあ、少なくとも渡りやすくはなつた」

ついでにいと受付の女人人は綾さんといつて、お狐様的なしゅつとした容姿で、ちょっとエルフっぽかつた。印象的なウェーブのショートヘアからいまのに長い耳の先がひょこつとのぞいてきそうな感じ。話によると大学生で、今日はバイト三日目だつたらしい。氣の毒なことだ。

「ウチも高校、二十一世紀ヶ丘」へつへつと息を切らしながら走る。やわらかい関西弁だつた。「姿勢いいね、あんた。いつもそんなふ

うに背筋を伸ばして走るん？」

「でしょー？」アヤたんが言つた。ソレぢかはベロを出しちゃひたばたとみつともない。「あたしはつなじから背中のワインにかけてが好きで

「巫女さんのバイト、紹介するよ。」これを無事生きて帰れたら

おつよつわんが言った。アヤたんの目が輝いた。そういえばそんな予言をひいとわれたような気がする。

そんなことより無事にこの状況を切り抜けるのが先決だ。わたしたちは玉突き事故の現場を横切り、向こう側の歩道にジャンプして乗つかった。某セブンイレブンの駐車場でぜいぜい息をつく。

車輪止めの石になぜか乗つかつてゐる玲乃様が、「受験生よ、大志を抱け!」みたいな感じで指さした。振り向く。ホームセンターか大型駐輪場みたいな外觀の二十二世紀ヶ丘ヤングボウルが、少しづつ膨張している。壁が湾曲し、よく目を凝らすと窓のガラスにひび割れが入つてゐるのが見えた。わたしは目だけはいい。

「はあああああう！……！」

鳥山明も裸足で逃げ出す気合いの入った叫び声がこれまで聞いえてきた。声質からこいつはしがじらうだ。やるなりやるではやくやつてほしい。

「うあー

アヤたんが叫んだ。  
二十一世紀ヶ丘ヤングボウル がお餅のよ

うにどんどん膨らんでいく。そして窓からは正体不明の光を発していた。

「はいっ……！」

しまじろうの掛け声とともに、黄色い光が建物を飲み込んだ。まぶしすぎて目を開けていられない。ぶおっ！ という生理的な音がした。ぶおっ！ ぶおっ！ どうにも止まらない。おりょうさんがなにか念仏めいたものをつぶやいているが、大地を揺るがす爆屁音に耳がおかしくなっていたのでなにを言っているのか聞き取れなかつた。ぶぶぶぶおっ！ ガラスの碎ける音、そしてズーンジーンという崩落音。頬りの鼻も塞がれた。地獄を思わせる強烈な硫黄臭が漂い、あつという間に顔全体をすっぽりおおつた。これを嗅ぐぐらいなら死んだほうがマシ。

そして無になった。

だれかがほつぺたを触った。わたしは自分の手のようなものを動かし、拒否した。非情な現実に戻りたくない、このまま暗闇でじつとしたい。だけど手はわたしの逃避を許さなかつた。逆のほつぺたを触り、うなじを触り、馬の尻尾をつまんでゆさゆさ揺らし、唇を指先で一つとなぞり、胸に触り、おなかに触り、お尻を触り、ふとももから足の裏にかけてマッサージはじめた。わたしはどんな格好をしているんだろうか。

はいはい、戻ればいいんじょ、戻れば。

薄目を開けると、天井がぼんやりと見えた。建物の中には、目を瞬かせ、状況を確認する。知らない家だ。洋風の居間で、わが家のリビングの五倍から七倍は豪華だった。天井扇がまわっている。

暖炉がある。マントルピースの上に写真立てが並んでる。そしてわたしがソファの上に寝ていた。

ちなみに触っていたのは、言つまでもなくアヤたんだった。工作をこしらえる小学生みたいに熱心な顔で、わたしがかなり目を覚ましているにも関わらずぺたぺたと膝小僧あたりを探っている。

背もたれに乗つかつている頭を上げた。アヤたんはハツと顔を上げ、言い訳がましく笑みを浮かべた。

体に異常はなさそうだった。血も出でていない。ゆっくつと上体を起しつゝ、言つた。

「うるせえ？」

一瞬の沈黙のあと、部屋にいる全員がいっせいに大爆笑した。全員とは、アヤたんと玲乃様と田澤としまじろうと元受付アルバイトのおりょ「さんだ。つまり全員つてこと。

「うるせー」

また言つと、爆笑の上に爆笑が重なつてなんだかわからない状態になつた。

「どうせー。」

「うひやひやひやひや　　」田澤がへんな声を上げた。「おい、金よこせー」

しまじろうは粉塵まみれで、石膏像みたいにむつつりしていた。

ポケットから財布を取り出し、五百円を田澤に渡す。

「どうでもよくなつてきた。」

「わたしの家よ」玲乃様が言つた。真顔だつたがまだ少し肩が震えている。「あなたを運ぶのは楽でいい。ほんと軽いんだから。現在三十七・一キロ。生命の危機に遭遇したせいで」

「（）飯食べてる（）」おつよいつさんのが心配そうに言つた。「もしかして拒食症とか」

「ボウリング場は？」わたしは無視してたずねた。「といつか、あの高校生たちは」

聞いたら聞いたで今度は静まり返り、だれも答えない。玲乃様がテーブルのリモコンをつかみ、六十インチワイドテレビをつけた。

「えー、現在のところ原因はわかつておりません」レポーターが映つた。しまじろうがふつと鼻を鳴らす。「現場は（）覧のとおり、瓦礫の山です。　えー、たいへんなにおいです！　現在決死の救出作業がつづけられており」

瓦礫のところどころ、茶色くなつていてる部分にモザイクがかかっている。たぶんあれだ。

「と、いうわけ」玲乃様がテレビを消した。「だけどこれは重要じゃない」

「すげえ」田澤は興奮していた。しまじろうの肩に手をまわす。「こいつが破壊したんだぜ！　あのバカ不良もろともー。かかってこ

「いつてんだ！ おれも手伝つたよな？ といつかおれがきつかけとなつて」

玲乃様がサツと手を振つた。田澤は一気に口を閉じ、手を股間の前に合わせておとなしくなつた。

わたしは言つた。「重要じゃないつて？」

「新しいバイト先、見つけな」おりよつさんがぼんやりと言ひ、「んーこくさくないボウリング場」

「わたしはあなたたちを試したのよ。あのチンピラふうのHキストラを雇つて」

「つまり」

「高校を変革するため、先生と対決するため。能力も使い方次第なのよ。だけどあなたたちはそれを知らず、自分を無力だと思い込んでいた。変人は偉人になるのよ。あなたは」

と田澤を指さす。

「まったく脈略のないことをすればなんでもできると知つた。あなたは」そしてしまじろう。「考えることでバカになれる。安东尼オ猪木と小学生を掛け合わせて一千倍に増幅したのに匹敵するほどのバカパワーを」

「なんのことだ、バカつて？」

「そして名字のないちびっ子アヤ」アヤさんがほつぺたをふくらま

せた。「あなたは知りうると思えばどんな人間の情報でも仕入れることができる。だけどあなたはマチ子さんのプライベートにこだわりすぎてほんとうの能力に気づいていない」

最後にわたしを見た。「マチ子さんは見えない」

とくに褒められもけなされもしなかった。つまり役立たずってこと?

「わたしが今日じつじく見せていたけど見えなかつたもの、あれはなんだと思う?」

見えないんだからわかるわけがない。そしてまた手のひらを向けてきた。リカちゃん人形みたいなほっそりした手以外はなんにも見えない。

「そ、そんなものを持つて」おりょうさんが驚愕した。「自分ら高校生やろ? うつわー」

「おれにもひとつくれよ」と田澤。

「いらん。人間がダメになる」としまじり。

「仕切り屋」最後に「アヤたんがぼそつと言つた。

## 27話　「じめん？」　わたしは拒食症？（後書き）

これからヘンテコ先生たちとの対決になるはず。そして戦いをつうじて各々が人間的に成長　しないな。たぶん。

## 28話 おれらの値段、アイスクリーム以下

玲乃様はわたしに向けていた手のひらを静かに握り、見えないなにかをポケットに押し込んだ。結局なんだつたんだろう。あらためてぐるりと見まわし、静かな決意を感じさせる声で言った。

「敵に打ち勝つには、まず敵を知ること

「敵って?」田澤が言った。

「一十一世紀ヶ丘高校の先生全員。そして高校そのものを変革し」ふと眉根を寄せ、瞬きした。「聞いてなかつたの?」

「昨日のことは覚えてないぞ」しまじろうが胸を張った。

「敵って先生? つまり先生と対決するってこと?」田澤が首をかしげる。「なんで?」

「いらいらとかぶりを振る。「だから、わたしたちの将来のためよ。学校の方針は間違っている。このままではわたしたち全員、一人前の変人として教育され、世に送り出される。そして島の兄みたいな悲惨極まりない人生を送り事になるのよ。それでもいいの?」

みんな黙っている。

「だいぶ前のことは覚えてないぞ

「だいぶ前に話した気がするんだけど

」

「待つてよ。ていうかさ」田澤が自信たっぷりに遮った。「おれ、いまのままでいいよ」

「はあ?」玲乃様が小鼻を持ち上げ、いきなり声を張り上げた。ちよつとキャラが変わつてないだろうか。「あなた、戾りたいつて言つてたじやない!」

「まあね。でもおれ、なんでもできるつてわかつちやつたし。コツさえつかめばさ。きみが名前、まだ聞いてないよね?なんだつけ?まあいいや。とにかくきみに教わつたとおりにすればいいんだつてね。ていうか、学校なんて知るかよ。おれすげえ。マジ偉人。どうだまいつたか。あいつら、さんざんおれをコケにしやがつて。みんなそうだ。みんなとは他人のことね。他人なんか知らんもんね。自業自得だよ。なんとかしたきや、おれみたいに自分でなんとかすりやいいんだ。いまさら助けてー、なんて、虫がよすぎる。なんでおれがわざわざ助けてやらなきやならないんだよ。だろ?」

よく動く口でべらべらまくし立てる。たつたいつこの成功で自尊心の針がはるかに向こうへ振り切れてしまつたらしい。

「天狗になつたらあきまへんの?」

売れつ子時代のトミーズ雅ぱりの傲慢さだ。ボウリング場で見せたヘタレな様子は微塵も感じられない。正直、腰抜けのときのほつがかわいかつた。男つてどうしてこうなんだろう。

「おれはなんでもできる」しまじろうが親友の言葉に賛同するように言った。いささかのうぬぼれも見せず、静かにうなずく。「おれはもう恐れない。あのとき、おれは知つたんだ。学んだよ。苦い経

験だった だがおれは学んだんだ。脳は考えるためにあるといふことを 」

「ヒー 玲乃様は食い下がった。「ヒーローは孤独なのよ? 力を持つゆえにだれにも理解されない、つていう。あなたたちはまちがってる。なんならハンコックのDVDでも見ましようか? このフルハイビジョンの大型ワイドスクリーンで 」

わたしは不審に思った。なんでここまでして先生を打ち倒し、学校を変革したいと思うのか。言つてることは正しいし、わたしだつて同じ気持ちだ。一日でもはやく、ふつうの高校にかよいたい。そしてふつうの教育でふつうの女の子に戻りたい。戻れるなら、わたしはなんだつて協力するつもり。だけどあるお嬢の異常な熱意はただごとではない。

なにかある。わたしは氣を許さないことにした。

「ま、そういうわけだから」アヤさんが立ち上がった。ソファに登つて内股で立ち、うろたえる玲乃様を冷ややかに見下ろす。「こんなお屋敷、庶民にはもつたいないよ。一刻もはやく帰るべきだと思う。身分がちがいすぎるつていうか。身の程わきまえて辞退するよ。じゃあ作戦がんばってね。あたしたちはささき小屋に退散するから。マチ子さん、帰ろ。夕飯ご馳走しようか? ちょうど一ちゃんの失業保険が振り込まれたから」

わたしの手を取り、ぴょんとウサたんジャンプをして絨毯に降りた。そのまま強引に戸口へわたしをひきずつっていく。田澤としまじろうも外人のように肩をすくめ、じゃーなと言つて玲乃様に背を向けた。

「なんやぶつわからんかど　　」

おりょ「わんも立ち上がる。いよいよ玲乃様はひとりぼっちになつた。わたしは思わず振り返つた。なんだかかわいそひじやない？せつかく能力の使い方を教えてやつたのに手のひら返すようなこんな仕打ちを受けたら、あのお嬢だつてさよつとくらくなつるつとくるはず。

玲乃様は唇を噛み、うつむいて両の拳を握り締めていた。前髪が目を覆い隠しているので、泣いていたとしてもここからでは見えなかつた。一瞬、こつしょにハンマークを見たくなつた。

と、顔を上げた。表情は固かつたが、少なくとも泣いてはいないようだつた。まるでフランメンゴのダンサーみたいにサッと両腕を上げ、パンパンと手を叩いた。

「どう！」アヤたんが両開きのドアを蹴り開けた。ちょっと調子に乗りすぎ。「あー、なんかおなかすいたね。マック行きたい。みんなで行こつか？　事件によつて友情も深まつたことだし　　」

振り返つつベラベラと口を動かす。そして　　どすんどぶつがつた。

燕尾服に蝶ネクタイを来た何者かが行く手を塞いでいる。アヤたんがぐーっと見上げた。何者というか、もろに執事だつた。白髪に白ひげのおじいさん。背が高くて、すばらしく無駄の感じられない立ち姿。そしてすばらしく気配が感じられなかつた。

「なんだ？」しまじろうが氣色ばんだ。「次の展開はこつか。おれらを屋敷に閉じ込め、うつかり殺人事件に巻き込ませる氣だわ」

「ミステリーは嫌いなんだ。大嫌いだね」田澤がどつでもいいことを言った。「行こうぜ」

ところで執事は銀色のお盆を肩の上あたりに抱えていた。スプーンと小鉢が六つ乗つかっている。その中身は。

「「ロティバのアイスクリーム五点盛りよ」玲乃様が言った。「つまり、ひとりあたま五点ぜんぶつてことね。ストロベリーチョコレートチップ、ミルクチョコレートチップ、アイボリーチョコレートチップ、クラシックミルクチョコレート、ベルジアンダークチョコレート」

「うーまで言えぱじゅうぶんだった。」「うおーー」

男どもが叫ぶ。アヤたんはうれしさと苦々しさとでふたつに細胞分裂しそうな顔をしている。小声でこゝそり言った。「うおー」

「ただし、わたしに協力してくれたらだけど」

「聞くー、そして食べー。」

「やがて戻つてテーブルの前に腰を下ろす。やつすいなあ、この子ら。まあ自分もだけど。

アホな五人兄弟みたいに目を輝かせ、執事を見上げる。おじいさんは幽靈のように音もなく絨毯をすべり、一点の無駄もない動作でアイスクリーム五点盛りの鉢を配つていった。

「うー」

あつと/or/う間にいなくなつた。静かに扉が閉まる。

「明治エッセルスーパー/カップが関の山の庶民としては

おりよ/うさんは早速スプーンを取り、舌を出しつつ迷いスプーンをしてこむ。クラシックミルクチョコレートをひと刺しした。

「つまーー！」声をひっくり返して叫ぶ。そしてお約束の解説。「んー/これはいわゆるひとつめ、じょーひーんな口溶けに深く芳醇な力カオの香りが

それを合図に兄弟全員辛抱たまらなくなり、各自アイスクリームに食らいついた。アヤたんは苦虫顔でちょろつとすくつてはなめなめしていたが、五秒後にはあつたり欲望に負け、かぶりつきでわしやわしゃと口に運びはじめた。

わたしはアヤたんのほつぺについたチョコレートを指で取つてあげ、スプーンを持ち上げ、玲乃様を見上げた。いつもの冷たい表情に戻つている。腕を組み、娘息子がおいしそうに食べるさまを満足げに見下ろしている。ふたたび主導権を握られたようだ。

わたしはどうすればいいのかわからず、スプーンを下ろした。理由をはつきり言つことはできないけど、わたしの勘ではこれは悪魔の契約となりうるかもしかなかつた。このまま食べてもいいのか、それとも。

意を決し、玲乃様に質問した。

「ひとつ聞いていい？」

「食べないの？」指差す。

「食べる前に知つておきたいの」

「なにを知りたいの？」マチ子さん

わたしは自分の鉢を見下ろして言った。「中身がカラッポに見えるんだけど」

28話 おれらの値段、アイスクリー・ム以下（後書き）

ちあんちあん こう話でした。次からは妥当高校！ の作戦に  
移りたいもんです。

「なぜ見えないのかわかる？ これが結束の象徴だからよ」

「アーティバのアイスが？」

「以前、あなたの能力についてヒントを『えた』でしょう。その場で見えてほしいものが見えないんだ、って。しばらくぶりすぎて覚えてない？ いまあなたは目の前のアイスクリームが見えていない。ということはつまり、わたしたちは結束すべきなんだって、暗にあなたはそう言いたいのよ。そしてあなたが見えないものはいつも正しい」

たいへん強引な気がする。というより、食べたいだけなんだけど。わたしはスプーンの先を、なにもない鉢にゅうくりと差し入れた。なにかに触れた。おなじみのミルキーかつさくとした感触だ。この感触にはまちがいなく身に覚えがある。

ちょっと迷つたけど、わたしは結局パントマイムをすることにした。ひとくちぶんであらはすのアイスをすくい、スプーンを平行に保ちつつ口に近づける。いつも以上にあーんと口を開け、戦闘機を宇宙船に格納する。

戦闘機は母艦「わたし」に拍手喝采で迎えられた。パイロットは肩車をされ、みんなに手を振つてくる。そしていつのまにか先勝記念のパレードがはじまつた。

「またそななお上品に食つちやつて」アヤたんが横から口を出した。  
「だれに氣を使つてんのつて感じ」

そういうあなたはもつ少し氣を使つても罰は当たらないんじゃな  
いか。

「がつがついきなよ。みんな友達になつたんだからさあ。といつよ  
り戦友かな。これからみんなで作戦を実行し、勝利を勝ち取るわけ  
なので」

どうやら玲乃様の洗脳はあらかた完了したようだつた。つまり見  
えないのは、友達としてともに苦楽をわかち合つべきだかららしい。  
消火器は正しかつた。今度はどうなんだろつ。

「じゃ、本題ね」玲乃様が言つた。「敵に打ち勝つにはまず敵を知  
ること。基本中の基本ね」

「具体的には?」田澤が言つた。

「それはマチ子さん次第」わたしを見る。「わたしたちは次の作戦  
を実行するにあたり、敵を知る必要が出てきた。作戦遂行にはなに  
が必要?」

「敵を知る」

わたしはつぶやいた。何味の部分だかわからないがアイスをひと  
すくいし、口に運ぶ。氣づくと全員がわたしに注目していた。

「わひやひがひめへいほ?」

「一度に口に入れすぎ」玲乃様が冷ややかに注意する。「そして次  
にどうすべきかは、あなたにしか決められない」

「そう　えーと」わたしは口からスプーンを引き抜き、考えてみた。「敵の実体を知るんだから、たとえば　盗聴装置一式とか

」

「盗聴器ならここにあるぞ」

しまじろうがズボンのポケットに手をつひりみ、おもむろになにかを取り出した。

「おれの兄ちやんは盗聴好きなんだ。その手のアングラ装置は一式そろつてる」

「たまたまポケットに入つてたつてわけ？」

「そりゃ、用意いいだろ。都合がいいっていうか」

「ほかには？」と玲乃様。

「ほかには　音だけじゃなくて映像もあれば。だって、もしかして決定的瞬間を盗撮したら」

「ゆすれるな」田澤がわたしの言葉を引き継いだ。

「なるほどね。カメラならちよつどそこに」玲乃様が部屋の隅を指さす。「天井付近のかどっこに監視カメラが。マチ子さんには見えないでしょうけど」

見えなかつた。「じゃあつまり、先生の様子を探るために盗聴器と監視カメラを仕掛けるんだ？」

玲乃様はふっと息を吐き出し、ひとしぐなずいた。そして墨鏡を  
手のよのにパンと手を叩いた。

「じゃあ、明日決行ということじで。今日せよはくつ寝て。わたしも  
転校するまでこなすことがあるから、今日のといひはこれで  
こきよろきよろした。」

「ウチは？ なこするん？？」

29話 作戦開始！ は明日で（後書き）

ひっぱりすぎ！　すぐ展開して！　あと飲みすぎー。（自分に）

### 30話 リモートアヤたん、やる気なし。

翌日、わたしたちはさっそく作戦を開始した。内容はそんなに複雑じゃなくて、ようはたかつたりゆすつたりするネタを仕入れるために職員室に盗聴器を仕掛けるということ。そしてボロを出した先生から順にやつづけていく。作戦は複雑じゃないけど、そのぶん「デンジャラスだ」。そしてインモラル。そのへんに関してはわからがリーダー玲乃様に聞いてもらいたい。

重責を担うのはアヤたん。なぜかといふと、ジャンケンに負けたから。あの子はほんとうに、ビックリするほどジャンケンに弱い。

「最初はグー！ ジャンケンほい！」

昨日の帰り際、「ていうかだれが仕掛けるの」という話になり、数分後にはこんな感じでジャンケン大会になつた。当然このような「デンジャー」な任務はだれも負いたくない。ジャンケンの前、自然な流れで盗聴器の所有者であるしまじろうが設置すべきだという話で落ち着きかけた。というか落ち着かせようとした。しまじろうは顔色ひとつ変えず、非常に説得力のある反証を展開した。いわく、所有者は厳密に言うと兄である、それに自分は背が大きくガタイもいいので隠密行動には向かないだろう。たしかに。そしてジャンケン大会に持ち込みたくないみんなは「ぐく自然にほかのターゲットを探した。

田澤はすでにアホの烙印を先生方からいただきつづつだったので、職員室にいる時点で不審がられるだろうと自ら言つた。そして設置は女子がやるべきだと付け加えた。それから一十分ほど、女スペイの有用性を必死な様子でわたしたちに説いた。うつとおしくなつて

きたので田澤は無罪放免になった。

「それに仕掛け方も知らないしね」

「はいはい」とアヤたん。あなたも女子のひとりなんだけど。「あたしは当然ダメね。だって情報専門だから。それにぶきつちよだし。箸も使えないくらいね。」飯はいつも先割れスプーン

そして玲乃様をのぞきこむ。

「というか、あんたがやりなよ。まずはじめにリーダーらしこじろを見せればいいじゃん。チームからの信頼も得られるし」

「リーダーが自分で行動したら、そもそもチームなんていらないじゃない。でしょ？」お嬢はムキになって反論した。結局やりたくないだけだろう。「マチ子さんは？」

「は？ わたし？」

わたしはそれだけしか言えなかつた。唯一まともな反論ができるなかつたので、イヤな流れがわたしに傾きつつあつた。

「どう思う？ チームのために一肌脱ぐ気は？」

「えーと」このままではまずいので、反発覚悟で提案した。「ジャンケンで決めない？」

というわけでわたしの意見がとおり、公平にジャンケンで決めることになつた。最初はグー、とやるわけだけど、必ずだれかがパーを出して妨害した。「あーうそ。もうやらない、もうやらない

とか言いながら、結局毎回だれかがパーを出しつづけた。小学生でもここまでしつこくやらないだろうという状況がつづく。あの豪華なリビングで、一時間はジャンケンをつづけていた気がする。わたしもじきく紛れでやつた。だつて、授業を抜け出して職員室の各デスクに盗聴器を仕掛けたまわるなんて「めんこいむりたいじやないか。もし見つかったら停学まちがいなし」わたしの場合は家にも居場所がなくなるはずだし、それにこのメンバーなら、万が一の状況に陥つた際は全員確実にしらばつくれるだろうという確信があつた。

ジャンケン開始から一時間十分後、みんなはようやく大人になつた。

「ほえー」アヤたんがひとりだけチョキを出した。みんなはグー。「また負けたー」

これで三十七連敗だつた。

「もつかいお願ひ！ おねがいおねがいおねがい。もつかいだけ」

それから五十四連敗し、さすがのアヤたんもようやく観念した。これからは困つたことがあつたらジャンケンして決めよ。

そんなわけで、わたしたちは化学の実験室で携帯電話を片手に作戦実行のときを待つた。

「おう、おなかが痛いぞー」

打ち合せせどおり、アヤたんが言った。だけど残念ながらひとり

「…とすきて化学の先生には届いていなかつた。ちなみに化学の先生は峰といつ名前で、比較的ふつうの先生に見えた。だけどアヤたんに言わせるとそうでもないらしかつた。

「先生はテストの問題と回答をつづかり漏らしてしまうとこいつ能力の持ち主な」アヤたんが解説した。「だから生徒からは人気がある。ふじこちゃんとか呼ばれて。まあ見てのとおりおばさんだけね。だけど真の能力はほかにあつて」

「それよりも作戦でしょ?」わたしは腕をつづいて言つた。「おながが痛くなるんでしょ?」とある理由で

「おなかがー」と言いかけ、期待かなにかで目を輝かせつわわたしを見た。「もつかいつついて

つづいた。

「おなかがいたーい!」大声を上げる。「つむー、こいつは辛抱たまらん」

おばさんパーマの峰先生が気づいた。板書していたところで振り返り、アヤたんを見て目をまんまるにする。「あら、まあ…だいじょうぶ?」

「いいえ。といつわけでちよつくりトイレに

立ち上ると、先生がストップをかけた。

「でも、これからガスバーナーを使うのよ? マグネシウムの燃焼を実験するの。ぶわーって燃え上がるのよ、マグネシウムリボンが。

見たくない？」

「見たいなー。できれば見たいんですけど、ほんほんのほうが緊急事態で。でもだいじょうぶ。家に帰つたらゴーチューブで見るんで」

「あら、それは残念。でもこれ、テストに出るのよ。」

「作戦と関係のないクラスメイトが一気に色めきだつた。『具体的にどういう問い合わせですかー？』だれかが言つた。

「ダメダメ。言えるわけないでしょ？ 言つちやつたらテストにならない」

「いいじゃん。教えてよ、ふじいわやーん」

「問じのこべつー？」

「じゃあこれだけ。問じの一で出題しますよ。問題は『反応後の白色の固体はなんといつでしょ？』じゃない。ダメ。これ以上は教えられません。残念だけぞ」

「答えはー？」

「いいかげんにしなせこよ、みんな。自分で勉強して、自分の力で酸化マグネシウムですって答えなせや」

ハツと口を抑える。氣づいたときにはすでに遅く、全員ノートに答えをメモり済みだつた。能力がどうというか、ただのつづかりおばさんだ。

わたしはぼーっと立つてゐるアヤtanをもう一度つづいた。

「いやん」体をくねらせてうれしさで反応する（化学だけ）。

「なに？」誘つてゐるの？

「行きなよ」無視してささやいた。「この混乱に乗じて」

斜向かいのテーブルで、玲乃様が頬杖をついている。やる気がなさそうなのは態度だけで、さつきからこっちをチラ見してはイラついた表情で口を動かした。

「リーダーも怒つてゐよ」

「へーい」

アヤtanはしぶしぶ実験室をあとにする。結局、はじめから許可を得る必要はないようだつた。クラスメイトは次々にテストの問い合わせをたずねまくり、峰先生は「こら、いいかげんにしなさい。教えるわけがないでしょ？」と言つた次のセリフでぜんぶテスト内容をバラすもんだからよけいみんな調子に乗つてすでに収集がつかない状況に陥つていた。

わたしは堂々と携帯電話をのぞいた。じつはアヤtanのブレザーには小型カメラと双方向に通信可能なマイクがセットされていて、各自の携帯電話から様子をうかがうことができるのだ。そんなハイテクをだれが仕込んだのかといつと、話が長くなるのでまたあとで。

教わつたとおりに携帯電話の画面を切り替え、アヤtanの一人称視点にする。アヤtanは廊下を歩いてゐる。酔つ払いみたいにふらふらしてゐる。わたしは玲乃様に目を向けた。同じように画面に目

を落としている。しまじろうは腕を組んでむつまつと前を向いていた。自分の携帯を持っていないのだった。

田澤は机の影で口の影をプレイしていた。自分で言つべからなのだ  
から、ほんとのアホなんだらう。わたしは先生の田を盗んで消しシ  
ムを投げ、眞面目にやれと口を動かした。田澤はうれしそうにうな  
ずいた。パタンと閉じて携帯電話をいじくつ出す。

わたしは画面に田を戻した。アヤたんは相変わらずのうのうぶら  
ぶらしている。マイペースに寄り道しつつ、小声で鼻歌を歌つてい  
る。ビューゲルティルアングレイの「コーリングル」のようだ。

アヤたんE-Y-Eが立ち止まり、ついに職員室内部を捕らえた。閑  
散としている。

30話 リモートアヤたん、やる気なし。（後書き）

昨日のぶんを取り返す！ 明日はやる気合を入れて、やる気のないアヤたんを書きます。

授業中の職員室を見たのはほどんどはじめてだったけど、ほんとに活気がない。もちろん授業に出ている先生が多いから、というのもあるだろう。わたしがアヤたんEYEをおして見たときに思ったのは、休み時間に忙しくしているのは「まじめにやつてます自分ら」というアピールをわたしたち生徒にするためなんじゃないかといつことだった。

アヤたんは相変わらず緊張感のない歩き方でふらふら内部に侵入し、三往復くらいカメラを横に揺らし、それからさりげなく近場の机に近づいてカメラをピタッと設置した。すごい、まともに任務を遂行している。

ところで実験室はさんざんな状況だった。ふじこちゃん先生はすでに二期の期末テストまで全問「うつかりと」教えてしまっていった。もう用なしだろうし、実際に生徒もまったく管理できていない。クラスメイトも調子に乗りすぎだ。先生が辛抱たまらず逃げ出そうとするとだれかが「念動力」かなにかを使って実験室のドアをぴしゃりと閉め、べつの生徒がピンポン玉のいっぱい詰まったバケツを先生の頭上に出現させて仕掛けが作動していらないのにバケツを引っくり返してピンポン玉を強制的に降らし、またべつのは「教師が手を出せないのをいいことに暴力行為に走る生徒」の能力で先生につかかっていっていよいよ本格的に泣かしとにかくいちいち説明するのもめんどくさくなるほどケイオスぶりだった。先生はアホだけど確實にかわいそつたし、罪もなにもない。わたしは学校を変革するのだという玲乃様の口車に乗ってしまったわけだけど、この現状を見るにつけ、疑問が浮かんできた。

ほんとに敵は学校なんだろ？

「ちゃんとチェックして！」玲乃様が女子バスケ部の先輩みたいに鋭く注意した。鋭く注意できるほど実験室は混乱している。「あの子の目になつて。このカメラは双方向だから、無防備な体制で用務員の先生とかが近づいてきたら注意するの」

わたしは条件反射でうなづき、携帯電話をのぞきこんだ。アヤさんは余裕でいつこづつカメラを設置している。みつづめをつけ終わると、ベロを出しながらバッグに手をつつこんで次のカメラを「ごそごそやつて」いる。バッグを抱えた生徒が授業中に職員室でふらふらしているのに、だれも注意しに来ない。

「無防備すぎて不審に思われないのよ

と玲乃様。そんなもんなのか。

「あの子は適任なの。だから選んだ」

「ジャンケンで負けたからでしょ？」

「あの子がなぜ注意されないのかわかる？　自分を持つていなからよ。いつも他人のことばかり嗅ぎまわって、情報を集めて、そしていつしか自分がいなくなつた」

わたしはふたたび画面を見た。3D酔いしそうなアヤたんEYEで職員室を見ているうちに、一瞬アヤたんと同化したような錯覚を覚えた。「あなたがわたしにくれたもの～」とジッタリンジンの鼻歌を歌いながら、小型カメラを片手に奥へ進む。がくっと腰をおろし、よつづめを設置した。先生が目の前に十センチのところにす

わっていたんだけど、なぜか気にされない。空気みたいな存在だった。

わたしはなんだかさみしい気持ちになつてきた。ふだんあれだけボディタッチが多いのも、もしかしたら本人がよくこのことをわかっているからなのかもしれない。すでに休憩時間よりやかましくなつている実験室内を見まわす。帰つたらちょっと優しくしてあげよう わたしは思った。

しまじろうは桂馬の位置にあるテーブルで、仏像みたいにじつと腕組みをしながら田を開じている。苦しそうに一瞬眉をひくつと動かした。同じ高校一年生として、この現状を恥じているんだろう。それがクラスの現状についてなのか、それとも自分だけ携帯電話を持つていないことについてなのか、そこまではわたしにはわからなかつた。

田澤は現状と口の両方を楽しんでいた。きっとあとでお嬢のお叱りを受けるだらう。

「はーい、ひょっとそこそこ聞いてくれます?」

おじさん先生がすわるイスの背もたれをつかみ、ずるずると後ろに引いた。それでも先生は気にしない。振り向くもせずに愛妻弁当をひたすら口に運んでいる。

ぺたつとくつつけた。裏につけるのがめんどくなつたのか、机のど真ん前に置いた。

「どーもー」

「だいじゅうぶ?」わたしは思わず声をかけた。「あと二ヶ残つてる?」

「　　ザー」アヤたんが言った。「ザーザーザー　　」

「なにそれ

「ノイズ」

「なにそれ

「あと残りは、ひーふーみーよー　　」アヤたんのカウントする手がカメラにあらわれた。「たくさん」

「様子はまだだ

しまじかがぶつぶつに席を立つてやつてきた。来いと手を振り、田澤も呼び寄せる。そして玲乃様も。わたしは新しいゲームを買った小学生みたいにみんなに囲まれた。全員でわたしの携帯電話をのぞきこむ。

なんて緊張感のない作戦。

「あと二ヶの?　はやくして

玲乃様が言った。アヤたんはザーとも言わない。

「あつとマチ子さんの声しか聞こえないのよ」無理やり納得する玲乃様。「はやくするよつて伝えて」

無視してただと思つた。

「お」

「アヤたん。立ち止まつた。視界がきょりきょりと動く。わたしは同時に画面に顔を近づけた。

「メーテー、メーテー。あーやば」鋭くしゃべる。「ザー」

ザーと口で言つたあと、ほんとにザーとなつた。砂嵐になつた画面に全員がかぶつつく。

「アヤたん? どうしたの?」

わたしは呼びかけた。反応がない。「どうしたの? わたしあいつから安心して話して」

脳裏になにかがひらめき、わたしは口ひもつた。砂嵐になる直前、画面の向かつて右端に映つた女の顔。見覚えがある。黒髪で鬼太郎みたいに片目が隠れた、面長で妖艶で独身で行き遅れ感の漂う顔だ。

なんだっけ? 日本に来日するみたいな名前の女教師。

思い出した。

「御御坂」

「だれそれ?」

田澤がゲームしながら聞いた。わたしは答えず、砂嵐を見る。

緊張感が出てきた。

### 3-1話 後で後悔、お腹が腹痛（後書き）

なんか救出劇になつてきました。しかも救出すべき理由をしつかり提示しているし（そのつもつ）。上々じゃないでしょうか。そういうのないか。

「諦めましょう。任務に犠牲はつきものよ」

玲乃様が立ち上がり、いきなり言った。

わたしはおずおずと反論した。「まだ捕まつたと決まつたわけじ  
や」

「いいえ。いまいり本部に連行されて拷問を受けているはず。  
いい？ あなたたちも捕まつた場合はなにを聞かれてても『記憶にござ  
ございません』と言つのよ」

メンバーを見まわす。しまじろうは神妙につなずき、田澤は「あ  
ー！」と声を上げながら頭をかき、DSをほつり投げた。残機がゼ  
ロになつたらしい。

最後にわたしをじつと見つめる。意味ありげに目を細め、リップ  
塗りたてのうるさい唇を開いた。

「個人的にどんな関係にあるのかはあえて聞かないけど、あなたも  
状況によつては非情に徹しなきやね。チームが最優先、個人的な感  
情は二の次よ」

「アヤたんを見捨てるつてこと？」

「そつは言つてない。わたしが言いたいのはリーダーとしての苦し  
い立場よ。ま、とにかく手遅れね。諦めて先に進みましょう。こう  
いう状況ではあれこれ考えてもしかたないわけで」

玲乃様はぐるりと振り返って混乱状態の教室を見まわし、指先で唇に触れながらなにやら考え込んだ。手串でパツと髪を持ち上げ、すたすたと歩き出します。そしてなにをするつもりかと思えば、クラスの連中をリクルートしてはじめた。なんて薄情な女だ。わたしはセクシーな背中とお尻をにらみつけた。

「なんとかなるはずだ」

しまじろうがつぶやいた。「なにかい考えがあるはずだ　あ、もう少しで思いつきそう」

「ダメ！」わたしは条件反射的にしまじろうの思考を遮った。「考えちゃダメ」

「どうしてだ？　じゃあおまえは」のまま見殺しにしたり、つまりそう言いたいのか？」真正面から見つめられ、厳しく問い合わせられる。「そんな薄情な女だとは思わなかつたぞ」

もうじやなくて。

玲乃様は身振り手振りを交えながら、だれかと交渉をしていく。わたしは少し横にずれ、のぞきこんだ。相手はいなかつた。というか、見えないんだろう。たぶん。またしても。

ふとひらめいた。見えないってことは、重要だつてこと。ということは、あのお嬢にとつてはわたしたちじやなくともだれでもいいつていい。

携帯電話が震えた。せせやく声。「マチ子さん」

わたしはかぶりついた。アヤたん？ 助けを求めているのだろうか。でも残念ながら、声はアヤたんのものではなかつた。

「先日は」」ひそつわまー」ちがう。」の声はゲゲゲの女房の孫娘、  
行き遅れビッヂの御御坂だ。」調子はどう? まだヒリヒリしてゐ  
?」

答えようとして口を開をかける。

「そうそう。あなたたちの作戦はすべてお見とおしよ。だつてわたしは先生だもの。生徒が勝てるわけないでしょ？」ほんの少し威嚇の色がこもつた。「わたしはいい先生なの。なぜアヤたんに気づいたか。わたしはだれにも気にかけられない生徒に気づくことができる。ものが見えていない生徒に大事なにかを見せることだつてできる。バカなADD持ちの生徒にもめげずに接することができる。なにをやつてもうまくできない生徒に人生の目標を与えることだつてできる。そして」

いつたん言葉を切つた。画面の砂嵐がじょじょに薄れていき、見覚えのある女の顔が浮かび上がってきた。

「転校生を落ち着かせ、悩みを聞き、学校になじませることもできるのよ。　　いい？　だれもわたしの体重は当てられない。わたしにかかればあなたたちはただの高校生なの。あなたたちは見えない。あの万年転校生がどんな裏の意図を持ち、あなたたちをけしかけ、学校を変革しようとしたのかを。あなたたちはみな騙されている。はやくそれに気づくことね。危ない橋を渡つてはいるのよ」

わたしは声が出ない。そして画像は完全に地上デジタル化が完了

し、数日前にわたしを手籠めにしたあの顔がドアップで表示された。

「ま、あなたはかわいいから許しかけやつたけど。またイイことしない？ 悪いよつにはしないから。今回のことを忘れてあげる。見返りがほしいんでしょ？ だから考えてみて、よきにばかりつて、みたいな感じで」

無駄に言葉を呟くしているが、つまりわいくどい寝返りのお誘いをしているのだ。この女がなにを考えているのかはわからないけど、こうことをすれば今回のおイタは忘れて今後三年間の高校生活は保証してあげる、ということだらつ。わたしだけ。

玲乃様を見る。じちらもなにを考えているのかわからない。勧誘している相手が見えないと同じ。

「停学になれば内申にも響くでしょうね。ま、気にしない大学があればいいんだけど」

さらに追い打ちをかけてくる。と、画像が乱れた。

「たす」

切れた。

「ほらほら、慌てないの。おとなしくしてなさい」御御坂が猫なで声で言つた。『あなたはマチ子さんをおびき寄せるエサなのよ。三人プレイでなきやただのお荷物なんだから。マチ子さんが来たら、ふたり同時にたっぷりかわいがつてあげるから』

企みをぜんぶ話した。アニメのアホな悪役みたいだ。

「たすけてー」

なにをビットやってるのか、アヤたんはビッチ画像にねじじむようにエマージェンシーゴールを送つてくる。人質として縛り上げられているわけではないはずだけど、声はじゅづぶん苦しそうだった。

「アヤたん」

やつと声が出た。だけどほかに言つべきことが思いつかない。携帯電話に映る御御坂を見、そして授業を放棄しほんやりと教卓にすわっているふじこちゃん先生を見た。わたしたちはなにをしようとしているのか。もともとわからない感はあつたんだけど、よけいにわからなくなってきた。変人を育てる高校で三年間、いまより立派な変人になつて社会に巣立つ。それはまったく疑いようもなくまちがいないようだつた。だけど ほんとにそうなのだろうか。わたしだつて他のみんなだつて、言われるとおりに教わるとはがぎらないのだ。考える頭を持つてているのだから。ふじこちゃんを見よ。完全に思惑がはずれているじゃないか。

ええじゃないか。このままでいいのかもしれない。つまり、平成の開国なんかしなくともええじゃないかええじゃないかええじゃないかと 。

「たすけてくれー」アヤたんの声。そしていきなり笑い出した。「うひやひやひやひや！ これはたまらん お願い もうやめて

マチ子さん大好き うひやひやひや」

わたしはうなだれ、両手で耳をふさいだ。これ以上聞いていられない。学校に反抗したばかりにアヤたんを失うことになるなんて。

残念だけどわたしにはなにもできない。

と、しまじろうがわたしの肩に触れて言った。

「いい感じの」と言つてもいいか

振り向いて大仏顔を見上げる。よくわからないがうなずき、先をうながした。

「やつらは知らない。高校生は内申よりも友情を重んじる、ということを」苦しそうにつつむき、ふるふると震えはじめた。男の怒りが爆発しそうな感じだ。「それがやつらの誤算さ。生徒だって先生を倒せるんだ。ぜつたいに許さんぞおれまい。やつらはおれを怒らせた 私の戦闘力は53万です」

少年マンガ的なセリフを立てつづけに並べる。そしていきなり田澤の背中を殴りつけた。

「クリリンのことか!」

「なんだよ。なに言つてんだよ」半分寝ていた田澤が顔を上げる。「とこりでこまか」夢を見てた。ツイなんとかでつぶやいていい?」

「助けに行くんだ。友情パワーみたいな力でな。だいじょうぶ、おれたちならできる。できるさ」完全に世界に入つていて。「できるつたらできるんだ。ということでみんな集まれ。ちょうどおれにいい考えが

「

### 32話 危険が危ない！ 友情パワーみたいな力で内申急降下 の巻（後書き）

明日はヒマなので、全体の流れをしつかり考えます。まあ、それなり。

### 33話 死ぬんじゃない、爆発するんだ

「おれにいい考え方」

わたしと田澤が同時にしまじろうを押さえこむ。わたしの体は本能で危険を察知し、気づいたときにはしまじろうのみぞおちにこぶしをねじこみ、相手がうづつと言つて上体を折り曲げたところを背後にすばやくまわりこんで腕を取り、ひじをキメてねじり上げ、後頭部をつかんで実験室の黒いテーブルに横つ面を叩きつけた。

田澤はかなり遅れてから両手をわたわたやつていたが、しまじろうが拘束されているのを見ると決まり悪そうに腕を下ろした。わたしを見る田澤は複雑だった。恐ろしがっているような、尊敬しているような。

「 それ、なんて宗派?」

「ただの護身術」

去年ちょっとした反抗期があつて、わたしは護身術の授業と剣道部と公文式を一気にやめた。理由なんてわからない。ただただイヤになつたのだ。同級生といふとひとり姿勢がいいのがバカみたいに思えてきたし、先生には褒められるし、なによりいい子だと誤解されるのが我慢ならなかつたんだと思つ。もうウンザリ。母の教えも、道も、わたしは一時期留学を考えるほど和の心を憎んでいた。いまも好きじやない。だからいまはなるべくだらしなくなつと、将来的に背骨が曲がりそうな姿勢で床にひじをついてテレビを見たり、迷い箸をしたり、畳の上をスリッパで歩きまわつたりしている。

護身術は久々だったが、体が覚えていたようだ。つかんだ手首を肩甲骨のほうへ持ち上げる。しほじらつは悲鳴を上げた。田澤はじつじつと口元の両端を持ち上げ、妖精めいた笑みを浮かべた。

「かつかけーな。免許証伝じやん。今度おれに教えてよ

「教えてすぐできるもんじやないよ

「いいじやん。弟子入りさせてよ。おれ金曜の放課後、ちゅうじひマなんだよね」

「あなたには

「無理だよ、と言いかけ、わたしは口一もつた。聞きよつよつてはなんらかのお誘いのようにも取れる。

さりげなく田澤をのぞきこむ。ん？ と眉を上げて見返してきた。どうやら言葉どおりの意味らしい。たしかに、じつにそんな心理戦ができるわけないのだ。まあいいや。

そんなわけでしまじろうを考えさせないことに成功し難を逃れたわたしたちは、アヤたん救出にあたつてもう少し穩便でにおいも少ない方法を考えることにした。

わたしたち三人は神妙な顔で携帯電話を見下ろした。画面にも映っていなかった。ときおりアヤたんの苦しみに満ちた叫び声がノイズ混じりに聞こえてくる。

「うひやひやひやひや！ ダメダメ、そこはダメ あたし弱いの。女の子ならだれだつて うつうつうつうつおうー」

「停学確實だな」しまじろうが負傷した肩を押さえつつ言った。  
盗聴器をセツトしよつとしたんだ。全国一コースものだわ

停学。ものすごいリアルな言葉を耳にして、わたしは現実世界に引き戻されたような気がした。変人高校で頭のおかしい人間とヘンテコ生活を送っていたせいで、かなり認識にズレが生じてきているようだった。

「おこひ、おぐひ」でもおだいのじとおだいわん

「 ち ょ つ ち ょ つ ち ょ つ ち ょ つ  
そ れ は ま た 大 き な ア イ テ ム で  
」 ふ た た び ア ヤ た ん 。 「 な ん と 。

それはまた大きなアイテムで

あのふたりはいつたいなにをやつているんだろ？

「おれらも停学つてー」と? 田澤が声を裏返す。  
「なんもしてない  
じゃん」

「しかし、おまえが

「した」

「おーなーじー」

「あはははは。うへー、これはまた厳しい

「ねえ、助けないの？」わたしはたまらず口をはさむ。「友情パワー

一がどうとか言つてたじやない、わつせ

「時間切れだ。いいところでおまえに水を差されたからな」しまじ  
るつはまじめくさつてうなずいた。「やる気をなくしたんだ」

「おれ、いち抜けた」

田澤が背中を向けて立ち去りかける。と、見えない相手と話し込んでいた玲乃様がくるりと振り向き、氷のまなざしでこちらを見据えた。遅れてやってきたライトブラウンの髪がふわっとほおを撫でる。いちいち動作が大きさだ。

大股でやつてくる。「助力が得られた。助けに行きましょ」

「助ける?」わたしは聞いた。「さつきは諦めましょ」

「言つたでしょ? 助力が得られたって。だからよ」

「やだよ。それに停学になつたら変人もクソもないじやんか。つい  
うか、それこそ変人の人生なんじやないの」

田澤がめずらしく鋭いことを言つた。

「退学にはならない。ぜつたいに」

「どつして?」

「その前にこの子を紹介する。わたしたちの救世主」

となりのほうを指さす。わたしにはただの空間だったけど、田澤

もしまじりつも見えてこないよつだつた。

「知つてゐるよ。大栗だる」田澤が言つた。口調に軽蔑がこもつてゐる。「こいつになにができるんだよ。つまくやれるつていつたらモンハンくらいだる」

「救世主が聞いてあきれるだ」しまじりつもつづける。「いまだに親に髪を切つてもらつてこよつたよつだ」

「たしかに、この子の能力はモンスター・ハンター・シリーズをだれよりもうまくプレイできるだけで」

「バイオもだよ」空間が不機嫌そつに言つた。「爆発しき？」

「は？」だれもつゝこまないのでわたしが返した。「爆発つて？」

「ただの口癖よ。意味はないの。イラついてるだけ」玲乃様が冷ややかに言つた。メンバーを見まわしてつづける。「じつはこの子のお兄さんも、二十一世紀が丘にかよつていたの」

「てことは、変人なんだ？」田澤が言つた。「病気持ちの能力持ちなんだ」

「そり。ちよつとわたしたちの助けになるよつた能力を、ね」

「どんな能力？」

「それは」

「あー、待つて待つて待つて

わたしの携帯電話がザーと鳴った。まるで『いボブヘアが息を切らしつつあらわれた。

「あんた、あたしの役目を取らないでよ。このハーフなり損ないアヤたんがむーんとうなつてにらみつける。説明のためにわざわざ登場したのだろうか。『大栗兄は五歳年上、現在高校一年生。え？ それじゃ計算が合わないって？ そうなの。大栗兄は『いつまでも高校にいすわりつづけることができる』能力の持ち主。つまり

「力を借りるのよ。そつすれば退学にはならないでしょ？」

玲乃様があつかぶせて要點を言い終えた。

「なるほど」しまじろうがあこげ手をやる。『たしかにつまり手だ

「うかなあ。わたしはふと気づいた。

「でもそれって

『留年するつてことじゅん』田澤がひきついだ。『意味ねー

意味ねー。アヤたんも含め全員が声をそろえて言った。

「そうね。たしかに意味ねーかも。でも現実は厳しいの。退学よりはマシでしょ？ 少なくとも留年であれば一から学年をやり直すことはできるんだから

「

「あのー、いいかげん助けに来てくれませんかー？」

アヤたんが画面に顔を近づけ、鼻をくつつけて言った。ピシッと鞭を打つような音にビクリと反応し、横を向いた。そしてあんぐりを顎を落とす。

「そ、それはまた最新鋭な　　。え？　ビートにつけるって？　後ろに腕をまわすの？」

### 33話 死ぬんじゃない、爆発するんだ（後書き）

うーん。ストーリーにはその世界に合つた「行動する理由」つてものが存在するはずなんですが、まだ見えていません。お気楽な世界にまじめな理由を結びつけるとちょっとちがつてくる。それはわからんです。まだつかみ切れてないってことでしょうか。

### 34話 時計は友達

「これ以上ぐだぐだしていとこやう問題が出てきやうなので、さつさと救出にいくことにした。わたしたちが実験室から出ると、大栗もあとからついてきた。わたしには見えいんだけど、男どもがうつとおしゃうに振り返るのでなんとなくわかつたのだった。

「なんでこいつがついてくるんだよ」田澤が言ひ。「足手まといなんだよ。死ぬぞ」

「気持ちはうれしいんだが」しおじひつは振り返り、諭すように言った。「やはりおまえには荷が重すぎや。ここはおれたちに任せとけ」

こまだに少年誌気分が抜けでないふたりは気づいていなかつたけど、こいつの間にか後藤も後ろについてきていた。こつちは見える。

「どうか後藤つてだれなんだ。

「後藤はいつ何時でもエキストラになれるという能力の持ち主なの」いきなりアヤさんが画面越しに言つた。「とくになにをするわけじゃないけど、なんとなくね。でもエキストラって必要でしょ？ 映画なんかじゃとくに。よくわからぬけど必要なの。いつどんなときもね」

「なんか余裕そうだね」

「いたたたた」いきなり痛がつた。「そんなことはない。はやく助けに来て。そしてあなたの胸に飛び込んであれこれと」

わたしは通話を終了した。

「で、あこつまべーに捕らえられてるんだ」しみじりが言った。

「反省室でしょ?」とわたし。

「だが、驚いてもみる。あれこじで鞄を振るうみたいなスペースがあると思つか? その他ももの器用具も。あこつまじかるべき場所を用意してプレイするものであって」

「そのとおりだった。反省室はカラッポだった。

「うーん。なにをつてんだ、おまえら

やーへアホの坂田にそつくな担任の富田先生がやつてきた。」  
まだ授業中だらう。なにをやつれやんと

「ペーと」わたしが言った。「じつはですね

「なんとこつか」と田澤。

「つまつ」としおじり。

「正直申し上げると」と後藤。

「それはほんとうですか

と、大栗が言った。姿は見えないけど、オタク特有のねちっこいはいやとこつまじかわってく。

「どうしていまが授業中だと先生は断言できるんですか。時間は絶対だと先生は言い切れるんですか。先生の思い込みなんじゃないですか。理論的に証明できるんですか。どうなんですか」

「なんだって？」富田先生はしどろもどろで答えた。「い、いいか。時間をそんなふうに言つもんじやない。時間は友達なんだぞ。ほら、その証拠に」

指さす。レトロなサッカーボールふうの壁掛け時計があった。十一時十分。だけど富田先生がいる以上信用できないし、針はいまにも遊びまわりたくて「うずうず」していた。

「でも時計は交通事故からは守ってくれないでしょ。いへら友達といつても」

「そんなことはない！」

金切り声を上げる。先生はかなり取り乱していた。

大栗は冷ややかにつづけた。

「いいえ。どっちもばらばらになるだけですよ。そして死ぬ。第一話でストーリーは終了するんです。ワールドカップにも出られないし、イタリアの強豪クラブに移籍することもできない。もちろん、女性の人気も得られない。ぼくの言つ意味がわかりますか？」

なんの話だかわたしにはさっぱりわからないけど、少なくとも先生にはなんらかの効果を与えたようだった。富田先生は苦しみはじめた。「ぼ、ぼくは今まで遅刻したことがないんだ。二十五年間、

一度もだ。今朝もそうだった。起きる時間になると田原覚ましが

「先生がが前日にセットしたからでしょ」

「していない！」

「酔っ払って覚えていないだけでしょう」

「ウソだ！ そんな」

「高橋陽一はじつはサッカーが好きじゃないんですよ。野球のほうが好きなんです。知つてました？」

「このひとことが決定打になつたようだつた。先生はがつくりとうなだれ、それからゆつくりと顔を上げた。惚けたよつな笑みを浮かべ、うつろな目で職員室を見まわす。そして生きる望みを絶たれた感のある先生の背後で、サッカーボール型の時計が「ざまあみろ」とでも言いたげに長針と短針をハイタッチさせた。

なんのこつちや。とにかく先生は自殺でもしそうな雰囲気を背中に漂わせつづけ引き下がつた。田澤としまじろうはおもしろくなさそうにある一点をにらみつけている。大栗とやらがどんな得意げな表情を浮かべて居るのかは、やっぱりわからなかつた。

「ま、とにかくこれで教師をひとり撃退したわけね。」

玲乃様はそう言つと、アメリカ人のように肩をすくめ、反省室をのぞきこんだ。なにか気になるところがあるようだ。

電話がかかつてきた。公衆電話からだ。あわててボタンを押し、

耳に当たる。

まさか 。

「もしもし？」

「大栗の能力についてだけど」なんだ。だれかと思えばアヤた  
んだった。「あいつはだれよりもうまく攻略法を見つけることがで  
きるの。モンハンが得意というだけじゃなくね。つまり、生まれな  
がらのウイキペディアの管理人というわけ」

「ゲームだけに？」

「ゲームだけに」

「こめだいにじるの？」

ザー。

「地下」それだけ言った。

「どこの地下？」

返事はなかつた。わざわざからなんなんだ。余裕で電話をかけられ  
るくらいなら居場所をぼろつと漏らしてもいいもんなのに。

「あのあびっ子から? どこにじるって?」

玲乃様は上履きを脱いで反省室に上がつた。四つん這いになり、  
コンタクトでも落としたみたいなじぐさで畳をまさぐつている。

わたしは答えた。「地下だつて」

男ふたりは玲乃様のお尻に釘づけになつてゐる。たしかに、なんとも妖艶なにゃんこだ。

「これを見て」

「やんこは上体を持ち上げ、お姫様すわりをして前髪を払い、わたくしたちに顔を向けた。人差し指を真下に向け、うなずいた。

わたしは聞いた。「畠がどうかした?」

「これをひつぺがして」だれにともなく命令する。

「だれが?」

「さあ、だれでもいいけど。こゝは男の仕事なんじゃない?」

「ぼくはイヤだ」大栗が怒つたよつて言つた。「畠アレルギーなんだ。力も弱いし。そんなことをするために生まれてきたわけじゃない

「だれも期待してねー」

ウザそうに田澤が言つた。しまじりつとふたりで畠の縁に指を差し入れ、むんずと持ち上げる。

わたしはのぞきこんだ。ふつうは板の間が出現するはずなんだけど、そうではなかつた。中は空洞がぽつかりと口を開けていて、明

らかに歯じげなハシゴが下に向かって伸びていた。ゆるやかな風を  
顔に感じる。風はしぐついて、カビくさかった。真っ暗で底は見  
えない。

「なぜ地下についどる階段が、こんなところ」

と、すっかり存在を忘れていた万年エキストラの後藤が言った。  
いつたいだれに対しても説明しているんだろう。

「そうか、わかったぞ。きっとこの奥にアヤたんが捕らえられてい  
るんだ！」この奥にはなにが待ち受けているのだろうか。それ  
はだれにもわからない。そして次回、すべての謎が明らかに

「つねせえ」

田澤がぼそりと呟つた。「ねえの謎は今日でおしまいだよ」

### 34話 時計は友達（後書き）

海兵隊員が職員室に突入してくるはずだったのですが、なぜか地下に行く展開に。そしてわけのわからないナレーション要員、キャプテン翼ネタ これも飲み慣れない芋焼酎の効果でしょうか（知るか）。まあ海兵隊はあとで使います。せっかく思いついたんだし。

足もとで暗黒の穴がぱつかりと口を開けている。さびた鉄のハシゴ、内側は筋肉がむき出しだ、古井戸のように見え。封印されし邪悪が飛び出してきて世界を支配してやるぞーなどとのたまう展開になるとしたら、これ以上の穴もシチューニー・ションもないんじやないかと思えるほどだった。

のぞいていのうちふりと引き込まれそうになり、わたしは思わず腰を下ろした。ひざ立ちあとじかる。後頭部に堅いものがぶつかつた。慌てて振り返る。

田澤が痛そうに口を開けていた。「ぐりりていったぞ、歯が

」

「降りるのか」しまじりうがだれにともなく言った。「その前に作戦を考えたほうがいいんじゃないかと思いつが」

「ダメー！」全員が言った。

「もうひん降りるの」と玲乃様。「あなたのバカパワーはのちのちのために取つておこで。ここまで来たら引き返せない。とにかく降りて、それから考えましょ。どううじてこようと突進あるのみ

「それは考えたほうがいいんじゃない?」わたしは提案した。

「薄情ね。恋人を見捨てるの」

「だつて、この奥にアヤたんがいるとはかぎらないでしょ？ それには、探せばべつのルートが見つかるかも」

ザー。

「その穴の奥にいるよー」アヤたんから通信が入った。「そしてべつのルートは存在しないよー」

「待遇のいい人質だな」しまじろうがつぶやく。「自分で出てこよー」

「こまは休憩時間にやの。だから」

「こやの？」

「あー」めん。こまにやんこな。耳に尻尾生やしてね。詳細はのちまじお話するけど、だからこにゃん語を

「一刻の猶予もないよー。はやく助けに行きましょー」

玲乃様が締めた。厳しい表情で見まわす。わたしたちはしぶしぶうなずいた。

「ぼくは授業に戻らなければならぬ」棒読み口調で大栗が言った。「申し訳ないんだけど落ちる」

縁起でもないネットスラングだ。ドアが静かに閉まる。じつやう出て行つたようだ。

「じゃあままず降つる順番を決めましょー」

「男が先だ」男のしまじろうがすかさず言った。「そして女とつづり。ハシゴを降りるときは昔からひとつ決まっているんだ。おい、後藤。先陣を切れ」

後藤に視線が集まる。ちなみに後藤のルックスは、たいへんふつうだった。これといって華もなく、かといって超絶不細工というわけでもない。説明が難しい。田を離すといきなりどんな顔だか忘れてしまうタイプだった。

だからHキストラなんだね。」

「どうして？」

「おれはチャンスを『えよ』としているんだ。主役級になりたくないのか」

「なりたい」憧れをにじませつつ言った。

「ならば決断しろ。運命は自分でつかむものだ。　　とここのわけでさつそく

しまじろうが穴を指さし、はよせこといつ感じであるをしゃくつた。後藤は神妙な顔で細かくうなずき、ゆっくりとハシゴをつかみ、地獄の穴に足を下ろした。右足、そして左足。下をのぞきこみ、一步ぶんはしい」を下つる。

顔を上げた。「怖い」

「はやくじろ。あとがつかれてる

「のがんばり次第で今後の役者人生が決まる後藤は、「あー」と声を上げながらみつづほど下った。もつ半ば暗闇に紛れてしまつている。

「だいじょうぶみたいだ。ハシゴの留め金もしつかりしてゐる」左手を離し、岩肌に打ち込まれたボルト部分をまさぐる。余裕が出てきたのか笑顔さえ見せてゐる。「おーい。みんなはやく来いよ。ぜんぜん怖くないぜ」

右手を離し、上に向かつてカモンと手を振つた。「どうした、怖いのか? ぼくは平氣だぞ! よーし、このまま主役を食つて自分の人生を自らこの手に引き寄せるんだ

ゆつくりと体が後ろに傾いていく。悦に入りすぎて本人は気づいていないんだけど、後藤はどっちの手も離してゐた。

「うわー」

気づいたときにはすでに遅い。両手をひっかくように振りまわし、ハシゴに指をかけようとする。右手が空を切り、左手が空を切つた。もう空を切るものが残されていない後藤は、観念して落下することにしたようだつた。

どさつ。かすかに激突する音が聞こえた。わたしは思わず口を押さえた。

「どうしてこんな

「エキストラだからじゃねえ?」

田澤があつさつと言つた。なるほどね。

「運命には逆らえなかつたようだな」

しまじろうは肩をすくめた。仲間の死を四秒で乗り越え、穴に入り、ハシゴを降りていく。

次は田澤。そしてわたし、玲乃様とつづく。

ハシゴを踏むカツカツという音が反響する。中はぐさかつた。とんでもないにおいだ。どこかで嗅いだことがある。と、すぐにひらめいた。これはプールの更衣室のにおいだ。古井戸ってこんなにおいがするんだらうか。嗅いだことがないのでわからないけど

頭上の明かりがみるみるしほんでいく。その前には玲乃様の靴とソックスとほつそりした膝の裏と太ももとお尻があつた。

「落ちたら助けてよ！」わたしは下に叫んだ。自分の声が不気味に反響する。腕がかすかに震えている。

直接的な答えはなかつた。そのかわり田澤がこう言つて返してきただ。

「パンツまる見えー」

わたしは反射的に右手を離し、スカートを押さえた。

「無駄無駄無駄！ こんな暗闇なのに白がまぶしーい」

だから先に行きたがったのか！　わたしとしたことが、不覚だった。

「待て。おまえが先頭に立て」さりとて奥の方からしまじりが言った。「そしてその暗視装置を貸せ」

「了解。一分交替で入れ替わる。分かれ合ひの精神つてやつを。そういうもんだろ、友達つて」

下の方でポジションチェンジが行われている。両方落ちて死ねばいいのに。

頭上から玲乃様に話しかけられる。

「で？」

「でつて？」

「いま考へていることよ

「なにも考へてないよ」

「じゃあ考へて」

なにが言いたいんだか。リーダーの申しつけなので、わたしは慎重に階段を下りながら言つべきことを考えてみた。

意外とあつさり見つかった。

「　目的を知りたいんだけど」

「言つたじやない。だいぶ前に」いきなり怒られた。「学校を変革するのよ。わたしたちの将来のために。」そのままでは変人として世に送り出され、全員が悲惨な人生を

「

「ほんとうに?」わたしは思わず口にした。

「そればどういう意味?」

「ほかの

口も。つまり言いたいのは、あなたもかなり怪しいんじゃな  
いかつてこと。ほんとうに学校を変革することが目的だつたとす  
も、自分のためつて感じがする。そのためにわたしたちが利用され  
ている、といつ。それでもいつちやいいんだけど、なにかべつの  
目的があるような気がしてならない。そしてその目的が達成された  
曉には、わたしも田澤もしまじろうもアヤたんも見殺しにされる  
。

もう二つのつて映画でよくあるじゃないか。

「なにを考えているの、マチ子さん?」

詰問される。下の方では「かんりょー」<sup>1</sup> といふかけ声とともに  
コンバートが終了したようだつた。しまじろうが不気味に見上げて  
いる。顔に装着した暗視ゴーグルが赤い光を放つていて。

わたしはふたたび顔を上げた。「べつに。なんでもない

「あつそつ。あなたがなにを考えているかぐらうすぐにわかるんだ

ナビ。でもこまかわせじりぬけやない。救出に集中しましょ」

「ふりふりだぞ、ふりふり　おい、なんだ、クソー。田澤、ゴーグルの調子が悪いぞ。どうなってるんだ」

「横のダイヤルで調整しろよ。やつちじやなくて。やつは倍率だろ。どんだけ急接近するつもつなんだよ。欲望に忠実あがると身を滅ぼすぞ」

わたしは無言のまま奥へと進んだ。先はまったく見えない。そして無事地面に降り立つたら、連中のケツの穴に拳をつっこんで口越しに暗視ゴーグルをもぎ取つてやがつと黙つた。

### 35話 おれの名はサム ほのかにエロいぜ（後書き）

はじめての死人が出ました。たぶん死んでないとと思うんですがね。これから先は、やっぱり密教ネタになるんでしょうかね。先生方がイルミナティみたいに邪悪な儀式をやってるんですよ。そこへ海兵隊員が　わけわからん。

### 36話 説明が必要なときだけあるんですよー（金切つ声で）

暗すぎて時間の感覚が富田先生並みになつてこる。わたしは機械的に足を動かし、ハシゴを降りていった。ほかのみんなもネタが尽きたのか静かになつた。なつたらなつたでちょっと氣になつてくるけど、あえてしゃべらせるのもアホらしいので黙ることにした。その代わりわたしは暇つぶしに、普段バカをやつてこる芸人がドラマに出てシリアスな演技をしたりするとちがつた一面を見た気がして妙にドキッとするのはなぜだらうといつよくな」とを考えていた。

つま先を伸ばして次のステップを探る。おお、地面だ。ほほー田ぶりの地面。慎重に両足で踏みしめる。平たい地面に立つのはなんだか妙な気分だつた。

みんな降り立つた ようだった。

「まつくりだな」

しまじろうが説明的なセリフを吐いた。まつたくそのとおりでみんな見えていないのはわかつていいのにだれに対してもこんなことを行つたのかわからぬけど、とりあえず全員近くこなしてみようだつた。体温と呼吸でなんとなくわかる。

「へせー」

田澤が言つた。しかしもみんなじゅつぶんこなわかつてこる。

「おまえが先頭だ」しまじろうがつぶやいた。

「おまえってだれ？」田澤が言った。

「おまえだよ」

「おまえおまえ言われても、見えてねーし」

「暗視ゴーグルを装着してることか」

「あつ」舌打ちする。「なんでおれなんだよ」

「ずっと先頭だつただろ」

しぶしぶのかすらも暗すぎてわからないんだけど、田澤は観念したように歩を出した。

カーン。

「痛つて・。なんだこれ」

「パイプみたいな音ね」わたしの耳もとで玲乃様が言つた。今日はみんな説明口調だ。「こきなり行き止まり?」

「あー、いや」「じゅりじゅりつと二つ叫ぶ。「右と」

じゅりじゅり。

「左

「横に道が延びて二つのようだ」としまじろうが説明した。

「どうせ明日になれば忘れるんだから」

「知るか」

「ねー、リーダー。 といつか名前なんだっけ」

「いい。どうせ明日になれば忘れるんだから」

リーダー玲乃様が答える。ふと気づいた。口調は冷ややかだったんだけど、目がふさがれているぶん耳が冴えているのか、ほんのちよつぴり寂しさみたいな感情が紛れているのに気づいた。そう、暗く冷たい森の奥、日の射さない森に咲く一輪の花のようだ。妙な言語感覚まで研ぎ澄まされているようだ。

「あなたが決めて。先頭なんだから」

「なんでだよ。ただ前を歩つてるってだけだろ?」

「そうじゃない。わたしたちの行動は人智の及ばぬ力によつて導かれている。あのお方の力によつて」

「あのお方?」と思わずわたし。

「なんでもない。 あなたはもう一度、自分の能力を思い出すべしよ。あなたはなにができる?」

「あー、なんだっけ?」たぶんしまじろう聞いた。

「なにをやつてもうまくこかない能力」

「そりそり。 つーか、そんなふうにひとりでまとめられると腹立たしいな。 で、なんだ。 おれはやりたいことがぜんぜんできなくて、それで」

ふと言葉を止める。 なにかに気づいたようだつた。 「そりか

「そりよ」 玲乃様が部下の成長を喜ぶリーダーのよひに言つた。 「そのとおりよ」

「右だ」

田澤は断言した。 ひとりでしゃべれやがれを出す。 わたしたちはあとにつづいた。

「どうして右なの？」 わたしはたずねた。

「左に行きたいと思つたからね。 うまくいかないなら、はじめからやりたくないことをやればいいんだ。 すげえ。 またまた開眼したよ。 悟りを開いたつていうか。 いきなり三レベルぐらい成長した気分。 明日から勉強するよ。 そつすれば彼女できるし。 Hロゴコンテンツなんてもういらなくなるし」

「Hロゴと彼女は別物だ」 しまじろうが厳しい口調で言つた。

「うな答ね。 すばらしく」

玲乃様は満足そつだ。 というか上機嫌。 わたしはとこうと、先ほどの発言に対する質問が魚の小骨のように喉にひつかつっていた。 「あのお方」 つて。 彼氏のことだろうか。 彼氏とは普段そういう秘密の遊びをしていて、それをうつかりぽろりんと口にしてしまつた

のだろうか。

怪しげ。

「お、また壁だ。えー、今度は左。確実だつて。おれが言つんだからまちがいない。そして彼女募集中 マチ子よーい」

「はい？」彼女募集中とわたしの名前を同じヤンテンスで言われ、思わずうわすつた声を上げた。「は？」

「アヤと仲いいよな。どんな子？ ビリーヴタイプの男が好み？」

「こつはアヤたんに氣があるのか。これは以外 だけど残念無念。これが叶わぬ恋なのは日本が今後百年間でワールドカップを優勝するのどどこのことだろつ。

「アヤたんは」「思いつきつフレズっ子なんですよ」とは言えない。わたしほどもつた。

「じゃあ、普段はなにしている？

「最近は」「わたしは少し考え、書つた。「捕まつてゐる」

36話 説明が必要なときだけあるんですよー。(金切つ声で)(後書き)

やばい、後藤の死体を忘れていた これも伏線にするしかないな。  
何者かに回収されたんですよー! って本文で書けって話ですね。

### 37話 選択肢はひとつのみ

わたしたちは田澤の指示に従い、尻を追いかけながら右へ行ったり左へ行つたりそのまま直進したりしていた。だんだん目が慣れてきたのか、周囲の様子がぼんやり見えるよになつた。通路は筒型で、パリの下水道みたいな感じ。ほんとうに迷路のようだつた。そしてもちろん田澤の尻もよーく見ることができた。

「 今度はまっすぐ」

「ほんとにあつてんのか」不審そうにじまじろうがたずねた。

「信じるよ。親友だろ? ゆえに、もしまちがつて窮地に陥つたとしても快く許してくれるという寸法で あ

「あ?」わたしが言つた。思えばここにどうあ? とかえ? とかしか言つていよいような気がする。「え?」

「後藤の死体がなかつた

「後藤?」なんとかまともな質問をしたかつたんだけど聞くべきことはひとつしかなかつた。「なかつたつて、どこに?」

「入り口の下だよ。着地点」

「 さうだっけ?」 へへ

全員がいっせいに首をひねる。死体があつたかどうかといつもつ、大半は後藤つてだれだっけという顔をしている。

「 余計な」とは考えなくていいの」玲乃様が締めた。「前進あるのみ。ほり、氣づかない?」

「なにが?」とわたし。「れじやまるでバカな女エキストラだ。」「氣づくてなにが?」

「同じ質問を一度繰り返さないで。 かすかに風を感じる感じよ。 うへ、出口が近いってことよ。」

「おれら脱出するんだっけ?」すっぽけた顔で田澤が囁いた。  
「じゃあ田的地が近いってことなんじゃない?」逆ギレする。「案内係なんでしょう? はやく歩いて」

そんなこんなで先を急いだ。そういうばだれかが囚われてるんだっけ? もう一週間以上会っていないような気がする。風? まったく感じない。出口ひいて、わたしたちが進んで飛び込んだんじやなかつたっけ?

なにやつてるんだら?、わたし。

「おひ」

田澤は十字路を左に曲がりかけ、バックステップして背中を壁に張りつかせた。いつもそりとのぞき」む。アホな暗視ゴーグルをつけているし、もつ完全にスパイ気取りだ。

「どうした。敵か」しまじろうが肩に手を置き、わざやいた。「感づかれたか

「わかんね。なんかガジェットない？」

「家に帰れば死ぬほどあるぞ」

ファンムービー版みたいなしょっぱいサム・フィッシュナーがそつとのぞきこむ。「なにかがいる 」

そのとき、声がした。「そこにはいるのはわかつてゐる」

よく響く野太い声だった。わたしはなんの意味もなく背後を振り返つた。玲乃様が不機嫌そうなへの字口で見返してくれる。「なに？」

その先の石壁に、ポスターのようなものが貼つてあつた。よく見よつと目をすがめる。視力のよさも明かりがなければ役に立たない。

玲乃様はもつと不機嫌な顔になつた。細い眉を寄せ、眉間にちつちやなしわをこしらえる。「だから、なに? お昼ご飯の青ノリが歯についてるとか 」

パツと明かりがついた。まぶしい。わたしは目を細めた。ヘッドライトの三倍は強力な光源が下水道のあつちこつちでビカビカしている。

「いいから出てきなさい」

例の声。よく聞くとなんとななく先生っぽい口調だった。

わたしは石壁のポスターに目を奪っていた。なんだこれは。かなり古くて色褪せているし、端も捲れていていまにもはがれ落ちそ

うだった。手のひらでひさしをつくりつづつ一歩、一歩と前に進む。言い寄られるのかとも思つてゐるのか、玲乃様が不審そうにあとじさつた。そして振り返る。

あれは時間割表だ。なんでこんなとこりこ？ なじみの枠に、科目が書かれている。だけどかなり古いというだけでなく、内容も意味不明だった。月曜の一時間目は「唱歌」で、一時間目は「書き方」。そのほかにも「手工」やら「読本」やら、「修身」つてなんだらひ。

「戦前の時間割ね」玲乃様が説明してくれた。「どうしてこんなとこりこ？」

「戦前？ よくわからないけどそうだとすると、戦前の高校生は歌つて読んで書いて修身していればよかつたのか。なんて楽なんだろう。

ただし当時も水曜日は七時間授業のようだった。どうでもいいけど。

「出てきなさい」みだび声が言つた。ちよつとイラつてつている。「正直に話せば警察沙汰にはしない。内々に処理するから

なんだそれ。わたしは振り返り、身を寄せ合つた。互いに顔を見合わせ、見合わせる顔がなくなるとだれとはなく角から出た。万引きをしたわけでもないのに、みんななぜか条件反射的に顔をうつむかせている。田澤は恥ずかしそうに笑みを浮かべている。

通路は行き止まりで、鉄製の扉があった。その両脇に、まるで侵入者から扉を守るようにふたりの先生が立っていた。どちらもおつ

さんっぽいキャメルのスーツを着て、まったく同じ顔をしていた。歳は四十くらいだろうか。ふたりは両手を中途半端に上げ、形容しよつのないポーズで固まりつつわたしたちが近寄るのを待っていた。

まつくつと近づく。双子なんだろ？ か。その不気味さをのぞけばただの先生に見える。

もつと近づくと、もうひとつかがいがあった。

「ほら、侵入者といつのはおまえらのことか」右側が言った。

「待ちわびたぞ」左側が言った。

門番は顔も背格好も完璧に同じなんだけど、ヘアスタイルが微妙にちがっていた。右側は向かって左方面に分け目をつけた七三で、左側は向かって右方面に分け目をつけた七三だった。あと強いて言えば、左の先生のほうが毛髪が薄いような気がした。

そんな見分け方より名札でもつけたほうがよっぽどわかりやすいんじゃなかろうか。ほんとうにどうでもいいけど。

「なんすか」先生といつことで、田澤が敬語でたずねた。「なにもしてないつすよ」

「ライガとフウガか」しまじりがじつにわかりやすい例えを口にした。「相変わらず古いな」

右側がギロリとしまじりをこちらにだんだ。

「あんなのとにかくするな」

「だが名作だ」左側がうなずく。「時を超えた名作だぞ」

「門番つてことは」「わたしが言った。どうしてもまともな発言をしたいばかりに思わず口をついて出たのだ。「あの、わたしたちをとおしたくないつていうか、その先になにか見られたくないものが」

「こりこりすつとばしたな」右七三の左側にこらまれる。「不本意だが答えてやるわ。まあ、そのとおりだ」

それはそうと、先生の門番はずつと同じポーズを取りつづける。少し前から腕がふるふる震えているんだけど、示しがつかないからなのか下るすつもつはなによつだつた。

「ルルをとおりたくば」

「質問に答えよ」

だれも答えない。生徒が手を挙げないのは慣れてくるのみで、左七三の右側の先生は顔色ひとつ変えずに言った。

「ひとりの先生は真実のみを答える。ひとりの先生は虚偽のみを答える。問には一度だけだ。答えるのはひとりの先生、答えはイエスかノーのみ。まあ、問い合わせなさい。いざれが正しき先生なのかを」

「　ん?」

わたしは口をとがらせた。どつかで聞いたよつな。

### 37話 選択肢はひとつたりのみ（後書き）

無理やり伏線回収、みたいな。主人公が活躍しなき過ぎなのはわたしの悪い癖です。

「 」のオッサンなに言つてんの？」

田澤が振り返り、かなりふつつの声で言つた。そのオッサンふたりは顔色ひとつ変えず、相変わらずのくんテコポーズで固まつている。

玲乃様が細い眉をぐにゅりと曲げ、わたしを見た。「へんな顔」

「は？」思わずまた言つた。もつ今後、は？とか、え？とかは言わない。ここに誓う。「なにそれ。いきなりなにを？」

「どこからともなく手鏡を出し、わたしに向ける。それを見て、わたしは誤らなきやと思つた。たしかにへんな顔だ。眉間にしわを寄せ、タコみたいに口をとがらせている。

「そうだ。なんでこんな顔をしていたかといつと、門番の先生の問い合わせをどこかで聞いたような気がしたからだ。これでまともに役に立つことができる。

いつの間にかみんながわたしのへんな顔に注目している。どこで聞いたんだつけ？ とりあえずふつうの顔に戻してから、あらためて考えてみた。あ、そうだ。あの学歴社会の弊害みたいなわたしのロッカーだ。これで答えられる。

ふと気づいた。門番先生ふたりにたずねる。

「質問、なんでしたつけ？」

「問はず一度のみと言つたはずだ」右側の七三が言つた。

「一度は繰り返さない」左側の二七が言つた。

「じゃあ答えられないんですけど」

「そこまで言つならしようがない」ふたり同時に言つた。「これが最後のチャンスだ。制限時間は三十秒」

門番としてはだれも問いかけてくれないと存在価値を見いだせないのだろう。ふたりはまつたく同じトーンとピッチで質問を繰り返した。

「　　とこう質問でした。まあ、いずれが正しい?」

「えーと　　期待のまなざしを一身に受ける。わたしはテストでも使つたことのないような脳の部分をフル回転させた。「たしか答えは　　」

「十秒経過」左がかすかにニヤリとした。

「答えは　　」

指が算数の足し算でもするよつに動いた。言つまでもなくなんの意味もない行動だ。

と、指が勝手に右側を指をした。

「質問は」いつ。『あなたが正しい先生かとわたしがたずねたとき、あなたはイエスと答えるか?』」

「なにそれ。意味わかんないんだけど」

田澤を相手にする人はいなかつた。右側の門番が首をビクッと震わせ、それから苦しそうにうめきはじめたからだ。

次のブレスまで「お」を繰り返し、青い顔で思いつきり空気を吸い込んだ。

「いいから答えてください」わたしは一歩せみつた。「答えはイエス? ノー?」

すうじい自信に満ちた声。すると右のオッサンは「あ」をフヨードアウトさせ、最後に蚊の鳴くよいな声で「イヒス」と言つた。

「見事だ」正しくない左側が神妙な顔でうなずいた。「きっと大学に入れるぞ」

「正解だ。扉をとおるがいい。やあ、」これを

右側がわたしに手のひらを差し出した。鍵が乗っかっている。

わたしは鍵を受け取った。ひんやりした感触がちょっとつれしい。くるつと振り返つてみんなに見せびらかす。

残念ながらだれも反応しなかつた。

「わたしはモノホンの先生だ。 住吉といいます。 一年二組の担任で、国語を担当しています」

「じゃあ、左の人は？」

「自分は先生ではありません！」自ら化けの皮を剥がした。声や口調までちがっている。直立不動でびしつと敬礼し、先をつづけた。

「自分は歩兵第61連隊の長谷川と言います！ 昭和十九年、フィリピンはルバング島へ着任いたしましたが、翌年の米軍上陸と艦砲射撃により我が部隊はなすすべもなく撃退され 敵の兵力はすさまじく…」

「脣を噛み、うつむいた。そしていきなりがばつと顔を上げた。目には涙がこぼれている。

「恥ずかしながら、生きて帰つてまいりました！」

偽物は旧日本兵の生き残りだった。というか計算が合わないんだけど。

「みんな数学は苦手だろ？ だからバレないとthoughtたんだ」 住吉先生が言つた。

「なるほど」

「もう用は済んだ?」玲乃様が冷ややかにたずねてきた。「はやく扉を開けて、奥に行きましょう」

「異なんじゃね?」田澤が言った。旧日本兵に顔を向ける。「先になにがあるの?」

「自分は知りません! 自分は階級が低く 」

「行こうぜ」

しまじろうに促され、わたしは鍵をそろそろと鍵穴に差し込んだ。ちっちゃな鍵をまわすと、じつに大げさな音を立てて開閉装置が作動した。

ガチヤン、ガチヤン、ガチヨン 。

「ガチヨーン!」階級の低い旧日本兵が真顔で言った。「いまいちばんナウいジョーク! 自分は大笑いであります!」

ギギギ、とちょつがいをきしませ、鉄の扉がゆっくりと開く。しまじろうは田澤の背中を叩いた。先頭に立てとことだ。田澤は「なんでおれが」と言いかけたが、ぎゅっと口を真一文字に引き結び、先頭に立つた。腰を落とし、様にならない潜入のポーズを取る。

ドーン。背後で扉が閉まる。そして ガチヨン、ガチヨン、ガチヨーン。退路は断たれた。なんとしても先に進むしかないようだ。

篝火があちこちに焚かれ、オレンジ色の明かりをゆらゆらさせている。わたしは照らし出された茶色の岩肌を見た。洞窟のようだ。

それもかなり広い。そしてほんまもんの不気味さを醸し出していた。

「帰りてえ」

田澤が言つた。玲乃様が追い立てるようにケツを叩いた。腰をかがめつつ、少しうれしそうな田澤はそろそろと前進した。わたしたちは立ち止まって見守る。前進、前進、ガチョーン。

ガチョーンだった。

「 うつわ！」

ものすごいでかい声。あたりに田澤の声が反響し、わたしは思わず耳を塞ぎかけた。

「助けて助けて助けて 」 早口言葉のよつて連呼する。「落ちる落ちる落ちる 」

しまじろうが駆け出し、しゃがんだ。それから腹ばいになり、うめきながら言つた。「つかまれ 」

わたしも近づく。しまじろうの傍らに立ち、そして仰天した。洞窟の真ん中がぽっかりと大穴を開けていた。田澤は完全に落ちかけていて、片手をしまじろうの手首、片手をぼろぼろ崩れる岩肌をがつちりとつかんでいた。

「引き上げて！ 引き上げて 」

わたしはびくともできず、とりあえずチアリーダーになつた。しまじろうはむんと一声氣合いを入れ、田澤を引き上げた。わ

たしの応援の甲斐あって、無事平らな地面に四つん這いになる。からだじゅうがぶるぶる震えている。

「ほんとにやつてもダメなんだな

「穴はおれのせいじゃねー」

わたしはチアリーダーのポンポンを捨て、穴の下をのぞきこんだ。マンションで言つと三階くらい下の位置に、かなり人工的にこしらえられた四角い空間があった。といつてもかなり広い。そして。

わたしはしゃがんだ。そして生まれてはじめて地面に腹ばいになつた。

「どうした

「シーツ」しまじりに向かつて指を立てる。「だれかいる 大勢」

三人で腹ばいになり、そ一つとのぞきこむ。大勢の人間が、なにをするでもなく空間をうろうろ歩きまわつてゐる。わたしは目を凝らした。全員ローブを着てフードをかぶつて いるわけではなく、みんなスーツにネクタイという場違いな格好をしていた。青いジャージを着ている人間もいた。脇になにか黒い長方形の板を抱えている。

あれ、出席簿だ。

「なんなんだよ、あれは 田澤がおびえた声を上げた。「まるで密教の 先生?」

「先生」わたしはうなずいた。白衣を着た先生が、ものすごい勢いで縦に横に歩きまわっている。とくになにをしたいというわけではなさそうだ。あ、あれは投稿初日に掲示板の前で遭遇した先生だ。

「先生？ 二十一世紀が丘の？」と田澤。

「見覚えのない顔ばかりだぞ」しまじろうがつづける。

「入学したてだからよ、きっと」

「つすきみわりーよ。生け贋でも捧げんのか？ あの祭壇で」

田澤が指さす。たしかに、空間の向かって左側には、よく磨かれて黒光りする長方形の台があつた。ちょうど人が横になれるくらいの大きさだった。

ちょうどだれかが横になつていた。「アヤたん？」

「なに？」「マジで？」男ふたりも目を凝らす。驚いた。ほんとうに捕らえられていたんだ。といつても手錠で拘束されているわけではなく、端から見るとただ単に昼寝をしているだけのように見える。

隣には勉強机が一式あつた。

「これって

「助けるべき？」わたしは田澤のセリフを引き継いだ。でも、どうやって？「玲乃様はどう

振り返る。玲乃様はいなかつた。

38話 お国のために死んでくれる塾のアルバイト講師（後書き）

ありがとうの感謝を込めて大容量のスーパーカップ！ ちなみに旧日本軍のくだりはかなり適当です。あとで修正すればいいんですが、それ以前にアンタッチャブルなネタなんじゃないかという気がしています。この先生の密会、教育委員会かPTAに結びつけたいなあ。じつはマチ子さんの母が みたいな。

わたしは田澤をつっこめて言つた。

「どこに行つたの？」

残念ながら田澤は死から生還したばかりで副交感神経が優位に働きすぎていた。簡単に言つと腑抜けになつていた。

腕を伸ばしてしまじかみをつりや、同じことを聞いた。

「だれの話だ」

「われらがリーダーよ」

「菅直人か？」真顔で返す。「どこにも行つてないぞ。しつかりと日本を治めてる」

わたしはかぶりを振つた。菅直人首相がしつかり日本を治めているといふ意味ではない。やつぱり自分ひとりで疑うことにしてた。

まずわたしの頭に浮かんだのは、「マチ子さんの言つとおり」  
「一いつ」。気味が悪いけどほんとのことなんだから仕方がない。つまり、あの子ははじめつからわたしたちを裏切るつもりだったのだ。  
理由は知らないし知りたくないけど、わたしはずつと前から気づいていた。これだけは言わせてほしい。

相変わらず腹ばいになつて下の空間と先生たちを見る。と、場の空気が変化した。先生たちは慌ただしい感じでしゃやき合ひ、立ち

止まつては周囲をあらわらしている。まう見る。密告者がわたしたちを密告したんだ。このままではわたしたちもアヤ坦んもろとも邪神の生け贅にわれてしまつ。

「なにがあつたのか」よだれを垂らして燃えぬけたこの田舎越しひしまじりつが聞いてきた。「もしかして

「もしかしてね」

「もしかしてなのか」ぎろりと田玉を動かして先生たちを見、つづけて顔も動かした。「なんとかうまく切り抜ける方法を考えないと

L

卷之五十一

わたしが考えさせるのを止めようとすると、背後から大声で呼びかけられた。わたしはどうやったのかわからないけど腹ばいのまま飛び上がった。しまじろうも飛び上がった。田澤は死んだ魚の目をしていた。

「ねまえり、こんなところでなにやつてんだ？」 いまは授業中だぞ？

もつともなコメントだ。おそれおそれ振り返る。そこにはいたのは  
邪教の信徒ではなく、ちょっと時代錯誤な長髪をなびかせたおじさん  
の先生だった。

「教室に戻りなさい、教室に！」

「あの

わたしは口を開きかけた。これは先生なんだろつか。それとも先生に見えるけどやつぱり邪教の信徒なんだろつか。ただの先生だつたら怒られるゝ

と、しまじろうがわざやいた。「「」はおれに任せひ。いい考えがある」「

「ダメ」

「なにがダメだ。なにがいい考え方だー？」少し博多弁なまりがある。長髪をかき上げてつづける。「どうこい」とか先生に言つて

「ん」「しまじろうが素早く言つた。

「なんだつてー？」

「ん」

わたしはしまじろうのほつて田を動かした。こつものしまじろうではなかつた。表情には微塵も知性が感じられない。にへらへつと笑みを浮かべて先生を見上げている。鼻水まで垂らしている。この顔どこかで見た記憶がある。どこかで。

「ん」つてなんだ、んつてー？」先生が問い合わせる。「それじゃわからんぞー」

「んー」してきた! 天真爛漫に叫んだ。「だつてさー、漏れそうでさー、それでさー」

「なんなんだその言い方は? それでも高校生か?」

ちがう。

「授業中にんーこで抜け出すのか? ん? 高校生なのにか? やんなバカな話は聞いたことが」

「んー」、「んー」、「んー」ひとりでんーに「ホールをはじめた。手も叩きはじめた。「もつらつせ! もつらつせ! ターあつあーまでー、からだの一なかーにーいたーのーにー」

そして森山直太朗の『つた』を歌い出す。まさに狂氣の沙汰だ。

「おおお おまえはーつ!」先生は切れた。当然だ。「うしあひてんしゃい! あの祭壇に横たわって生け贋に」

わたしはたまらず上体をねじり、手を挙げた。いまのしまじりつは能力が発現している状態だ。おそらくしまじりつは、この状況で先生に対し理屈でねじ伏せるのは不可能だと決断したのだろう。そして理屈のつうじない小学生になつたのだ。

よけい話がややこしくなつただけなんだけど。

「はい、マチ子さん」先生が指した。

「しまじ 島くんは」やばい、なにを言おうとしてたんだつけ? 「島くんは えーと、基本的人権について述べているんだと

思こまか

「なんだそれは？ アメリカの話か？ IJUJは日本だぞ！ 大日本帝国です！ 米英の価値観は通用しないぞ！」

「高校生でもします、つて」とです。授業中であるうと、なかなかと」

「なにをー？」

「ですから を」

「なにー？」 長髪をかき上げ、耳を澄ますポーズを取つた。「聞こえんぞー？」

「生理現象を、です」

「ほかの言い方で」

「顔がゆがみすきてひつくり返り切になつた。」「知りません

「おー、そんな基本的な言葉も知らんのか？ 一から国語をやり直したほうがいいんじゃないかー？ 言わないと捕まえるぞ。祭壇が待つてるぞー。生け贋にするぞー。そしてあんなことやこんな大人のお遊戯会を」

「わたしは叫んだ。どんだけ大声で叫んだのか、先生は仰天した顔で革靴の底をじりりと言わせ、あどじをつた。「お、女の子がそんなはしたない言葉を」

あんたが言わせたんだろうが。

周囲の空気がまた変化した。それも寒いギャグですべつたときの教室みたいな生やさしい変化ではなかった。下の空間がざわつき、先生たちが野蛮な声を上げている。わたしは振り返った。わたしの呪文の詠唱に全員が気づき、こちらを指さしている。言葉が原始的すぎてわからなかつたけど、「侵入者だ、捕まえろ」という意味なのはまちがいないようだつた。

しまじろうは小学生に退化し、田澤はいまだに交感神経を休ませていてショックから立ち直つていない。アヤたんは祭壇で寝こけているし、玲乃様は美しき女スパイだつた。そしてただひとりまともなわたしは、わらわらと集まつてきた邪教の先生方に囲まれ、物珍しげにじろじろ見られ、胴上げのように抱え上げられた。

「わが校の秘密を知つた生徒 生きては返さない」

かなり下のほうから声が聞こえた。首をねじつて声の主を見ようともがいたけど、下過ぎて見えなかつた。先生方に抱え上げられているからではなく、声の主の身長が低すぎたからだつた。

校長先生は信徒に命令した。「祭壇に運べ！ 偉大なるお方、千葉市教育委員会様がお待ちだ！」

### 39話 押してもダメなら小学生（後書き）

はい、また下ネタです。でも婉曲表現にしたから言わないと気がつかないかも……！ それにしてもこれってなんの話なんでしょうね。教育の問題点を浮き彫りにしようとしているのか？

わたしはえつさほしさと担ぎ上げられ、下の空間に運ばれる。「教育委員会様はお喜びだ！」と校長先生が恍惚とした声で言つたのでふたたび振り返つてみたが、やっぱり姿は見えなかつた。

おどこふたりも運ばれていた。こつちはわたしみたいな生やさしい運ばれかたではなく、片足をつかまれて地面をずるずる引きずられている。とくに田澤はうつ伏せのまま顔面を岩肌にじりじり削り取られながら運ばれている。祭壇に着くころには温水洋一よりフランツな顔になつていいことだらう。

祭りにかける男たちが、岩を削つてつくられたとおぼしき階段をえつほえつほど降りていく。祭壇に近づき、わたしは恐怖を湛えつつ千葉県教育委員会様の巨大な像を見上げた。篝火の炎に照らし出され、じつに不気味に浮かび上がつていた。千葉県の教育方針を決定するお方には山羊の角が生えているらしい。まあ、納得できないこともないけど。

そうーれ！ のかけ声とともに、わたしは祭壇前の生け贅台に放り投げられた。じろんと横に一回転する。目を開けると、真っ正面にアヤたんの顔があつた。横向きでほっぺたに両手を乗せ、くうくうと平和そうな寝息を立てている。はあ、と寝息をつき、わたしの鼻先をくすぐつた。ほんとに本気で寝ているようだ。よくまあこんな状況で　と思つてから頭を一百七十度まわして台を見てみた。台はベッドでいうとクイーンサイズくらいの大きさで、しかもあり得ない快適性と弾力性を誇つていた。ふたり並んでもゆつたり。

といふか、ただの高級ベッドだつた。そして大理石だとばかり思

つていた表面は、ただのマーブル模様のベッドシーツだった。

あまりの快適さに、わたしも寝てしまいそうだった。死への眠りに必死で抵抗しつつ、周囲の状況をうかがう。

もうダメ。あと五分だけ。

「いらっしゃる！」

いきなり大勢に怒鳴られる。「起きろ！ 授業中だぞ！ 起きろ！ 起きろ！」

体をビクッとさせて飛び起きた。見まわす。祭壇の下では、松明を持った先生方が声を合わせ、拳を振り上げながら毛筋の乱れもなく合唱を繰り返している。「いらっしゃるな！ 授業中だぞ！」

わたしは悟った。召還の儀式がはじまったのだ。

「おつきつら！ おつきつら！」校長先生がいちばんノつていた。教育委員会様の像のかたわらで、制御の効かない小学生みたいにぴょんぴょん飛び跳ねている。「おつきつら！ おつき！」

すでに先生方は主への呼びかけをやめていた。とても背の低い校長先生は気まずそうに黙り、ゆっくりと拳を下ろした。乱れたヘアをさりげなく整える。

「とこつわけだ

静かになるとふたたび眠気がぶり返した。目玉が裏返りかける。わたしは急いでアヤたんをつづついた。

「起きて。アヤтан」

「むにゅむにゅ」「妙に滑舌よく言った。」あと三時間一十分だけ。そしたら学校に行くから

アヤたんはいま何時あたりにいるんだひづ。

「ダメ。起きて。」のまほじや

「爆発しろ!」大声で寝言を言った。「転校生爆発しろ! むにゅ  
むにゅ」

「いなによ。裏切ったの」寝言に答える。「玲乃様はわたしたちを裏切つて いやちがう。もともとスパイだったのよ。美しき女スパイ。ありがちでしょ? つまりそういうわけよ。だから

「『いまなにが必要?』だって。は! ねーねー覚えてる?  
一ヶ月くらい前の話。あいつがマチ子さんにいきなり問い合わせたでしょ? 『あなたはいま必要なものが見えないのよ』とかなんとか。バツカみたい。むにゅ」

「」の子ほんとに寝てるんだろうか。

「で?」とわたし。

「むーーーーーん!」いきみはじめた。「ダメだ! やっぱり死ね! 転校生ネタは追い詰められた作家の苦し紛れだ! ネタよりまずおのれの才能を拾つてこんかい! むにゅりん」

支離滅裂になつてきた。わたしは起「すべきかどつか迷いはじめ  
ていた。「アヤたん」

地面がぐらぐら揺れ出した。尋常じやない縦揺れだ。先生方は「  
おお」と恐怖に打たれたような声を上げる。そつか、この状況にこ  
の揺れ。タイミング的にはバッヂリだ。ついに。

「日本の高校教師よ、われにひざまずけ」

全員ひざまずいた。自分は大物だと思つてゐるのか、校長は立つ  
たままだつた。恍惚とした表情を浮かべ、像を見上げてゐる。

「 時は來たれり。わたしの子供たちよ、いまこそ日本の教育の  
あり方を根本から變えるのだ。さすればわれは蘇らん」

「やつです!」校長先生が言つた。「そして対米隸属の日本を終わ  
らせるのだ! 日本は眞の独立国として」

「だまらつしゃい」教育委員会様はびしゃりと言つた。「まだ講釈  
は終わつていない」

「やつですか。ではどひつぞ」

わたしも含めて全員が耳を澄ます。いまのところ講釈のつづきは  
聞こえてこなかつた。。

「主よ、どひつされました?」校長先生が心配をつたずねる。

ややあつて、主は咳払いした。「なにを言つたいのか忘れた

「そんな 」

「おまえが邪魔すつからだろ?」いきなりフランクな口調になった。  
「まあ、つまりだ。戦後の日本教育つてのは、あれだよ、ようはマッカーサーの野郎がさ、日本を隸属させるためのプログラムをこしらえさせたんだろ? アメリカ様に反抗しない日本人をつくる教育よ。考える力を養わせないようにしてる。平等教育つて、つまりそういうことじやん? なんでも横並びにしてさ、個性を殺すんだ。でもそれって教師が無能なんじやなくて、日本が戦後からいままでずっとそういう教育方針で来てるからなんだよ。教師はそれに従つてるだけさ。だから、ほんとにかわいそなのは先生つてわけよ。だろ?」

「そうだ!」先生方が次々に声を上げる。「おれだつてまともな教育をしたい!」

「生徒の個性を伸ばしたい!」

「やる気と自尊心を養わせたい!」

「真の教育を! われわれの準備はできているのだ!」

頭が混乱している。つまり儀式を滞りなく終えてわたしたちが生け贅になれば、日本は対米隸属から逃れ、眞の独立国として教育を一新できるということだろうか。よくわからないけど、植草一秀が聞けば泣いて喜ぶだろ?と思つた。

わたしの答えはこうだ。死にたくない。だつてそうだろ?、なんで輝かしい日本の未来のためにわたしが犠牲にならなければならぬのか。

「死ね！」またアヤたんが怒鳴った。「転校生は死ね！　いまあたしたちに必要なものは？　マチ子せーん　あつ、そこはダメ、あうん、そんないきなり　」

かなりとつ散らかつた夢を見ているらしい。そしてわたしはふと思つた。いま必要なものは？　だれかの助けだ。だれでもいい。ヘンなヘルメットにコスチュームを着た五人組でも、精神が弱いパイロットの乗つた人型兵器でもいい。ほんとうに助けてくれるのなら磯野カツオでもよかつた。

だれでもいい。毎週テレビに出てるヒマがあつたら、わたしたちを助けに来て。

## 40話 真のヒーロー ギャラも天井知らず（後書き）

これ、いつ学園ものに戻るんでしょうかね。まあたぶん来週くらいには。ちなみに対米隸属教育うんぬんは本当の話です。考えさせない、エリートをつくらせない教育方針なんです、日本の学校は、むかしからずっと。平等万歳！

#### 4-1話 旧支配者 単なるダメ上司

「つーわけよ。ぶつちやけて言つと。日本の教育の問題点、みたい  
な?」

教育委員会様が結んだ。「そろそろまじめになつていい?」

「それはもう、できれば」校長先生が手もみしつつ言つた。「そ  
のほうが雰囲気も出ますから」

「雰囲気ね。大事だよな、たしかに。よーし、地面とか揺らしあや  
おつかなー」

「とか、といつ言葉遣いはあまり」

地面が思に出したよつじぐりぐりと揺れはじめた。

「つこでに天井からぱいぱい岩の破片を降らす的な」

「どうからだつて言葉は」

天井からぱいぱいと岩の破片が降りはじめた。

「あ、あと、自分の像もヒビなんか入れちゃつたりして」

山羊の角を生やした像にヒビが入りはじめた。壇つておべナビこ  
のところわたしなにもしていい。

「そ、それは」校長先生がうろたえる。「侵入者があらわれて

人質を救出し、儀式がすんでのとじりで阻止されたあとでなぜか起きるイベントでして」

危険なほど揺れながら像が言った。「マジで?」

「ええ、マジで」

「なんだよ」教育の神様はせせら笑うように鼻を鳴らし、若干キレ気味に言った。「それをはしゃべるつーの」

それを合図に、なにもしていないのに洞窟内が本格的に崩壊はじめた。像はびきびきっと縦に大きく亀裂が走り、左腕がぼどりと落ちた。祭壇ふしひベッドはマッサージでもするように優しく振動している。

結局、助けを呼ぶ必要なんかなかったようだった。そう、悪は常に自滅するものなのだ。

わたしはアヤたんを揺すった。「起きて。逃げなきゃ」

「俺のエクレア!」意味不明の寝言を叫び、飛び起きた。あくまでよろしく、きよとんとわたしを見る。「うううううう」

「ビリでもいいよ。逃げないと

「よくないよ。あたしの体があたしの意に反したことあるんだから」「両手を挙げ、ふあーっとあぐびを漏らす。「グーグルマップで調べてもいい?」

「こ、こ、よ。あとでね

そんなこんなでわたしたちは快適なベッドをチョックアウトし、手をつないで崩落寸前の洞窟から逃げ出す。階段を駆け上がり、立ち止まり、右、左と出口を探す。

「逃げられると思ったら」かなり下の方から声がした。校長先生だ。「いや、いまは逃げられるだろ？ しかしわたしは諦めないぞ。夢を諦めない！ きっと必ずや日本の教育を変え、おまえたちを真の変人として世に」

教育委員会様が首をかしげた。いや、ちがう。ぼろりともげた。山羊の角を下に向け、いちばんのお得意様めがけて落下する。校長先生は見上げた。そのときにはすでに手遅れで。

そうでもなかつた。定年間近とは思えないほど軽いフットワークで頭のかたまりを避けた。まつぶたつに割れたご主人様の頭を見下ろし、腹立たしげに毒づく。「このバカ委員会が。崇拜して損した」

そしてふたたびわたしたちを見上げる。

「逃げられると思うな。明日も授業が待つているぞ。その次も、その次も そしておまえらは結局、われわれに変人として教育されるのだ。いあ！ おまえらに個性を植えつけてやる！ 考える力を与えてやる！ 世の中は厳しいぞ とくに自分の頭で考える人間にとつてはな。余計なことを考えるんじゃなかつた そう思わせてやる！ おまえらはこれから一生、人生の意味を考えて生きつづけるのだ！ いあ！ いあ！ ふんぐるい、むぐるうなふ、くとうぐあ」

途中からべつの邪神に祈りを捧げはじめた校長先生は、そのうち瓦礫と粉塵に飲み込まれて姿が見えなくなつた。

アヤたんがわたしの脇腹にがつしつとじがみついてゐる。「このまま死ぬ」

「死なないよ」

「いや死ぬ」

わたしは出口を探した。

「いじつちー。」

聞き覚えのある声がした。「出口せいじつちー。いますぐここれから出れば、午後の授業に間に合つからー。」

声はすれども姿は見えず。待つて。これつてわたしが昨日から願つていたヒーローじゃない? いまいちばん大事なものは、ここから助け出してくれる救世主で

「ちがつよ。ただのバカお嬢」アヤたんがわたしの頭を読みつつぼやいた。舌打ちしてつづける。「せっかくふたりきりで死ねると思つたのにー。」

「はやくー。」危機的状況なだけに、玲乃様の声も切羽詰まつていた。「このままではお昼休みが終わつてしまつー。」

「どうか、これはお昼休みの余興だつたのか。なんて長いお昼休みなんだ」と、わたしはふと氣づいた。

「 待つて。田澤としまじかわは？」

「 それはあとで考えて！ もう手遅れつてことにしてもらっこからー。」

「 あなた、どこにいるの？」

「 どこでもいい！ わたしと同様に、あなたには出口にひっそり岩肌に見えていのー！ といふことはつまり、どこでもこいつてことなの！ 岩肌に顔面から激突してー。」

「 アメリカのコメディみたいに？」

「 アメリカのコメディみたいにね！」 玲乃様が急いで繰り返した。  
「 もしくはパンをくわえて曲がり角を見つけるの！ そうすれば必ず意中の男性を激突できるから！ 最初は腐れ縁なんだけどイベントを重ねるー」とお互い意識し合ひ、そして引かれ合つてついには

「

「 なんの話？」

「 なんでもいいのー。」

「 あ あなたはスペイジや 」

「 わたしはただの転校生よ。あなたたちの大嫌いなね。明日になればわたしたちはまた初対面 だからわたしなんか、見えても見えなくても同じこと」

わたしは目の前の岩肌を見た。ここが出口だ たぶん。わたし

は汗ばみまくつた手をぎゅっと握り、アメリカのコメディエンヌになるべくアヤたんをひきずつて駆け出した。そういえば午後イチの授業は英語だつた。そしてわたしは岩肌にずがーんと顔面から激突し。

41話 旧支配者 単なるダメ上司（後書き）

眠すぎ御免！ いちおうクトゥルーネタで閉めてみたつもり。こんなだつたかな、たしか。

ずがーんと顔面から激突しなかつた。「きゃあ」とか言ってひっくり返ったあとなにごともなかつたようにすくと立ち上がりつてフレームインし、ファン開拓用のすとぼけた表情でかぶりを振つて次の場面に進むこともなかつた。ハリウッドのコメディには縁がないらしい。わたしは次の一步で正面衝突するだらうというところで目を閉じ、ブレーキをかけようとしたけど時すでに遅く、気づいたときには次の一步と勢いづいた一歩目とお義理の三歩目まで先に進んでしまつていた。本来ならとっくに岩にめり込んで仲間の救出を待たなければならない状況なはずなのに、なんともなかつた。痛くもない。わたしは目を開けた。周囲の様子は形容しがたかつた。まさに岩の中だつた。わたしの足は調子に乗つて四歩目と自分の限界にチャレンジしたくなつたのか大胆にも五歩目も繰り出し、すると次第に周囲が白っぽく変化してきた。まぶしい。わたしは目を閉じた。そして前人未踏の六歩目と横綱昇進をかけた七歩目を勇往邁進した。そして。

「つおつ？」

アヤたんがすつとんきょうな声を上げた。なにを意味しているのかはわたしにもすぐにわかつた。成功の人生を噛みしめるように八歩目を踏み出すと、急に足場が消え、わたしはまるで財団法人日本相撲協会のように真っ逆さまに転落した。

落ちて、落ちて、落ちて、理事長が更迭されて、もつかい落ちた。いいかげん落ちつづけるのも飽きたので目を開けると、幽体離脱した靈魂みたいに上方から教室を見下ろしていた。

やつた、ほんとうに脱出できたのだ。でもなんで教室の天井付近に出現するんだろう。そんなことを考えながら一秒ほど静止していただけ、次の瞬間わたしはワイリー・ココーテのよつにぴゅーんと落下した。胃が喉もとにせり上がり、手を振りまわす。

すとんと席に着く。アニメのようにスマートとはいかず、イスの座面に尾骨をもろにぶつけた。

びりびりするお尻をさすりつつ、教室を見まわす。見慣れた一年組だった。授業がはじまる前の、お馴染みのぐだぐだした雰囲気。キンコンカンと授業開始のチャイムが鳴つた。みんなはのろのろと席に着く。アヤたんは？ いた。同じくおケツをさすりながら、机の中をのぞきこんでいる。しまじろうも、田澤もいる。ふたりと目が合つた。危機を乗り切つた仲間として思わずぶりにつなずいたり親指を立てたりなどといったことはなく、なんとなく気乗りのしない感じで田をそらし、イスの背もたれに寄りかかつてだるそうに足を投げ出した。エキストラの後藤もいる。こちらはエキストラじしょ、とくに田立つた動きは見せなかつた。

平和だ。ものすごく平和。わたしは思つた。きっと悪い夢でも見ていたのだろう。邪教とか変人とかなんとかかんとか よく考えればなんてバカバカしい。そんな高校、あるわけないじゃないか。たぶんもう少ししたら英語の先生が入つてくる。起立、礼、着席。そして今日は関係代名詞について勉強するのだ。「町田、十八ページを読んで」と先生に指され、立ち上がってたどたどしい英語の発音で読んでみんなにくすくす笑われて恥をかいたりするのだ。

なんだか生まれ変わった気分だ。わたしは真新しい教科書とノートと筆記用具を並べ、わくわくしながら授業開始を待つた。あとはわたしの予想が外れないことを祈るだけだ。

ガラガラ。先生が入ってきた。愛する生徒に目を向けるわけでもなく、疲れた表情で事務的に教卓へ向かう。先生がポジションに着いて正面を向くと、学級委員らしき子が「きりーつ」と号令をかけた。

「れーい、ちゃくせーき」

先生はとくに反応せず、代わりに大きなため息をついた。いいぞ。やっぱり先生はこうでなくちゃ。

「今日は十八ページ、関係代名詞をやるぞ」

ちなみに先生は三十過ぎの独身で、グリコ・森永事件で世間を震撼させたキツネ目の中年によく似ていた。名字は松井。名前は知らない。ほら、やっぱりわたしの予想どおりだ。なにがって、他人の説明をしているのにアヤたんの横やり解説が割り込んでこない。わたしは悪い夢を見ていたのだ。

先生はワイヤーシャツの上から首に緑色のバスタオルを巻いていた。たぶん汗つかきなだけだろう。たぶん。

「じゃあそこのはじか。例文を読んで。ケンがナンシーについてひとつ」とを言つてゐるところ

「はい?」わたしは耳を疑つた。思わず聞き返す。「はじか?」

先生はわたしを向いている。「きみのことだよビヤッち。名前なんだっけ?」

「町田ですけど」

「町田、なに?」

「マチ子ですけど」

「ホーリーシットー」こきなり吐き捨てるよつて言つた。『ワラ、ファーック! なんてこつたい!』

お約束というかなんというか、わたしの予想もいきなり雲行きが怪しくなってきたようだ。おそるおそるたずねる。『 どうかしました?』

「ちなみに担任の富田先生だが、唐突に話題を変える。『 体調不良で早退した。きみたち学生とちがつて、大人はいつでも好きなときに欠勤したり遅刻したり早退したりできるんだ。』『 体調不良でお休みします』 これだよ。あと『 電車遅延で三十分ほど遅れます』とか。これだけでまつたくおどがめなしだ。どうだ、いいだろ? 大人は羨ましいだろ?』

「あの」

「体調不良というのはじつは対外的な口実で、富田先生は昼休みになるといきなりにも言わずに帰宅したんだ。体内時計が狂つてしまつたらしい。心配になりわたしが電話をかけると『 三年くらいしたら出勤します。つまり明日あの、十年前の夏』 といった返答だつた。完全に狂っている様子だつた。わたしは言わんとしていることを察してたずねた。『 十年前の夏に、なにかがあつたんですね?』 すると富田先生はこう答えた。『 そつ、そつなんです。ぼくが独身なのはトラウマのせいなんだ。あの日、ある女子に手ひど

「いフラれたをしたんです』『それで、その子の名前は?』町田マチ子『町田マチ子ですか?』『そうなんです。あれは大東亜戦争終結から一十分くらい経つたあとのことでした。ノルマンディー上陸の一時間前です。覚えてませんか? バルジの戦いのちよ「ひ」八分二十四秒前ですよ』もうわけがわからなかつた。先生はつづけた。『町田マチ子。許せない。ぼくをツイッター上でフリやがつて。ぼくの時間を返せ。ああ、おなかが空いたつき食べたばかりなのに』『わたしは電話を切つた。頭が狂つてしまいそうだつたからだ』

わたしはもつと頭が狂つてしまいそうだつた。そもそも富田先生を追い詰めたのはオタクの大栗じやないか。だいぶ前の話なので詳細は覚えてないけど。

「で、どうする?」松井先生が言つた。『きみはどうがいいと懸つ?』

「どうすべきですか」

キツネ田の男は田をさりに細め、わたしを見た。そしてゆっくりと口を開き、言つた。

「べつに、なんにも」

「じゃあなんのために毎々と」

「ただ話したかっただけ。べつに心配しているとか仇を討とうとか、そういうわけじゃないんだ。友達でもないし。慰安婦として従軍してもいいんだよ、罪の意識にさいなまれてるとか、そんな気持ちを抱いているならね」べらべらとまくし立てる。『そうそう、あ

と大人は、嫌いな人間とも仲良く話すことができるんだ。大人ってすごいだろ？ 羨ましいだろ？ だからみんなも一生懸命勉強して、いい会社に入つて、体調不良で休みまくるんだぞ。いいな？」

残念ながら、平和は長くはつづかなかつた。これはいつもの二十一世紀が丘高校の授業風景。変人の先生がいて、変人の生徒が完全無欠の変人になるべく勉強するところ。やつぱりどうあがいても、変人学校の魔の手から逃れることはできない。

「じゃあ授業に戻ろうか。えーと、そこのチンポ頭、つづきを読んで。ケンが妄想上でナンシーをファックしてるところから」

42話 6×9=42（後書き）

フルスロットルでカーブを曲がるような軌道修正。明日いろいろと  
考えます。ちなみにタイトルは意味なし。

## 43話 フリーターは二十五歳まで！

富田先生が大人のスキルのひとつ「体調不良」でリタイヤしたらしいので、次のロングホームルームは副担任の先生がやってきてわたくしたちの相手をすることになった。

副担任の柳生先生は眼帯をして腰に木刀を差していくことをのぞけば「いくつうの先生だった。ちょっとしたコーモア感覚も持ち合わせていて、むしろ思わず悩み相談を持ちかけたくなるような雰囲気がある。若くて、ざつくばらんで、フレンドリーで、本題そっちのけで富田先生をすでに過去のものとしてジョークのネタにしていた。

「時間がわからない男のジョークだ。男が通りを歩いていると、教會の鐘が鳴った。男は近くにいた老女にたずねた。『あれは夕刻の鐘ですか？』すると老女は耳に手を当て、こう言つた。『はあ？』

だれひとり笑わなかつたけど、富田先生の不在を悲しんでいるわけないのはたしかだつた。ただし黒板の上の時計は例外。さつきからずつと十八時二十分を指しつづけている。終生のライバルまたは格好の遊び相手を失い、うなだれていのだつた。

ちなみにいまは十五時すぎ。

「とまあ、そういうわけだな。あんまり病人をネタにしたらかわいそーか。じゃ、ホームルームということだから、なんかまともなことを話そう。将来について、なんてのはどう？ 社会に出て生きる上で不安とかなんとか。おまえらも不安とかあるだろ？」

わたしたち生徒は思わずあえぎ声を上げた。あまりにまともな内容だったからだ。

「生きる上でいろいろ悩むのは、みんないつしょだよな。だれもが悩んでる。重要なのは、悩みはごく個人的なもので、その内容に優劣はないってことだ。どうして彼女ができるないんだという俗な悩みも、人はなぜ生きるのかといった崇高に聞こえる悩みも、悩みは悩み。ひとついいことを教えてやろうか。自己実現のためにやりたいことがあって、だけどふつうの道から外れるのが怖い、だけど自分の声がどうしてもこれをやれと言う。そんなときはどうすればいいか。めちゃめちゃ悩むよな。やるべきか、それとも諦めるべきか。答えはこうだ。やれ」

みんな真剣に聞き入っている。

「人のことなど気にするな。自分の人生だ、好きなことをやれ。ただし二十五歳までにしどけ。そこでダメならすっぱり諦めて、べつの人生を探すんだ。フリーターは二十五歳まで。ハイづづけて」

「フリーターは二十五歳まで！」口をそろえて復唱する。

「じゃあ今日はここまで。二十五歳からでも人生はじゅうぶんやり直せるぞ。そしてこの話にはとくにオチはない。まるで人生と同じだな。てことでまた明日！」

ホームルームが終わつた。教室がガヤつく。男の子たちは神妙な表情で帰り支度をしている。このうちの何人かは家に帰つたらゲームをこしらえたり徹夜で小説を書きはじめるにちがいない。わたしはとくに首を伸ばしてアヤたんを見やつた。新しい先生が出現したにお馴染みの解説がないのが、なんとなく気にかかつたのだ。

アヤたんはへんな顔をしていた。かなり微妙な表情でたとえが難しいんだけど、夕飯はハンバーグだよとさんざん言われて喜び勇んで食卓に着くと田の前の皿にエスカルゴがじろりと転がっていたのを見たまさにその瞬間といつたような顔だ。颯爽と立ち去る柳生先生を目で追い、いなくなつてからも首から上をひょこつと突き出したままドアのあたりを凝視しつづけている。こつこつ反応を示すアヤたんははじめてだ。なにかへんなものが見えたのだろうか。

いつしょに帰りながら聞いてみた。

「 んー？ べつに」

アヤたんはわたしのチャリンゴのとなりをとことこ駆けながら言った。おかしい。アヤたんとは途中まで帰り道が同じなのでぼちぼちいっしょに帰っていたんだけど、必ず百パーセントわたしのチャリンゴの後ろに乗りたがり、わたしのおなかとか胸のあたりにぎゅぎゅっと腕をまわし、背中にほつぺたをつけながら愛の言葉をささやくのがお定まりだった。むかし、弟がインフルエンザにかかったときのことを思い出した。ちがつた表情や態度を見せつけられるとドキリとする。

「 いい先生だよね。おもしろいし。相談に乗ってくれそつうな感じだし」

これもアヤたんの言葉。信じられない。なんてまともな発言なんだろう。そういえばちょっと元気がない。

わたしはおうかがいを立ててみた。「今日の宿題だけど

「英語のやつ?」

「やつやつ。ケンの暴言集を穴埋めするやつ。あと次の章の なんだつ? ナンシーと電話で口論する会話」

「レッスン六、タイトルは『ナンシーはハイスクールのスーパー・ビッチ』」

「それ。デカ尻のレズとかいう その予習もしないと」

「で?」

「わたし、英語は苦手なの。だから 」

「こつしょにやねり、つて?」

「やつ」

「ふりん」

まるで気乗りのない返事。交差点にさしかかり、わたしはけたたましいブレーキをかけて止まつた。アヤたんは微妙に離れたところに立ち止まり、退屈そうにため息をついた。わたしはドキリとする。そして信号を待つあいだ、わたしたちは無言で往来する車をぼんやりと眺めつづけた。もしかして嫌われた? でもなんで? アヤさんは魂が三分の一くらい抜け出しているようなつづらな表情をしている。こんな気まずい空気になるくらいなら

どうしよう。声をかけづらい。

「ひとりでやるもんだよ、宿題つてのはねーーー

アヤたんが言った。

「だよねー」わたしは慌てて取り繕つ。「言いたかったのは、『だから今日は夜更かし確定だなー』ってこと」

「チョコレートでも買えぱいこよ

「買こに行く?」わたしはせりげないふうを装つて聞いた。「付き合つてよ

「宿題があるんでしょ? 夜更かしするんでしょ?」

「ちよつとくらいい寄り道しても

「『』めん。あたし用があるから。じゃね

その夜、わたしは宿題どころではなかつた。当然チョコレートもなし。集中できないわたしはペンを机に放り投げ、勢いよく立ち上がりつた。一、三週ほど部屋をうろついたあと、パジャマの上からパークーをかぶり、携帯電話をポケットにねじこみ、スリッパを履いて部屋を出た。そう、イライラしているのは甘いものが切れたせいなのだ。なにか食べたい。

弟の部屋をとおつすぎる。扉のすきまから明かりが漏れ、うつすうと音楽が聞こえてきた。また二、三回でも見てるんだねー。

一階に下りる。父も母も就寝済みのようすで、居間も台所も真っ暗つた。死んだよつに静まり返つている。

トイレに行つてから台所の戸棚をかきまわし、へんなサルのイラストが描かれたチョコクリスピーパンの箱を取り出した。がさがせと目に盛り、牛乳をかける。

豆電球をつけ、音を立てないよつそーつトイレスにする。スプレーを持ち、ぞくつと一口すくつた。持ち上げたところでふと手が止まる。

もう片方の手で携帯電話をひっぱり出した。着信はなし。アドレス帳を検索する。

わたしは田澤にメールした。玲乃様は毎日アドレスが変わらしないのでだれも知らないし、しまじりつけたまま携帯電話 자체を持っていない。だからとくに意味はない。

「アヤたん、おかしくない？」

わたしは闇夜でシリアルをもしゃもしゃした。半分くらい食べるじうまで放置され、みづやく返信が来た。

「これでどうだ！　届いてるかー？」

「届いてる」

「厚生大臣宛にメールすりやいいのか。めんどくせー」

「アヤたん、暗くない？　そつけないというか、いつもとちがうか

相変わらずだ。少しそうとする。「なんの用よ」

「アヤたん、暗くない？　そつけないというか、いつもとちがうか

ら。気になつて

「さあ？ つーかまともに話したことがない」

役に立たないのも相変わらずだ。と、アヤたんがへんな顔で副担任を見ていたことを思い出した。

「副担任の柳生先生つて、なにか知つてる？」

食べ終わつても返事が来ない。わたしは二杯目に行こうかどうか迷いながらイライラと画面を見つめた。

「知らねー。でもいいじゃん。まともな先生つてはじめて出会つた。参考になつたよ。おれも卒業したらフリーター やるわ。小説家デビュー！ 七年も修行すりや、なれるだろ」

「それは」「わたしは思わず口に出してつぶやいた。「変人の人生つて言つんじゃ」

カラーン。わたしは空の皿にスプーンを放り投げ、顔を上げた。オレンジ色に光る豆電球を見つめる。そして気づいた。なんて巧妙な手口。そう、あの副担任はまともで理解ある先生なんかじやなかつた。やっぱりわが母校はまともな高校なんかじやなかつた。これは夢ではない。みんなでもう一度、なんとかしないと。

アヤたんにメールを入れる。結局、翌日の朝まで返事はなかつた。

#### 43話 フリーターは二十五歳まで！（後書き）

なんとか修正できそうな手応え！ ようするに変人ってのは、わたし  
みたいな大学で勉強もせず就職もせず小説を書いて人生のなにか  
を失ったタイプの人間のことなんですよ。そしてそれは悪いことな  
のか？ ほんとうになにも得るものはなかつたのか？ という。な  
んてまともなんだ。

## 44話 次のいきものがかりを目指して

そう、新しく登場した副担任の柳生先生は、耳に心地よい言葉でわたしたちをたぶらかし、全員フリーーターの夢追い人に仕立て上げようとしているのだ。ほんとうに夢を叶える人は、もしかしたら出てくるかもしね。だけど田澤でないことだけはたしかだつた。

わたしは知つていて。才能がなればいくら努力したところで作家にもミュージシャンにも俳優にもなれるはずがないのだ。なんでも知つてゐのかはわからないけど、とにかくそういうものなのだ。

「おれは決めたぞ。おれはお笑いの道を突き進む。うんこネタで世界を制するんだ」

翌日、わたしは右上の奥歯の隙間に舌をねじこみながら教室に入った。朝食の鮭をやつつけている最中、厄介な小骨が第二大臼歯と第一大臼歯のあいだに潜り込んだのだ。骨に気づいて「おうつ」と言い、半ばテンブン質と化したごはんもろともお皿にべつと吐き出したがすでに手遅れだつた。吐き出し損の、母に冷ややかなまなざしを向けられ損だつた。

最近は母とどうもうまくいっていない。なにが原因かはまったく見えていないんだけど、なんとなく諦められているような気がする。わたしもじょじょに変人化しつつあるのだろうか。わたしの知らないところで。高校にかようことで見えなくなる能力がどんどん強化され、いろいろと大事なことを見落としているかもしね。

わたしはわれにかえり、皿下の敵に集中することにした。そしてわたしの舌VS小骨の戦いを繰り広げながら席に着いたとき、さつ

きの声が聞こえてきたのだつた。だれかと思えばしまじろうだ。田口に向ける。しまじろうはじつに高校生らしい夢と希望に満ちた表情で、取り巻きの男の子を見まわしている。

「考えてみる。高校卒業後すぐに夢を追うとして、一十五までなら八年間あるだろ?」

七年間だ。

「どんだけ長いんだつて話だぞ。だらう? 小学校在学より長い。ようするに、成功は才能によるものじゃない。ある程度の期間、集中的に取り組むかどうかにかかってる。いつまで経つても夢を叶えられないヤツってのは、たぶん迷いを抱えながら中途半端にやつてたからなんだよ」

取り巻きは「そうだよなー」とかうなずきながら、なにやら各人の押さえきれない想いが爆発しそうな顔をしていた。

「くそ、おれもなんかやりてえ」取り巻きその一が、辛抱溜まらんといった顔でおのれの拳を握り締めた。「やり遂げてえ」

「だつたらおれのアドバイスは、こうだ。夢はあるか? 自信はあるか? だつたらやれ。とにかくやれ。ジャスト・ドゥ・イットだ。男なら、人生を無駄に生きるな。熱く生きろ。言いたいことはそれだけだ」

自分も夢を追い求めはじめて一分しか経っていないといつのに、すっかり成功したつもりになつていてる。

「じゃあさ、学校なんかかよつてる場合じゃないんじゃないの?」

取り巻きたれの一が言った。「おれ、いまから帰つて漫画描くわ」

「おれはルーツを探るわ」田澤が言った。「昔に読んだ小説とかひっぱり出して」

「やべー、人生楽しくなつてきた!」

人生楽しい発言を合図に、取り巻きがぞろぞろと離れていった。わたしは相変わらず歯のあいだに潜り込んでいる小骨を舌で必死にかき出しながら、机を手のひらでひとつおり払い、教科書とノートと筆記用具を出した。連中はめいめいの席に戻り、持ち物をあらかたカバンに詰め、次々と教室をあとにした。わたしはいつのまにか握っていたシャーペンを、なんとなく視界にすべり込ませた。ほどよく伸びた芯に焦点を合わせる。

いつそこで小骨をシーキーしようかなどと考えていると、視界の先のぼんやりしたアヤたんに気づいた。焦点を合わせる。アヤたんは窓際の席にすわつていて、頬杖をついて窓の外を眺めるというこれまでない寂しげなポーズを見せつけていた。

窓の外をカラスがさつと横切った。戻ってきてベランダの手すりにとまり、教室の中をじっと見つめている。アヤたんは頭にハテナマークを浮かべつつ、ゆーっくりと首をかしげていく。カラスも同じ方向に首をかしげた。

わたしは九十度ひねった首をさらに百一十度くらいまでひねり、後ろの席の女の子を見た（名前は残念ながら知らない）。その子は、わたしと同じようなことを考えているようだった。つまり バカじゃないの、夢なんか叶えられるわけない、おまえらは全員失敗し、苦み走った顔でその後の惨めな人生を吉野家で並盛りを食つたりし

ながら送りとてゐるのみ、ハ。

「じゃ、帰る。勉強したら連絡するわ」

田澤がじまじめに笑った。いつもせと顔を向ける。

ヒ、しまじめに厳しこ表情で田澤の手首をつかんだ。「待て」

「なんだよ」

じつと見上げる。「行くな

「なに言つてんだよ。せめて帰らなこと電撃文庫の締切に間に合わ

ねー

「ひとこといか

「言えよ、せめめ

「高校は卒業しろ」握る手じぐつと力を込める。「頼む。親友から  
のお願いだ。おまえが悲しみじみを見たくない

「だつておまえ、やつはすぐでも夢を追えって

「兄ちゃん

「は?

「兄ちゃんを思い出したんだ

「酔っ払い運転の？」

「やうだ。おれは おれはなにを血迷っていたんだうう 「ぎゅっと口を引き結び、顔をうつむかせた。「バカなことをしたもんだ。人生は夢を叶えるためにあるんじゃない。夢を夢見て、希望を胸に生きる その道程こそが、真の成功、真の幸せと言えるんじゃないのかな。だらう？」

なんのこいつちや。とにかくしまじろうは五分で夢を諦めたようだつた。はやすぎる氣もしたけど、まあ能力の限界に気がくのはやはりに越したことはない。

「だからおまえも諦める。机にすわって教科書を開き、高校を卒業し、地道な仕事に就け。結婚し、子供を養い、堅実な人生を送るんだ」

「やだ」田澤は手を振り払った。「おれは作家になるんだもんね。早起きしなくて済むし」

ガラガラガラ。そしてその先生が入ってきた。

「まだ気づかないのか？ これは先生どもの罷 」

しまじろうは言葉を止め、ハッと振り返った。柳生先生は教壇に登つて「うつと歩きながら、しまじろうに顔を向けつづける。

しまじろうは顔を伏せた。そして悩ましげな顔でわたしをチラ見した。

「席に着け。 どうだ、着いたか？ おれは隻眼だからよく見え

なくて。レーシックでよくなれるのかな？ おまえらはビリの田鶴？

先生は和やかに「冗談を飛ばしつつ、いいほつの田をわたしに向けてきた。一瞬残忍な光が宿り、わたしは背筋をぞくりとさせた。そう、アホな眼帯に木刀を腰にぶら下げているけど、副担任は富田先生なんかよりよっぽどクレバーなのだ。それとも入学直後の緊張感も取れたところで、いよいよ学校が本気を出しつつあるところとなるのだろうか。

「じゃ、はじめるだ。まず注意事項がいくつか。女子のスカートだが、股下十センチ以上は禁止になつた。まあ不本意だろうが、学校の方針だからな。我慢して短くしてくれ。それから男子は必ず短ラン着用、それから持ち込めるゲームソフトもひとり三本までになつた。学校は勉強するところだ。文句は言つなよ。最後にクラスで金魚を飼うことになつた」

金魚？

「どうだ。飼育したいやつはいなか。いきものがかりだぞ。好きだろ、みんな」

## 45話 捕虜には餌をやつさないでください

「なんだどうした。みんな金魚は苦手か？」 そうだな、しようと  
がないか。おまえらが悪いんじゃない。都會に自然がない日本がい  
けないんだよな。小さなころから生き物に慣れ親しんでないおまえ  
らに生き物の世話をしろなんていう学校が無神經なんだ。よくわか  
る」

少し前なら「こじアヤたんの解説が入るはずだった。たとえば「  
柳生先生は十代の気持ちをいたいほどわかることができるの」とか  
なんとか。おもしろくない？ まあわたしはお笑いで天下を取るつ  
もりはないのでいつ「こじに構わないけど」

アヤたんは猫背で前を向いている。横顔は虚ろで、まるで魂を抜  
き取られたかのよう。いつもはイスに横ずわりしてわたしからひと  
ときも目を離さずに「こじ」したりウインクを飛ばしてきたりしてい  
たのに。

ほんとに「こじ」しちゃつたんだろう。単に嫌われただけ？ だとし  
たら命がいかない。わたしはなんだか頭に来て、舌を顎ごとぐり  
ぐり動かして紅鮭の小骨をひとつペがしにかかった。

「ん？ そういうえばクラスの三分の一ほどが欠席しているようだが、  
なんだこの状況は？ インフルエンザか？ 学級閉鎖直前スペシャ  
ルか。それともおれが見えてないだけかな？ 生徒の気持ちを  
まあいいか。おおかた、夢を追い求めるのに忙しくて学校どころじ  
やないんだろう。そうかそうか。それはいい。なんてすばらしい

「

先生はまたわたしをチラツと見た。そして残忍な光を帯びさせる。ヘンな顔で魚の骨と格闘していたから？ いや、そうじゃない。わたしになにか用だらうか、それともわたしに次世代の金魚番をしろとでも言いたいのだろうか。

「言つておくれが先生、悪いなんてこれっぽっちも思つてないぞ。それどころか大賛成だ。夢は追い求めるべきだし、学校は勉強するためにあるところだ。ただ来ればいいというもののじやない。潔くていいじやないか。おれは先生としてじやなく、ひとりの人間として応援するぞ。がんばれ！」

なにががんばれだ。わたしはよけいに腹が立つてきた。先生の意図は見え見えだ。これは平たく言えば褒め殺し作戦。理解ある教師のふりをしてわたしたち全員を変人の社会不適合者にしようと企んでいるのだ。廊下からドアの窓越しに、化学のふじこちゃん先生がおずおずとのぞきこんでいる。

『氣づくとわたしは手を挙げていた。

「なんだ」先生は寛永通宝型の眼帯を右手でつまんで調節した。『名前、なんだつけ？』

「町田です」

「それは名字だろ」

わたしの口めかみがぴくつと動いた。

「で、なんか用か？ 日本でも旧正月を祝いたいとか？」バカにするよつに言つた。『まさか金魚の飼育係になりたいってわけじゃない

だろう？ まさか。そんな。信じられない。なにか他の用事があるはずなんだ。言つてみる。なんでも聞いてやる。おれはおまえの先生だからな

「

というわけで飼育係になつた。ショートホームルームが終わると、速攻で金魚が運ばれてきた。正確に言つとポンプ付きの水槽で、男子生徒が四人がかりでえつちらおつちら重そうに持ってきて、窓際の棚に置いた。ひとりがわたしに近づいてきて、「ボリスとナターシャをよろしく」と言い、餌の袋を手渡した。

そしてすれちがいざま、わたしの耳もとでさわやこた。「くれぐれも気をつけろ」

「えつ？」わたしは振り向いた。「なにを

「やつらに餌をやつすがんな。金魚はほんのちよつとでいいんだ」

金魚運搬係は来たときと同じよつと速攻でいなくなつた。

ちなみになぜ金魚係を引き受けたのか。簡単に言つと、なにかあるとひらめいたからだ。だいたい高校で金魚を飼うなんて、どう考えてもまともじゃない。それにこのところ、おかしなことづづきだ。アヤたんは人が変わつたようにくらーい女の子になつてしまつたし、それに今日は高校入学以来はじめて転校生がやってこなかつた。

この金魚には、ぜつたいになにかがある。

田の前で水槽がふくふくと泡を立ててこる。金魚が一匹泳いでいた。ボリスとナターシャというロシア系の金魚。

## 「 金魚」

お昼休み、わたしは金魚側の机にすわり、水槽をにらみつけながらお弁当を食べていた。背後からいきなり声が聞こえ、わたしは振り返った。

アヤたんが夢遊病の小学生みたいに立つていていた。「マチ子さん、金魚が好きだなんて」「

「好きじゃないよ」わたしは急いで答えた。いきなり話しかけられてどうすればいいのかわからなかつたけど、とにかくしゃべるべきだと思った。「お昼、食べる?」

「かわいい、金魚」「

ほんやつと言つ。だけど実際のところ、金魚はかわいくなかつた。両方金魚とは思えないほど巨大で、全長は約二十五センチ。これは鯛のまちがいじやないのか。それに挙動もかなり不審だつた。ボリスはえらいスピードでせまい水槽を回遊し、中央に大メイルショットロームができてゐる。ナターシャはゆつたりと気品のある動作で砂利の近くを泳いでいるんだけど、どうも自分を金魚だと思つていないうなふしがあつた。ヒラメのよつに横たわつたり、半回転してカレイのよつに横たわつたり、ときおり思い出したよつに直立してトリプルルツツを決めたりしていた。

かなり餌をやりたくない金魚どもだ。

「なんで 金魚 マチ子さんが」「

寝言のよつにつけづぶやくアヤたんの手を取つた。ぐいとひつぱり、となりの席にすわらせる。お尻を軸にしてイスの上を半回転し、お弁当箱を抱えてアヤたんを直視した。馬の尻尾がご主人様の額をぴしゃりと打つた。

「新しい髪型？」

「いつもどおりだよ。ただのポニー・テール」アヤたんがうつむいたので、わたしはかがんで顔をのぞきこんだ。「いつたこどりしたの？」

「どうして？」

「なにがあつたんじやない？」

口をぽかんと開けた。うつむな顔でわたしの頭上を見上げ、にへりうと笑つた。「わからなー」

「なにか悩んでるとか？」

「わからない。わからないのがわからないの」

「それはつまり」

「なんにもわからないの」まぶたがぴくと痙攣した。「あたし、知らなかつた マチ子さんがいきものがかりに憧れてたなんて

「

「ちがう。だから金魚が好きなんじやないよ。これにはわけがあつてね」

そしてわたしは、なぜ金魚係に立候補したのかを説明した。アヤたんの反応はかんばしくない。

ためしにタマセスワインナーをつまんで食べさせてみた。無理やりおぐみにつまむ、しゅぱんと箸を引き抜く。

黒やうな顔でもぐもぐしてくる。

「 ね？ つまりこうしたことなの。だって、明らかに怪しいでしょ、高校で金魚なんて。いかにもこの高校がやりそなことっていつか。だから立候補したの、秘密を探るために」 いつたん言葉を切って反応をうかがう。「どう、理解できた？」

アヤたんはワインナーをぱくへんと飲み込んだ。おぶたをゆっくりと持ち上げて囁く。「おこしこです」

ダメだこつ。せ

「 おこ、餌くれ」

だれかが言った。「おれにも食わせろ」

振り向く。やつぱりとこりかなとこりか、話しかけてきたのは金魚だった。声からするとボリスのまひだ。

「あたしもペロペロよ」ナターシャも囁いた。机にある餌の袋を見てウンザリした声を上げる。「バー？ 今日もテトライフイン？ いかげんこしてよ」

「もつと滋養のあるものを食わせろ」ボリスがつづいた。「ロシアの冬を乗り切れるような」

「まつたく。こんな扱いを受けるなんて信じられない！」あたしたちをなんだと思ってるの？

「金魚」

薄ら笑いを浮かべ、アヤたんが言った。

#### 45話 捕鷹仕掛けをやつすがなこやくだらこ（後書き）

なぜかロシシア系金魚になつてしましました。それにしてもこれ、どうやってコライトすればいいんでしょつか。いまのところ一話完結型の短編連作といつかたちで考えてはいるのですが……。

「われわれをただの金魚だと思つてゐるのか」

ボリスが憤然と言つた。ナターシャはあきれたように肩をすくめ、かぶりを振つた。金魚がどうやら肩をすくめたりかぶりを振つたりできるのか説明しづらこんだけど、できるんだからしかたがない。

「この子たちには眞の意味がわかつてないみたいね」ナターシャはため息をついた。ほわつと水槽が一瞬くもつた。「でしょう、ボリース・アナトーリエヴィチ？」

「たしかにな。ナターリヤ・ステパーノヴナ」

「金魚は金魚でしょ？」

昼休みを金魚と話して終わらせるのかと思つと気が滅入つてきたが、どうせいつでも休めるのだ。わたしたちはこれまで一度たりともまともな授業を受けたことがない。ちなみに次の漢文は日本語が不自由な亀田先生。これまでの授業の内容はとこうとまあ、いうまでもない。ボクシングは多少上達したけど

わたしは攻勢に出ることにした。見下したような態度だけど連中は水槽から出られないわけだし、なんといっても飼い主はこのわたしだ。

「長い付き合いになるんだから、せいぜい仲良くしましょ。でないとあなたたちはテトラフィンでしりあがそつに思えるようになる

でしょうね

「マチーノ・ヨイーチェヴナ」諭すように言った。「われわれは情報をつかんでいる。きみはわれわれを捕らえた。情報がほしいからだろう。ならばここはおたがい大人になるつじやないか」

アヤたんが目の端で動いた。指を「口」字にしてわたしのお弁当を狙っている。ハツとしてアヤたんに振り向いた。アヤたんは肩をピクッとさせ、わたしを見る。顔は終始無表情だった。

それを見てわたしは、ハツとした顔をさらにハツとさせた。これはあれだ、事故で足の感覚を失った人がときおり足にかゆみを覚えるというつまり、アヤたんの脳はこれまでのお昼休みの習慣を覚えているのだ。

わたしは金魚どもにサツと向き直った。「どんな情報?」

「おまえはなにを『えてくれる?』

「えーと」テトラフайнの袋を持ち上げる。「おいしい昼食を

「ふん!」ナターリヤ・ステパーノヴナが鼻を鳴らした。「あなたが食べたらどう? そうすればせめて金魚並みの知性が身につくんじゃない?」

「われわれは真のおいしい昼食を要求する」ボリース・アナトーリエヴィチが言った。「つまり、おまえたち人間と同じお弁当だ。われわれを見くびるな」

「その見返りは?」わたしは目をすがめる。すっかりロシアンスパ

イの雰囲気に感化されている。「わたしの知りたい情報を持つているのね」

「そうだ。二十一世紀が丘高校の大きいなる秘密。先生どもの真の狙い」

「まともに卒業できればそれでいいんだけどね」わたしは重々しく付け加えた。「わかった。お弁当は約束する。母に頼んであなたたちのぶんも用意する。わたしは料理できないから」

「だれもおまえに料理など期待していない。殺人的にまずい料理をつくる以前の問題だら、おまえの場合は」

「冷凍食品のオカズで『まかそつなんて考えないことね』ナターシヤが念を押した。「それから、これだけは覚えておいて」

「なに?」

「オホーツクはカニじゃない。あれはただのカマボコよ。わたしにはわかるの。そしてわたしたちを裏切つたら、あなたが必要としている情報は一度と手に入らない。あなたは変人として高校を卒業し、なにひとつ大事なものが見えなくなる。そして『友人も一度ともとには戻らない』

「そういうことだ」ボリスが神妙にうなずいた。そして交渉は終了だと言わんばかりに背びれを向け、ふたたび回遊をはじめた。「腹減った。あつしたつのおつかずつはなーんだーるなー」

放課後、アヤたんを家に呼んだ。思えばはじめてだつた。なんで今まで拒否していたのか理由は思い出せないけど、それはともか

くこまアヤたんは薄暗い部屋のテーブルにぎゅうじと腰を下ろしている。

パーティ開けしたポテチ（のつしお）にまつせこ手をつけず、見向きもしない。ほんとにびしきつたんだらうか。金魚どものあの口ぶりだと、高校のなにかが関係しているらしい。

とにかく、明日は都合三人分のお弁当をこしらえてくださいと母にお願いするつもりで家に帰った。アヤたんを連れてきたのは、おなかを空かした子を演じてもらつためだ。「あのね、今日学校で金魚の飼育係に任命されてね、明日金魚にお弁当が必要になつたの。おねがーい」なんて言つても、ノリツツコミ的につくつてくれるような母でないのはよくわかっている。それどころかかかるべき病院に連れて行かれるのが関の山だ。

で、その母はいなかつた。買い物にでも出かけているんだろう。

「いい？ 母が帰ってきたらまず儀式を執り行うからね」わたしはアヤたんに再度確認した。「茶室でお茶をいただくの。はじめはだれもがとある道でね、だからわたし友達が少ない分けなんだけどそれはいいか。とにかく、大和撫子として滞りなく済ませること。でないと今後いつ出入り禁止になるから」

アヤたんはにへりーっと笑つた。ひやんと脳に畳いてるんだらうか。

「そしたら、おなかペこペこの演技をするの。母親が育児放棄して男をつくつすることにしてもいいけど、気がとがめるならそこまでしなくてもいいよ。ハイ、言つてみて。『あたしおなかペこペこだよー』」

「ペニペニだよー」

かなり棒読みだった。

「ちがう。もっと感情を込めて」わたしは中腰になつてアヤたんの顔をのぞきこんだ。「おなか減つてない?」

「ほあー」

残念ながらアヤたんはほつぺの色つやもいし、爪もピンク色で亜鉛欠乏の兆候も見られない。こんなに発育のいい育児放棄された子なんていないだろ?。

「キッス」

「え?」わたしは聞き返した。「なに?」

「キッスがほしいの」

「うわー」とのよに。『「王子様のキッス」』

「えーと」つまっこわたしにキスしてほしいってこと?わたしはとぼけた。「明治のメルティーキッスじゃダメ?」

「それでもいい」

大急ぎで戸棚をかきまわし、患者にチョコレートを分け与える。

「そうそう、これがほしかったんだ。このキッス」ひとつまみ

し、おくちに運ぶ。と、自分を真っ向から否定するよつてぶんぶんと頭を振った。「このキッスじゃない！」

ノリツツ ロリをしてから正方形のチョロをほりなげる。そして「あー」とうなりながらパーティを開けしたポテチ（のりしお）に顔面を何度も何度もつっこませた。

ぞくつ、ぞくつ。わたしはなすすべもなく見守る。そしてノリツツ ロリとのりしおをかけているわけでもなさそうだった。

よつやく衝動が収まったのか、アヤたんはゆづくつと顔を上げた。顔全体がコイケヤふうになつていて、テーブルにはおやつとしての存在そのものを粉々に碎かれたポテチのかすがちらばり、床や流しにまで飛び散つていて。

のりしお味のアヤたんがわたしを見上げ、まぶたをぱくぱくさせた。青のりがまつげからぱらぱらと落ちる。

「アヤたん」「これを異常事態と言わずしてどれを異常事態と言うのか。わたしはもつたいぶつた言いまわしはやめ、友人としてストレートにたずねようとした。「いつたいどうしたの？」

ガチャガチャ。玄関の扉に鍵が差し込まれる音がした。「ただいま」母が帰ってきた。わたしを無性に恐れさせる規則正しい足音が近づいてくる。

アヤたんがふたたび言った。「キッス」

## 46話 青のつのよつねロボット... 濡池屋メルティーキッス（後編）

メルティーキッス×コイケヤポテトチップス（のりしお）の意味不明な「ラボ。あとロシア金魚が口にした父称から、マチ子さんのお父さんが勝手にヨイチさんと決まりました。まあ小道具も使えたし、日常に戻つてこれたし、しばらくはこの調子で進めたいと思います。ちなみにオホーツクつてカーかまのことですけど、ローカルな名称なんですかね？

母が一直線に台所へ入ってきた。わたしの前を横切り、流しで手洗いはじめた。

「ただいまー」

わたしはひきつった声で反射的に言った。いや、なにかがおかしい。この場合家に帰ってきたのは母のほうなのだから、わたしは迎える側として本来ならばおかえりなさいと言うべきだらう。だけどわたしも我が家に帰ってきたわけだからただいまでもべつにおかしくないわけで。

ええい、面倒だ。両方面ねつ。

「おかえりー！」

母はいまのところ無言だった。長女の存在にも、その連れのポテトチップスにも、いまのところまだ気づいていないらしい。しかも手ぶらだ。

「どこか出かけてきたの？」同級生の手前、平静を装つてたずねる。  
「買い物にしてはどこにも買い物がないんだけど

遮られてもいいのに口もひいてしまった。いつもじつだ。そして母は話したいと思つたときにしか話さない。

キュッと水道の蛇口を閉めた。弟みたいにバツバツバツと手を振りまわすわけでもなく、かけてある布巾で片方ずつきつちつしづく

をぬぐい、ブラウスの袖をなにかの儀式のよつておひへつておひじた。

舞台女優のみつて振り向く。表情からするに悪役を演じてゐるひい。

「あなたの学校へ行つてきました」

学校？

「今月分の給食費を払いに？」

「やつ、現金を手渡しで」母はめずらしく冗談を言つた。よくない兆候だ。「半年分を一括で納めたり、五パーセント割引をしてくれましたよ」

わたしは親と学校が結びつくイベントなんてどこにあつただろうかと考えた。そして あつた。

「あなたの」として学校に呼ばれたので行つたままで

逃げ出したい。

「校長先生と面談を

「校長先生？」

「なぜ」一度繰り返すのですか。一度言えぱじゅうぶん云わります。テレビドラマではないのですから

「すみません」

「それから担任の先生とも、

「富田先生?」

「いいえ。若い先生です。田に眼帯をし帶剣した、武士のよつたな立派な先生」

あの副担任か。「目が不自由なんだって。理由は知らないけど

」

「ものもいらこだと言つてこました」

ウソつけ。それにしても母を呼び出すなんて、今度はどんな悪巧みをしようとしているんだろう。

「あなたは金魚の飼育係に」

「 そう、そうそう。 ううなの」

細かくうなづく。図らずもアヤたんを紹介できるきっかけができたわけだけど、そもそも紹介していいものなのか疑問が残る。

そのポテトチップスは、顔じゅうのりしおだらけにしながらぼかーっとイスにすわっている。

「つなずきは一度でわかります」

ああ、やっぱ。こんな親なら子供を放置してパチンコに行く十七歳

のシングルマザーのほうがよっぽどマシだ。少なくとも言つことなすこといぢいぢいぢやもんをつけられずに済む。そして警察やソーシャルワーカーが乗り込んできたら、むしろ味方になつてあげるのだ。「いえいえ、わたしが勧めたんです。パチンコに行かって。わたくしはだいじょうぶ。食事なんか、いらないんです。もともと食も細いし」とかなんとか言って。

よくわからなくなつてきた。「なんの話だつけ?」

わたしの暴言にもかかわらず母はソッコミを入れず、代わりに静かにテーブルに着いた。アヤたんの右どなりだ。そしてアヤたんには気づいていないのか、目も向けない。

もしかして見えていないとか。

母は正面にすわりなさいと指さした。わたしはアヤたんにちらちら田を向けつつ、テーブルにすわった。そして母と子と裁判長の妙な三者面談がはじまつた。

「单刀直入に言つます」母が切り出した。「あなたは学校に不満なのですか」

「それは」「もちろん。だから好きでもない金魚の係を引き受けたロシアのスパイから情報を得ようと母にお弁当を三人分つくつてほしいという見込みのない戦いをしようとしているのだ。そしてアヤたん。この子、なんで連れてきたんだっけ?」「不満とかじやなくて

「とか?」

わたしは頭をかきむしりたくなつた。いちいち揚げ足を取つてく  
る。わたしのなにが気に入らないのか。嫌いなのか。「お母さんは  
どう思つた? あの高校に行つたんでしょ? なにか気づいたこと  
はない?」

「地下ごとおされました

「 例の穴ぐら?」

「穴ぐらが適当な表現かはわかりませんが、そうです。内々の話で  
したから」

「儀式も?」

母はお上品なため息をついた。「話をばぐらかすのはやめなさい。  
あなたは昔から、いつもそうでした。わたしが大事な話をしようと  
しても、はぐらかしたり、冗談を言つたり、非現実的な妄想に逃げ  
込もうとしたり」

「だつて地下でしょ? 彫像が 教育委員会の

母の顔がさらに固くなつた。これに比べれば教育委員会様もただ  
のかわいい山羊さんだ。わたしは先をつづけるのを諦めた。どうせ  
言つても無駄だ。聞く耳を持つていらないんだから。言つても言わな  
くても同じこと。

だいぶ腹が立つっていたので、学校のことなんかどうでもよくなつ  
ていた。なにを言われたのか知らないけど、好きにすればいい。

「校長先生はあなたの行動に問題がある、と言つていました」

「たとえば？」不良娘が言つた。いつも足を組んでテーブルの上に乗せてやがつた。だけど長年のよく行き届いた躾に遮られた。

「悪い仲間といつるんで、授業を妨害しようしたり」「

わたしは聞かずアヤたんを観察して楽しむことにした。アヤさんはさすがに退屈したのか、脣のまわりをちょここりと舐めて塩分を摂取していた。なんてかわいいんだろう。アヤたんのお嫁に行けばアヤたん一家として幸せに暮らせるかもしない。

「教室を火事にしようとしたり。学校に火を放つなど、テロリストのつもりですか」

「数学の先生がタバコをポイ捨てしたからだよ」

「先生が？ 授業中にタバコを？」

「いいよ。言つても信じてくれないだろうから」「

母は口を開きなにか言いかけた。口を開じ、ヨガかなにかみたいに背筋を伸ばし、腹式呼吸をした。きっと自分に言い聞かせてるんだろう。「ここで取り乱してはダメ。それでは母親失格よ。辛抱強く接しなきや。それが親の務めだもの」とかなんとかかんとか。

「校長先生および副担任の先生からは、わたしからよく言つて聞かせるようにと注意を受けてきました。ですから、わたしはあなたに罰を下します」

はじまつた。罰則はいつものことだ。わたしは十五年間バツだら

け。おかげでお正月は羽根つきをやる必要もないうらうだった。

「その態度が改まるまで、昼食のお弁当はつくれません」

わたしは恨み辛みで構成されたビビリマグマからポンと弾き出された。「は？」

「あなたの一期期の成績を見て、学期末に先生に就学態度を再確認し、それからお弁当を復活させるかどうかを決めます」

罰といえばお小遣いなとか週末は三週間外出禁止とかが定番なはず。お弁当カットってなんだ？ そしてじわじわとその意図がわかりはじめてきた。これは先生どもの口添えにちがいない。なぜって、金魚がおなかいっぱいになつて極秘情報を漏らされては困るからだ。

「どうか、なんで金魚のことを知っているんだ？」

「よろしいですね。あなたは部屋に戻りなさい。こなさなければならぬ宿題があるのでしょ？」「母は立ち上がつた。「マチ子さん、返事は？」

わたしはハ行の発音をしがけたまま口の動きを止め、田玉をスライドさせてアヤたんを見た。アヤたんは自分の世界に入っている。いまはにやんこみたいに手の甲についたのりしおをペロペロ舐めまわしていた。

#### 47話 ふたつの二者面談（後編）

おお、話が展開しそうな雰囲気がじみ出できました。なにげに教育委員会様にも言及できてるし！「おもしろくしよう」と考える意識がどんどん大きくなことにはならないのだ、といつ気づきを得られました。今日の成果。

「 ねえ、今日のテストどうだった?」

「 Hスニーク語の? ううん、ぜんぜん。わたしウラル語系は苦手で」

翌日、トイレの洗面所でそんな会話を耳にした。たぶん一年生だろ。わが一年一組でも、英語の時間にエストニア語の小テストが実施された。べつに抜き打ちでもなんでもなくて、例のファッキン松井先生が前回の授業で予告したとおりテストを行つたまでだつた。だけど予習にも限度がある。人生、どうにもならないときもあるものだ。

かくいうわたしは、余裕だった。高校生がエストニア語ぐらいできなくてどうする。 というのは真っ赤すぎるウソで、実際は前日、田澤にテスト範囲を確認して回答をあらかじめいただいたのだった。わたしは意外と学校に順応している。

わたしにひとつはロシア・金魚のほうが問題だつた。次回のイヌイツト語のテストよりよっぽどたちが悪い。ひとまず朝、お弁当を用意できなかつたことを伝える。

「なるほど」ボリース・アナトーリイエヴィチが静かに言つた。 「われわれもあまく見られたものだ」

「期限は一週間よ。この前は言ひ忘れたけど」ナターシャがつづける。 「それまでにおいしいお弁当を用意すること。わたしたちの情報がほしければね」

「その前に飢え死にするんじゃない?」わたしは思わず聞いたが無視された。

「簡単な要求でない」とは理解している

ボリスの言うとおり、たしかに簡単じゃなかつた。わたしの読みがあまかつたのか「というかそんなことよりも田下の心配」とはわたし自身の昼食をどうやって調達するかだった。パン代もなし。

「だけど、それに見合つた情報よ」

「では」」」」ボリスが提案する。「水槽の水を取り替えてくれ。体がぬるぬるしてきた。これでは回遊できない」

言われるがまま、わたしは次の休み時間をまるまるつぶして水槽の水を取り替えた。そしてわが校の基準に照らし合わせねばなにごともなくお昼休みに突入した。やることも食べる餌もないわたしは屋上に行つた。この高校ではだれも屋上に行かないしどんなイベントも起ここらないうからだ。

今日も転校生はこなかつたし、アヤたんはへんなままだつたし、副担任は十代の少年少女に理解ある教師でありつづけたし、

なんの着信もない携帯電話をなんとなくのぞきこみながら、腰を下ろそうとフェンスのほうへ向かつた。と、室外機の近くに人影があつた。田澤だ。あぐらをかけて空なんか見上げながら弁当を食べていた。

のぞきこむ」と四十五秒、ようやくわたしに気づいた。

「なんだよ」

「お弁当食べてるの?」

「まあね」

「屋上で?」

「そう、屋上でランチなんてあり得ないよな。ほんとはしまじりうたちとサッカーやるはずだつたんだけど、戻ついたらじいにこてさ

」

なるほど。わたしは後ろ手に組みながら、ゆっくりと近づいた。だからといってなにをするわけでもない。田澤のお弁当に田代がいつた。なんとまあ豪華な。

わたしのものほしげな視線に気づいたのか、田澤は見上げてニヤリとした。「すげえだろ」

「す、いね」

ほんとすげかった。お弁当は三段重ねの重箱で、色とりどりのおかずがびっしり四人前は詰め込まれている。グルー・ポンも顔を青ざめさせる充実した内容だった。

すわる場所を探したがどこにもない。田の前に立ちはだかっていると、田澤が言った。

「だれがつべつたと思つ?」

「お母さん？」

「おれだよ、おれ。料理できるんだ」

「意外」

「まろひと口からついて出た。誤るべからざつか考へていろつちに田澤が答える。

「まあね。おれも意外だし。なんでかつていうと、昨日ピクシブに小説をアップしようとしたんだよ。そしたらなんかこう、小説どころじゃなくなつてや」>

「例の能力？」

田澤はうなずいた。「んで、気づいたら暗闇のなか台所に立つてたんだ。包丁を持つて。目の前には想像力を刺激する食材があつて

「

「なるほど」

「食べる？」

「なにを？」

「グルーポン。張りきりすぎて分量を考慮に入れ忘れてさ。思つてたのよりしょぼかった、つて意味じゃないよ。すごすぎたんだ。

おまえ、飯は食つた？ 食つたよな。まあいいや。とりあえずちょっとつまんでみろよ」

田澤はほんとうにそつけなくたずねてきた。たぶん言葉どおりの意味なんだと思う。つまり、おれの飯を食え、と。そのあまりのナルさにわたしはうなずいた。

「いれなに?」

「さあ。たぶんチキン・コロアンダードと黒いナビ」

わたしは腰をかがめて指でつまみ、ひと切れいただいた。つまいでつきたくなる気持ちを抑えつつ、安全にすわれる場所を探す。

「すわれよ。そこに立たれるとせつかくの青空が見えなくなる」

「新しい制服だから」

「あー、中身が見える心配? そんなのいらなによ。おれ、おまえが十一のときからなにもかも知ってるんだぜ。上から下まで、なにがどうなっているといつとまろまで」

懐かしい話が飛びってきた。とおりがかりの人が聞けば幼なじみなんだなと思うだろうが、当然そうではなかつた。

「といひでわたし、金魚の飼育係になつてね

「で?」

「おかしいと思わない? 金魚つて

「自分で立候補したんだろ」

「玲乃様は今日も転校してこなかつた」

「べつの高校に転校したんじゃないの？　べつしたつて飽きがくるだろ、毎日同じ高校じじゃな」

「アヤたんの様子も　」

「なあ、青空をさうきるなよ。おれの唯一の味方なんだから」

わたしは横にステップして退いた。

「空はいい。雲もいい。　今日は出でないけど。だつて、そうだろ？　どこに行つてもなにをまちがつても小説をアップしたのにまつたくアクセスがなくても、見上げればそこには必ず空がある。おれを見守つてくれる」

まるで友人に微笑みかけるように空を見上げる。なにかの病氣か、それとも脳内で小説でも書いているんだろうか。

と、顔を下ろしてわたしを向いた。「この学校つて

「うん」

「狂つてゐよな」

こまわり。いまださんざんわけのわからない事態に巻き込まれたのを忘れでもしたのだろうか。でも　わたしは考え直した。自分ひとりでもやもや考えているよりも他人の口からあらためて言わると、ほんとうに狂つてゐるとあらためて実感できたような気が

した。

おせりを見下ろす。そしてわたしは口を開いた。

「お願いがあるんだが」

「言わなくてもわかるよ」

「ほんとう？」

「ああ」田澤は神妙にうなずいた。「おせりでひとつ儲けしたいんだ  
うへ。」

## 48話 ナードネーム・グルーポン（後書き）

やつぱりグルーポンが出てきました。やつぱり隅に置けないです  
グルーポン。

## 49話 田澤、ロシアの鉄人。

田澤においしそう弁当をつくりもらひつため、その日の放課後わたくしは田澤家にお呼ばれされることになつた。需要と供給がマッチしたのだ。田澤が供給したがつてているのかはわからないけど、事情を説明してお願いすると、あつたり「こことよ」と言つた。

「じゃ、放課後こうひで」

「え、なんで」わたしは珍しく、きわめて女子っぽい反応を示した。「わたし、手伝えないよ。料理できないから。レシピはお任せする」

行きたくないわけじゃないんだけど、呼ばれる理由がよくわからない。機嫌を損ねないように慎重に言つた。

「おい、それじゃ投げっぱなしだる。なんでおれだけにやらせんだけよ。それに　あれだ。あれ」わちやわちやと両手を動かす。「もつと詳しい話、知らないと。どんな料理を望んでいるのかとか、金魚のあいだで最近流行のスイーツとか　とにかくいまのままじゃ説明不足だ。もつと話を聞かせろよ。金魚について」

放課後、並んでチャリンゴで車道を走りながら金魚についてもつと詳しく述べた。といつてもわたしもよくわかつていらないんだけど。

「　　へー。ロシアにも金魚がいるんだな」

「わからない。スパイだから、もしかしたら日本で育てられたのか

「も

「縁日の金魚のふりをしつつ、じつは諜報活動を おわつ…」

車がうしろからびゅーんとおりすぎた。田澤は危なつかしくころけ、体勢を立て直しながら「お母さんありがと、ありがと」「とつぶやいた。母への感謝をあらわすことでようやく上手にチャリンコを操れるようになるらしかった。なんとも不便なことだ。

武道のおかげで体幹バランスが優れているわたしは、母への感謝などしなくても上手にチャリンコを操縦できる。とはいって、なんか妙な気分だった。クラスメイトの中でも、田澤とはそれなりにしゃべるほうだろう。だけど先生の悪口とかくだらない冗談とかを話す以上にこいつに深入りしようとは思わなかつた。田澤も同じようだつた。十一歳当時の裸を見られてはいるけども、あれ以降は自重しているのかそれともこいつを忘れてしまつたのか、わたしに対する妄想は行わなくなつた。

まあいいか。しかるべき理由があつてお呼ばれしたのだ。遊びに行くわけじゃないし。

田澤の家は遠い。チャリンコで片道三十分はけつこいつ骨だ。ようやく到着する。ちょっとばかり田舎風の一軒家だつた。引き戸に、赤いトタン屋根。せまい庭は雑草が伸び放題だつた。

わたしはブレーキの効かないチャリンコを飛び降り、靴底でブレーキをかけた。玄関口を少しばかりオーバーランしてから後輪を浮かせて半回転し、駆け戻る。

犬小屋があつた。鎖につながれた柴犬も。わたしは田をしばたた

かせた。フランク・ショバックだ。

「ねえ、もしかしてお兄さんがいたりする?」

「こねよ」

「もしかして、その……」「ほんとうに。ふとひらめいた。『どんな仕事しているの?』」

「じたなことよ」

「トバ」とせせらべ、ひかの高校の卒業生?」

「やつやつ。わらの兄貴、しまじりの兄わやんと仲良しだぞ。ちよつと頭がおかしいけど、気にしなくていいよ。三年間部屋から一歩も出でていこないし」

イヤな予感ほゞぱり的中するものだ。わたしは直感のために聞いた。

「頭がおかしいって、どんなふう?」

「あ? わあ、よくわかんね。三年前に聞いたかぎりでは、たしか『つねに予告しつづけてそれを実行しない』能力なんだって言つてた」

「殺人予告とか?」

「まあね。一度それで京都府警が乗り込んできたよ。PSTとスマホ没収されて意識不明になっちゃつてさ。でも書はないから気にすん

なよ。なんにもしないんだし。普段は『サイトを更新する』とか『英検三級に挑戦する』とか『ケンブリッジに留学する』とか言つてるだけだから」「

というわけでわたしは田澤家に潜入した。チラシと犬小屋の柴わんこに目をやる。しまじろう家の犬とちがつて韓国系の名前でもなければへんな鳴き方もしなかつた。潤んだ瞳で見つめ返してくるだけ。わたしは少しほつとした。

中は外見と同じく古びた感じで、歩くだびに廊下の板がぎしぎし音を立てた。田澤は汚い靴下のまますると台所に向かつた。後を着いていく。

システムキッチンとはほど遠い台所で、食べ物のにおいがこびりついている。父方の実家を思い出した。「すわって」と言われ、テーブルに着く。クロスは油っぽくべとべとしていた。蛍光灯の傘も黄色く変色していて、レトロなハ工取り紙がぶら下がつている。

静かだった。なんだか落ち着く。

「そんなにあらたまつてすわるなよ

「これがふつうなの

「で、金魚の餌をつくつてほしいって？ なにがいい？」田澤はべとべと口の下の収納から包丁を取り出した。たん、と景気づけにまな板を打ちつける。「なんでもつくれるぜ。いつをつかんだんだ

」「うーん」わたしは唇をいじくつながら、ゆらゆらするハ工取り紙

を見つめた。「おいしいお弁当」

「おいしいかどうかは人それぞれだろ」

「そう言われたんだから。金魚の好みなんて知らないし」

「ロシア料理を恋しがってるかもな。ビーフストロガノフとか」

「つくれるの?」

「しかもビーフもストロガノフもいらないんだぜ。ちょっと待つて」

田澤は包丁をまな板に置き、台所を出た。ぎしぎしこと階段を登る音が遠ざかり、しばらくなんの物音もしなくなった。

わたしはみだりハエ取り紙を見つめた。それからふと田澤やその他の人によく言われるツツゴミを思い出し、自分のすわる姿を見まわした。これがいちばん楽なんだけど、たしかに固いかもしない。「なんかこっちまで背筋が伸びるんだけど」「わたしといふとくつろげない?」などなど、黄ばんだ明かりに照らされる台所にツツゴミの言葉が亡靈のように漂う。

試しにダラッとしてみた。脚をおっぴろげて投げ出し、腰を前方にずらして背もたれに頭を乗せた。「うえー」とかうなりながら天井を見上げる。ちっちゃい虫が素早い動きで円を描いている。

それからアホみたいに口を開け、口を半開きにして、イス全体を前にゆらゆらさせた。なんだ、すくなくリラックスできる。自分が消えて、何者でもなくなる感覚。わたしはだらしなく両手を上げ、後

頭部に持つて行き、馬の尻尾の結び目をつまんだ。結わえてある「ムに指を入れ、ぐつとほどく。サッと髪が広がり、両肩を撫でていった。ああ、楽だ。自由。明日からヘアスタイル変えようかな。

氣づくと田澤が戸口の付近で立ち廻りし、いぶかしげな顔でわたしを見つめていた。わたしは反射的に上体を起こし、イスを引き寄せて深くすわり、膝の上に手を置いた。

顔をひきつらせつつ笑みを返す。田澤の鼻が動いた。そして流しに向かった。

「おまえ、はじめての訪問なのにだらだらしきだぞ。もつ少しキチンとしろ」

「なにやついたの？」

「小説を書いて、アップしてきた」「だんだん表情が恍惚としてきた。  
「ああ　ロシア」

包丁をつかむ。それからの田澤の動きは、和の鉄人道場六三郎もシャツポを脱ぐほどだった。コンロの火を起こしてフライパンをかけ、サラダ油をじゅっと垂らす。「おい、牛肉！」鉄人が助手に声をかける。だれもいないのにフライパンに目を落としたまま後ろ手で催促する。パントマイムのようになにかを受け取りフライパンに投入した。箸でかきまわしている。肉のにおいが漂ってきた。

腰を浮かしてそーっと中身をのぞきこむ。なにも見えない。ついで塩こじょうで味つけしはじめたんだけど、やっぱりわたしには本格的な「おまえ」とにしか見えなかつた。

「タマネギは？ はやくし！」

バターを溶かしてタマネギをアメ色になるまでよく炒めはじめた。牛肉を戻し、トマトピューレを加えて軽くかき混ぜ、ふたたび塩こしょうで味を調える。

お皿をわたしの前に並べ、フライパンから慎重に盛りつける。田澤の額には汗が吹き出している。その横顔は職人そのものだった。今日の小説はだいぶ手応えありだつたらしい。

ぐう。わたしのおなかが鳴った。付け合せのおいもとピクルスが登場する。めちゃめちゃいいにおい。時間が余った田澤はまだなにかひと品じらえようとしている。いいからはやく食わせるとわたしはスプーンを催促しかけ、ふと気づいた。

「まつべつたつてしょうがないだろ？」

「よし」

田澤はもうひと皿をわたしの向かいに置き、腰掛けた。「食おつせ」

わたしはしばらく、ハサ取り紙越しに田澤と見つめ合つた。

「あの」

「んん？」田澤はすでに皿に顔を近づけてがつっていた。食い方もロシア人ふうだ。「はやく食えよ。今日はおれが皿を洗うんだから」

「ひ

新婚か。心中でツツ「ミミを入れつつ、自分の皿をのぞきこむ。べつにいいか。わたしは審査員のひとりとしておいしくいただっこ」とこし、せつそくスプーンを持ち上げた。

「 で、今日はどうだった？ 新しい仕事は順調？」

もつこつて。

## 49話 田澤、ロシアの鉄人。（後書き）

今日は個人的にはおいしゅうございました。それより田澤の名前を決めないとなあ。日本人男子の名前は苦手です。

翌日、田澤は学校に来なかつた。当然おいしいお弁当もなし。宅配を手配してくれたのなら話はべつだけど、そんな器用な高校生はなかなか存在しない。

わたしは一階の手洗い場で腕まくりし、水槽を洗つていた。一日しか経つていないのに苔の緑色に覆われている。水道の水をはね散らかしながら水槽を「リシリ」し、底に敷いた砂利もぬめぬめがなくなるまで丁寧に洗つた。

というか、わたしつつていつ勉強してるんだろう。

昨日のできごとを思い返す。田澤がなにをやつてもうまくできないうのはほんとうにほんとう。いくらおこしいお弁当をこじらえたつて、学校に来なきやなんにもならないじゃないか。

新婚生活をしながら食べたビーフストロガノフは、まあおいしかつたんだけど。お礼にお皿を洗つてあげたし。そのあと帰つてきた両親にも挨拶したし（とってもいい人だった）。そしてお兄さんの部屋からは得体の知れないうめき声が断続的に響き渡つていた。

考えるのをやめ、金魚一匹に皿をやる。ふつうは金魚だけに金魚鉢に移すところだけど、なにしろロシア産なのでガタイがいい。入れる容器もないのでしょ、うがなくシンクに寝かせていた。

手洗い場にはだれも近寄つてこない。不気味すぎるからだ。

一巨が横たわったままキロコと田を向けてきた。ボリース・アナトーリエヴィチだ。

「食事をさせろ」

「だからさつきから三五回も書つてゐるでしょ？ もつ少し待つて

「三五回は書つていな。せいぜい五、六回といつたところだ」

「だから、これはもののたとえで」

「いかにも西側的な言いまわしね」とナターリヤ・ステパーノヴナ。  
「さすが植民地っ子」

「植民地？」

「植民地ー？」ナターリヤがかなり悪意のこもった口まねをした。  
もとに戻してつづける。「だつてそうじやない。日本はなにからな  
にまでアメリカべつたり。政府しかり、娯楽しかり、教育しかり

「

「ナターリヤ」

ボリースがどがめるように言った。相方に田を向け、どこが首だ  
かわからないがかぶりを振つた。ナターリヤは彫りの深い金魚顔を  
ハツとさせて口をつぐんだ。そして口笛でも吹きそうな素知らぬ顔  
をして、ヒレでシンクをこすりはじめた。

なに、このやりとり。怪しい。わたしは砂利を両手ですくつて水  
槽に戻しながら考えた。もちろん、おいしいお弁当と引き替えの重

要な情報についてだ。植民地？ アメリカ合衆国が関わっているとでもいいたいのだろうか？ ロシアのスパイならそれもあるかも。

わたしはさらに思考の淵へ沈み込む。いつぞやの教育委員会様の話を思い出していた。詳細は思い出せないけど、なんとなく雰囲気だけ。

と、皿の端になにか馴染みのあるものが映った。振り返る。アヤたんが廊下の向こう側から夢遊病歩きで近づいてくる。

「どうしたの？」

「トイレに行きまーす」

すれちがいざまそづ言つて、ふらふらしながらトイレに消えた。見えなくなるまで背中を見守る。便器に落ちなきやいいけど。

「まだ洗い終わらないのか。いいかげんにしろ」ボリースが体をくねさせて尾ひれをぴしゃりとした。「まったく、ひどい仕打ちだ。こんな扱いには耐えられない」

「まるで拷問よ。食事も『えられず』」ナターシャはハッと息をのんだ。「これって拷問じゃない？」

「そうだ。きっとそうだ。われわれから力づくで情報を引き出やつと」

「水槽を洗つてるだけなんだけど」

「これは人権侵害よ！」

「金魚だけどな！」ボリースはのたうつて体を反転させた。

「わかつてゐる？ 国際問題に発展するのよ？ アムネスティ・インター・ナショナルが

「

アヤたんがトイレから出てきた。「トイレに行つてきましたー

薄らぼんやりしたセリフを残し、すれすがづ。わたしは急いで声をかけた。

「ねえ、教室に水槽を運ぶの手伝つてくれない？」

「やつぱりだ！ 捷徑する氣なんだ！」ボリースが他の生徒に向かつて叫んだ。「おい、そこのジーニー・ブシュカ マドモアゼルなんでもいいや。助けてくれ！」

まるで拷問してほしいみたいな言いぶりだ。そこまで言つならしてみようかと思つたけど、生き物を粗末にするべからずといつ母の教えが身に染みついてるのでそんなことはできなかつた。

「あー」アヤたんが立ち止まつた。のろりと振り向く。「こ、こ、こ

アヤたんは相変わらず生気が感じられない。ほんとビビリしかやつたんだろうか。それとも以前のアヤたんが異常でいまのがふつうなのかもしれない。思えばまだ知り合つて一ヶ月弱。わたしはアヤたんのことを情報通のレズつ子という以外ほとんどなにも知らない。

「あのわ、はやくしてくれる？ 授業がはじまるから

あまりに素つ氣ない口ぶりに、わたしはドキリとした。こっちがほんとうのアヤたんだとしても、昔のほうが一千五百倍も好きだつた。向こう二年間むしゃぶりつかれつづけてもいいからもとに戻つてほしー。

水槽に水を入れながら、ロシア金魚どもを見下ろす。わたしの決意に満ちた感じのまなざしに気づいたのか、ボリースがぎくじと身を縮ませた。

「な、なにを」

「水槽に戻してほしかつたら、情報を教えて」

「それでは約束が！」ナターシャが必死な様子で呼びかける。「じやあおいしいお弁当は

」

「田澤によると、今日はシャシリク丼なんだつて。ロシアの鉄人のオリジナル創作料理。和と露の「ラボレーショん」つてわけ。もつすぐお弁当が届くはず」

「じゃあ　じゃあ、お弁当はどうするつもりだ？　捨てるのか？　せつかくつくつたのに？　そんなもつたいないことをしたら

「みんなでおいしくいただくから」

ナターシャは意識を失つたようにぐつたりと横たわつている。わたしは心を鬼にして残忍な笑みを浮かべ、告げた。「心配しないで。みんなでおいしくいただくから」

ボリースは顔を持ち上げ、背びれをむしられたように田を見開いた。そしてゆつぐりと相方のとなりに横たわつた。

「わかつた。情報を話すよ。だから水槽に  
せめて彼女だけでも」

気づくとアヤたんが手洗い場の縁をつかみ、上体をぐーっと折り曲げて金魚どもをのぞきこんでいた。縁口に来た小学生みたいに無邪気な笑みを浮かべている。

「おいしそう」

水槽に戻してくれ。

## 50話 マチ子さん、金魚権侵害。（後書き）

なんともバカな話です。まあ順調といえば順調。次回作のためにも筋力を衰えさせないよう、書きつけたいと思います。

## 5-1話 むりやりバレンタイン・デイ

金魚二匹は生命の灯火が消えかけていた。目のまわりは紫色に腫れていたし唇が切れて血が流れていたし体じゅうに拷問の痕のような火ぶくれができていたんだけど、もちろん痛めつけるようなことをした覚えはない。ただごはんをあげなかつただけだ。

わたしは金魚を水槽ごと教室の後ろに置き、しゃがみこんだ。なんの科目だか忘れたけど次の授業まで時間がない。せいぜい一分四十秒といったところだろう。

「はやくして」わたしは催促した。「まともに授業を受けたいの」

「高校生の言葉とは思えないな」うう、ボリースは洗つたばかりのぴかぴかの水槽に横たわりながら、自分で勝手につけた傷を痛がつた。「その前に ひとつ教えてくれ

「なに？」

「なぜ秘密の情報を知りたい？」

「秘密だから」

「それはもつともな答えた」神妙にうなづく。と、急にかぶりを振つた。「そうじゃなくて。聞いてどうするつもりだ？ われわれをこんなひどい目に遭わせて、力づくで聞き出さうとする理由はなんだ？」

「拷問なんかしてないんだけど」

「地獄に 墮ちろ！」

ナターシャが最後の力を振り絞った感じで言った。もういいかげんしてくれ。

「高校の大きいなる秘密だ 知つてどうする？ おまえが学校を改革するのか。ひとりフェースブック革命を起こすつもりか。ん？なんのために？ そして日本人女子高校生にそんなガツツがあるのか。なにか行動を起こすといつても、せいぜい手づくりチョコで大失敗するのが関の山だろう」

「本命チョコはだれにあげるつもりなの？」 気絶したはずのナターシャが軽い調子で聞いてきた。「やつぱり あの子？」

「あの子って 」 と言いかけ、わたしはぶんぶん頭を振った。「いいから教えて。関係ないでしょ」

流れで金魚を尋問し、ちっちゃな脳みそにある極秘情報を引き出そうとしているわたしだったけど、実際のところ、こいつらの言うとおりだった。わたしはなにをしようとしているんだろう。わたしになにができる？ もちろん、学校に変人育成教育をやめさせ、ふつうの高等学校に変革し、わたしを含めたヘンテコ能力の持ち主の全変人生徒をまともな人間として世に送り出すようにするのだ。わたしひとりで。

そんなこと、できるはずないじゃないか。手づくりチョコで大失敗すらできないうつていうのに。

キンコンカンコン。授業開始のチャイムがスピーカーから聞こえ

てきた。と、だれかがわたしのかたわらにスッとしゃがみこんだ。

「ひとりじゃないよ」アヤたんだ。静かな決意がみなぎるっぽい口調で静かにつづける。「フェースブックでもないけど」

くりくりの目を細め、厳しく金魚を見下ろす。と、背中のほうにだれかが立つて陰をこじらえた。わたしは振り返った。

「おれもいるぞ」しまじろうだった。「学校のみんなを兄ちゃんの一の舞にはさせない。 決して」

「お待たせ!」そこへ田澤が息を切らして駆け込んできた。「弁当持つてきた! 注文どおりのシャシリク丼を一丁」

わたしはみんなを見まわした。なにこれ。仲間がひとつ目の的に向かって大集合しはじめている。なんか都合がよくない?

「そうすべきだと思ったからだ」しまじろうがうなずいた。「おまえをひとりにはさせない。 決して」

しばらく交流しないあいだに、しまじろうは「決して」がお気に入りになっていたようだった。

「その代わり、ひとつ頼みがある」

「なに?」わたしは聞いた。

「チヨンをくれ」

「どうして?」

「バレンタインだからだ。そしておれはこまのところへ、わざわざ田玉が立つていないので。 決して」

「おれも」田澤が手を擧げる。「なんかくれよ。安売りの森永ダースでもいいから」

わたしは田玉をまわしながら脳の中で高速演算を行つた。「いまつて四円でしょ？」

「世の中的にはちがう。今日は一円十三円だ。一千十一年の

それは初耳だ。

「そしてバレンタインの力は田付をも変えることができるのだ。とにかく、義理でもいい。チョコをくれ。女子にチョコをもらえれば、男はなんだつてやるぞ。死さえもいとわない。 決して、決して、決してな」

田澤がうんうんうなずく。わたしは瀕死の金魚を見下ろし、そしてとなりで肩をくつづけてくるアヤたんを見た。この感触、昔のアヤたんだ。暗い顔でうつむき、スカートを押さえながら泣きじみよじつとずつ近づいてくる。

チョコだけに。

「どうして 最近ほんやりした様子でわたしを避けてたよつて見えたのは、もしかして」

「チョコくれないって、聞いたから」さみしそうに泣くやつ。「ほ

かの子にあげるんだって

「そんなこと だれに聞いたの？」

「みんな」

「どのみんな？」

「みんな」

「これではうちがあかない。つまりアヤたんは何者かに、わたしは次のバレンタインで本命チヨコをべつの子に送るつもりなんだよ」と吹き込まれたのだ。

明日がバレンタインデーってこと自体初耳だけど、とにかくわたしはアヤたん復活のきっかけを逃したくなかった。のぞきこんで言う。

「わかった。あげるから」

アヤたんの瞳がふるつと揺らいで、まづざがゆくつと持ち上がりた。

「森永ダースを？」

「うん、ちがう。明治製菓のメルティキッスでも なんなら手づくりでもいいよ。つくれたことないけど」

「それは、本命つけて」と。

「それは」右脳と左脳がまっぷたつに分かれそうになつた。どつちの脳を取るべきか。わたしもそろそろ生き方を決める必要があるのかもしれない。「そつだよ」

「ほんと?」

「ほんと」

まつげがさらさらと持ち上がり、アヤたんEYEが全開になつた。ぱちぱちさせてわたしを真つ正面から見つめ、心の底からうれしそうにうつむいた。

「やつたー！」

いきなりマシ・オカばりの甲高い声を上げてバンザイし、わたしにがばつと抱きついてきた。耳もとでわわわく。

「まだ告白はしないよ。それは一年生の夏の『だい』とだもん。だけどこのイベントがないとフラグが立たなくて」

「その言い方はやめて」

「わかつた。あたしたち生身の人間だもんね。スクリプトで決められた人生を歩んでいるわけじゃないんだ。でも――」

「でも?」

「やつたー！」

やれやれ。わたしはほっぺたをぐりぐり肩にしづつ下へくるア

やたんをそつとひつペがした。チョコをもらえないうてだけなのに  
どんだけの落ち込みようなんだと思ひなび、とにかくもとに戻つた  
よつだ。

「義理でもいいんだ。明らかにダイソーで買つてきましたみたいな  
板チョコでもかまわない。かまわないんだ」

しまじりつはさつきから茜しげにひといじとをつぶやいている。  
田澤は重箱のシャクリク丼を開け、金魚どもを搾りました。

「弁当、じつやつて食わせんの？」

といつわけで、わたしは思い知らされた。十五年のあいだ、わたし  
はバレンタインなんてお菓子メーカーがでつち上げたくだらない  
イベントだと思い込んでいた。もちろん母も同じ。だけどもそうで  
はなかつたらしい。チョコレートの力　#10とて偉大だ。

そしてわたしたちはついに、金魚どもから母校の秘密を聞き出した。  
た。驚愕の内容だった。

## 5-1話 むりやりバレンタイン・デイ（後書き）

数話前のメルティキッスが伏線としてつながっていました。これも偉大なる聖バレンタインのおかげか？　いや、お菓子メーカーのおかげでしょう。

## 52話 大人をいやがらせる方法 夕食中にアニメを見る

「復讐だ」ボリースが言った。

「復讐?」アヤたんが言った。

「そつちの序じやない。ヴァンジョンスのほう

「ロシア語だとなんていうの?」

ボリースは無視してつづけた。「やつらは子供に復讐したがっている。子供というのは文字どおりの意味じやない。子供的なものという意味だ。つまり純真さとか、そんなようなものを憎んで」

「あたしたち純真じやないよ」アヤたんが遮り、あつせりと言った。

「そうだ。けつこう汚れてるや」しまじりつもつなずいた。

「ならばこれではどうだ?」この学区内では来年から千葉テレビが受信できなくなる

「うう」田澤が反応した。「つづつつまり、千葉テレビで放映される一連のアニメは来年からもう

「やうだ。おまえは来年から民放のキー局とHKKに頼るしかなくなるのだ。死んだも同然だわ? おまえの中のなにかが弾けただる? それが狙いなのだ」

「たしかに」

田澤は肩を落としてうつむいた。もつ子供心の半分くらいは死んでしまつているようだった。

だけど、わたしは手を挙げた。

「はい、マチ子さん」と金魚。

「わたし、アニメ見たことないんだけど」答える。「興味もない」とまで言つた。

「あたしも。興味があるのはマチ子さんだけ」アヤたんが余計なことをついた。

「おれは少年ジャンプを買ったことがない」としまじり。「借りて読むだけだ。それにおれはもう少年じゃないしな」

ロシシア金魚は意外といつた顔でわたしたちを見まわした。「そつなの?」

金魚うなずく(田澤はうなだれてつづけている)。

「しかしあれわれの情報では

「

「そつないとか

しまじりが訳知り顔でうなずいた。みんなイラッと来たのか理由をたずねようとしたなかつたけど、しまじりは勝手につづけた。

「大人はみんなわかってくれないんだ」

「は？」わたしが聞いた。

「だから、大人は子供心がわかつてないんだ。いつの時代もな。中学生高校生は全員が全員アニメやゲームに興味があるとかんちがいしているんだ」

「そり、われわれが伝えたいのはまさにそこなのだ。もし先生方の陰謀を阻止するつもりならば、だが――」

「うしろのおまえらー。席に着けー」

新しく赴任した数学の小松原先生が変声期を迎えるに大人になつたみたいな甲高い声を響かせた。だけど小松原先生は大学出たての一十三歳だったのでわたしたちは無視することにした。

「どうなんだ？ 情報は活用しなければなんの意味もない。おまえらは」「十一世紀が丘高校を変革するつもりはあるのか？」

「えーと」みなが押し黙る中、アヤたんが先陣を切つた。真顔でたずねる。「少し待つてもらえない？」

「どのくらーだ」

「千葉テレビが映らなくなるまで――」

と言つていきなり笑顔になり、じつにうれしそうに田澤のすねを蹴り上げた。冗談かい。そしてすでに死んでいる田澤はなんの反応も見せなかつた。

「金はどのくらいかかる？ うちは家計が厳しいんだ。わかるだろ

「うへ」

と叫びしまじかに、アヤたんがテンション高めに拳を振り上げる。

「兄を動かせろーー 炭鉱にでも放り込んでーー」

「つづけてもいいか」ボリースが神妙に言つた。「ナターシャが低酸素脳症を起こしかけている。できればひやつひやと話して医者に診せたい」

「どうだ」

「もしおまえらにその氣があるのなら、行川と接触しろ。おまえらに必要なアイテムとかガジェットとかを『えてくれる』▽

「行川先生?」

「いまはもう先生ではない。ただの受刑者だ」

そう、あの元セクハラ数学教師はひと月ほど前に放火未遂で警察に逮捕・拘留されたんだつた。あのときの光景がフラッシュバックする。個人的には現時点でいちばん接触したくない大人だつた。

ボリースは血中の酸素濃度が低下しているナターシャをヒレで優しくなでた。

「ガジェット 子供がひと目見ただけでわくわくし、装備したくなるようなやつだ。たまに防御力が下がつたり呪われたりとかしたりもするが、連中に対抗するためになにがなんでも必要なのだ。な

ぜなら大人がもつとも忌み嫌うのが子供心であり、夕食にアニメを垂れ流すことであり、くだらない魔法のコンパクトであり、そんなもんつけて外を歩くなよ恥ずかしいといつライダーの変身ベルトであり

」

「なんでなんだよ？」田澤が半泣きしながらいきなり叫んだ。「なんでなんだ！」

「なぜあの男が鍵なのか。やつの行動を見ただろう？　まるで抑制の効かない子供だった。教え子の前で授業中にタバコを吸つたり、公然とセクハラしたり　　まともな大人はそんなことはしない。昼はじつと堪え忍び、家に帰つてから盗撮系AVの無料動画をかき集めながら溶岩流のごとく欲望を吹き出させる　これが良識ある大人であり、教師なのだ。行川は味方だ。われわれを信じろ」

「やつじやねーよ！　なんで千葉テレビが　　」

田澤はしつこく泣き出した。そつちかい。みなまでつづけられず、ひとりとぼとぼと席へ戻つた。意味不明のつぶやきが聞こえてくる。

「禁書　　おれのインスピレーションが　　これはゾンビですか

」

しまじろうが後を追つた。立ち止まり、ぐるりと振り向く。「やつは知らない。このへんはテレ玉も受信できることを　　」

相棒の肩をたたきつつ吉報を伝えている。女ふたりは取り残され、顔を見合わせながら答えに窮していた。どうする？　どうする？　どうする？　どう　。

べつに窮する必要もないような気もするけど。

「うひー！ 町田にもひひとり、席に戻れ！ 戻らないと」 経験が少ない小松原先生は口ひもつた。「つまりその 教師としてぼくがおまえらになにをさせるかと云つと

「小松原先生は『社会人として覚悟ができるではない』 という能力を持つてゐるの」

アヤたんが言つた。解説を聞くのはなんだか久しぶりだ。

「どうでもいい能力じゃない？」

「うんにゃ。そんな」とはない。経験が少ないというのは、裏を返せば突拍子もないものが飛び出してくるつてこと。予測不可能のパルプンテ

「パルプンテ？」

「ふうだけならいいんじやない？ なめなめ

「イヤだ」わたしは率直に言つた。

「べつにいいじゃん。壇の向こうだし。あたしたちもどうせヒマだし、見たいアーメもないしね」アヤたんがわたしに絡みついてきた。「今日の放課後、行ってみよ？」 刑務所つてデータースポットとしてはどうかと思つけど、とりあえずあたしたちの仲はどこでだって進展しまくるわけで

「わかつた」

わたしは金魚とアヤたん両方に答えた。また元気を失われても困るし。留置場でなにかが起こらないわけはないんだけど、とにかく万端準備していけばなんとかなる ならないか、やっぱり。とにかくわたしとしてはまともに授業を受けたい。 「行く」

わたしたちが席に戻りかけると、ボリースが声をかけてきた。

「町田マチ子。田を見開け。そして見えないものに集中するのだ

」

メンターのように厳かにのたまつた。わたしは振り返り、雰囲気を壊さないよう神妙にうなづく。

「それと先ほどからナターシャの意識がない。救急車を呼んでくれないか。頼む」

52話 大人をいやがらせる方法 夕食中にアニメを見る（後書き）

判決下るのはやすぎですが、気にしないでください。一月十四日に  
飛んだんだしね！

## 53話 なめなめ先生の眞実

ロシア金魚に教えてもらつた住所をもとに、放課後わたしと「アヤたんは松戸アルカラズ刑務所に向かつた。ちなみに名前の由来は「ハクをつけたかつたから」ということで、アルカラズとは縁もゆかりもないらしい。その証拠に、刑務所は常磐線松戸駅からバスで二十分のところにあつた。

刑務所に來たのははじめてだつた。親類に受刑者はいないし、お笑い芸人でもないので慰問にやつてきたこともない。映画やなんかで見たとおり、高い塀に囲まれていた。「塀の中」という言いまわしをあらためて実感する。

わたしはチヨコレートが山盛りのバッグを抱え直した。差し入れだ。

「なめなめ更生したかなー」

アヤたんがのんきに言いながら塀を見上げている。单なる好奇心から塀をよじ登ろうとしたところを刑務所の職員に止められた。

「こりらう。どうして塀によじ登つて中に入ろうとするんだ」

「そこに塀があるからさ」アヤたんは怒られているのにまだ必死な様子で塀にしがみついている。「塀は乗り越えるためにある」

「なるほど、たしかにそのとおりだ。だがもつと簡単確実に入る方法があるぞ。知りたいか?」

けつこう「冗談がつづじるおじさんだ。入り口で事情を説明し、いざ刑務所内へ。思わず婆婆を振り返る。通りをはさんだ向こうに規模は小さいが同じような施設があった。学校でいうところの校庭に大勢の男子が整列している。青少年用の更生施設だらうか。

「ちがうつよ。あれは職業訓練学校」職員のおじさんが答えた。「近くにあるとなにかと便利だからさ」

わたしはうなずいた。建物内に入る。めつたにない経験なので歩きながら思わず廊下を見まわしたが、脱出ルートを探していると誤解されるかもしないので自重することにした。アヤさんは壁をべたべた叩きながらわたしの前を歩き、ダクトの入り口っぽい天井の網を見つけるたびに「あれあれ、あそこから脱獄するんだよ!」などと言つては興奮していた。

職員のおじさんは困った顔で振り返った。

「 で、だれに会いに来たの? わかれた旦那とか?」

「えーと 」わたしは口ごもった。面会を求めただけで放火の共犯になつたりはしないだろうか。「わたしたちの学校のもと教師で

「

「なめなめ」

おじさんはアヤさんを見た。「なめなめ?」

「行川先生です」わたしがフォローする。「もと、先生」

「行川 」とつぶやき、おじさんはこれ以上は不可能なほど顔を

囁らせた。不安げな顔でわたしを見てから正面に向き直り、ひとり言のように言った。「厄介なことにならなきやいいが

面会の受付をする。」二〇〇の受刑者は人気があるらしい、順番待ちに一十分待たされた。

「町田マチナカーン。二番の受付」

銀行とまちがえそうな軽い調子で名前を呼ばれ、あわててイスから立ち上がる。と、わたしのひとつ前に受付をしたふたり組の男性が振り返り、一いちに顔を向けた。

同時に驚く。

「あー、しまじろうだー」アヤたんが上野動物園の「ココロコロ」でもするよつこじまじろうを指さした。「そして田澤も」

「どうしたの?」わたしがたずねた。

「入所するの?」アヤたんが同じトーンでつづいた。

「おまえらはどうして

お互に事情を説明し合ひ。

「やうか。おれも面会に来たんだ。行川先生に

「もう先生じゃないよ

「行川受刑者に」アヤたんのシツ「ハラしまじろう」が言いついた。

悩ましげにつづける。「もちろん、金魚の話を聞いたからだ。おまえらと同じく。だがおれたちは『アートではない』

「こっしょに行こうって言えばいいのに」とわたし。

「それに 個人的にもお世話になっているから」

「個人的？」

「個人的 -？」

「ぜんぜん似てないけどアヤたんがわたしの口まねをした。しまじろうはかろうじてうなずいた。なにかわけありのようだ。

わけありだった。わたしたちは受付に学生証を見せ、申込書に記入し、しまじろうたちといっしょに面会室に向かった。付き添いの係員の後を追う。

しまじろうは話す。

「行川先生は、あんな感じでやさぐれた雰囲気を醸し出してはいたが、あれはポーズだつたんだ。他の先生に勘づかれないとめにな。先生は秘密裏に卒業生を支援していた」

「それは お兄さん?」わたしはたずねた。

「そうだ。変人として世に送り出され、職にも就けず、経済的に恵まれない卒業生 行川先生は密かに救いの手を差し伸べていたんだ。知らなかつただろう?」

「じやなきやしまじろう家が生きていけるわけないじゅん」田澤が軽い調子で言った。「犬まで飼つてんのこさ。おまえらがな言わないとぐれつて、ここつから足止めを食つてたんだよ」

「口止めでしょ」

「それがいまじや差し入れをされる側つてわけねー」アヤさんが不謹慎なジョークを言つた。「板チョコにつぱい持つてきたんだよね、マチ子さん」

「なんとでも言え。おれは先生を信じていい。だが、ずっとおかしいと感じていたんだ。そつだうつ、先生の安月給で卒業生の全員を経済的に支援するなど、できるはずがない。おれはことあるごとに先生にたずねた。『先生、なぜですか？ 教師の安月給でどうしてそこまで？ なにか秘密があるんでしょう？』だが行川先生はなにも答えず、ただ優しげに微笑むだけだった。先生はおれの肩に手を置いて言った。『いいか、島。世の中には知らずにいたほうがいいこともあるんだ』……。金魚の話を聞いたとき、おれはピンと来たんだ。おれは先生から秘密を聞き出すためにやつてきた。そう、きっとなにかの秘密団体に属しているんだ。高校に対してレジスタンス活動を行つていて」

「ウソくせー」とこくん空氣の読めないアヤさんがしまじろうの背中をつづついた。「支援つて、銀行強盗だろーよ、どう考へてもさ

ー

「よし、こじだ

係員が立ち止まつた。面会室の扉を開ける。「一十分だぞ

付き添いの係官が面会室の扉を開けた。大広間だ。鉄格子のはまつた窓から婆婆の夕日が差し込み、白い床をオレンジ色に染めている。わたしたちは一步、足を踏み入れた。

広間のど真ん中に、イスにぽつんにすわり背中を向ける人影があった。

「面会だぞ、行川」

係員が言う。イスの人物は頭を上げた。そしてゆっくりと振り向き、夕日に照らされた横顔を向けた。

「 来たか」

## 53話 なめなめ先生の真実（後書き）

次回からレジスタンス編（予定）。ちなみに刑務所の描写がぼやけているのは、ちゃんと調べていらないからです。

## 54話 なめなめM・D・とふつりじやない高校生たち

わたしは行川を見て、思わずあとじさつた。フラッシュバックに襲われたというのもあるけど、いちばんはその変貌ぶりのせいだつた。十歳は老けて見えた。頭は白髪の割合が多くなり、ほおはこけ、顔の下半分が首もとまで無精ヒゲに覆われている。

行川は大儀そうに上体を折り曲げるよつこじ、体をこぢらに向けた。しばらくうつむいていたあと、田玉をきょりと持ち上げ、それから薄く微笑んだ。

「待つていたぜ。おまえら」

わたしたちひとりひとりをゆつくりと見まわす。最後にわたしを見た。そのまま二十秒ほど凝視されたけど、以前の視姦するような見つめ方ではなかつた。むしろ渋好みなら一瞬で落とされてしまいそうな表情だつた。

そして行川はすべて承知といつ感じでうなずいた。「金魚が

全員がこくじとす。

「いいだらう。だがそのまえに」行川はサッと頭を持ち上げ、係官に冗談めかした口調で話しかけた。「内々の話があるんだ。悪いがちょっとはずしてくれないか

「ダメだ」係官はあつさり断つた。

「あつそう」行川は引き下がつた。わたしたちに向き直る。「とい

うわけだ。おれはあとじまじらへいから出られない。あと二年か五年は「

「先生」「しまじろうが一步進み出た。「おれはお礼を言いにきました。先生の援助がなかつたら、兄はいまじろ死んでいました」

「交通事故でな。そつ、泥酔して車を運転しても、必ず検問にひつかかるとはがきらない。能力があつうと、なかうと。基本的なことだ。だがおまえらにはわかつていな」

「おれ　おれたちは、いつたい何者なんです？　なぜヘンテコなんです？　どうしてそろいもそろつて二十一世紀が丘高校に入学し、変人としての教育を受けて」

勢い込むしまじろうを、行川は手を挙げて制した。しまじろうはおとなしく口をつぐんだ。

あらためてわたしたちを見まわす。

「おまえらはなにをしに来たんだ？」　まさか、母校をまともな高校に変革し、まともな教育を受け、ふつうの女の子に戻りたいなんて言いに来たわけではあるまい？」　行川は顔をしかめてかぶりを振り、大げさに両手を持ち上げた。「まさかな。そんなことはあり得ない。なぜだか当ててみようか？　おまえらは高校生だからだ。ふつうになりたい高校生なんて、聞いたことがない。おまえらは特別だ。才能がある」

「そうだよ」アヤたんが言った。と、首をひねった。「　いや、ちがうか。『そうだよ』ってなにに対してだつけ？　わからね」

「やつだよでいいんだよ」田澤がつゝこんだ。行川を見下ろし、つづける。「つまり、ふつうに戻りたいんですよ。もつたくさんだ厚生大臣宛に送りなきゃ好きな子にまとめてメールする」とすりできないなんて

「

えつ？ わたしはビクリとした。「それって

「だから学校を変革するんだ。力を貸してください」田澤は言い切ったあと、自信なさげにしまじろうを見た。「 でいいんだつけ？」

「それは本氣か？」行川が田澤にぎょろ目を向けた。「それともおまえらは、追い詰められた口曜の晩みたいに発作的になにか大きなことがしたくなつただけなのか？」

「おれは本氣だ」しまじろうがむつりと言つた。「ほかのみんなはわからんが、少なくともバカになれる能力なんて、なんのメリットもない。ありがたくもなんともない」

「あたしも治りたーい」なにも考へていない感じでアヤたんが手を挙げた。

「 町田はどうだ？」

「わたしは

答えよつとして、口<sup>1</sup>もつた。学校を変革する理由、ふつうの女子に戻る理由 入学してからこれまでいろんなわけのわからないうことがあった。理由なんて、考えるまでもない。だったらどうして即答できないんだね？ ふつうに戻りたいはずなのに。ふつう

てすばらしこはざなの。」

行川はせせら笑つよつと鼻を鳴らした。

「そうかそうか。答えられんのも無理はない。おまえはいつもそうだ。なにも見えていないんだ。その能力のとおりにな。自分にはそんな大それたことできるわけないと考えているんだどう? おまえは自分をなにもできぬいふつうの高校一年生だと思い込んでいる。変革のチャンスはこれまでいくらでも転がっていたのに、自分自身でそう思い込もうとしている。『わたし、ふつうなの。なんにもできなーい』とな。だからなんだよ、その能力が身についたのは皮肉なもんだ。そう思わないか、ええ?」

長々としゃべったあと、軽く咳き込んだ。わたしは話の半分も聞いていなかつた。いつものとおり。だけども行川の言葉の核心が頭のどこかにじびりついて離れようとしない。そして例のぼや騒ぎを思い出した。あのときわたしは、消火器を見つけられなかつた。見えなかつたのは本当だ。だけどもし見えていたら? わたしは行動を起こし、消化剤を振りまいて問題を解決しただろうか?

いや、たぶんしなかつただろう。だれかがやつてくれるだらう。そう考へて、なにもしなかつたはずだ。

つまり、なにかが見えないのはそういうことなのか。

見えないのは、見よつとしないから?

「 ああ、謎解きはここまでだ。そんなのはどうだつていい」 あと十分だ、と係官が言った。行川は一瞬うつとおしゃりに田を向け、若干駆け足でつづけた。「あの高校を変えねば済むことだ。そうだ

るの？」

「おのとおつだ。わたしは思った。だけどいつたいどうやって変革するのだ。わたしが言いかけると、しまじろうが先にたずねた。『力を貸してください』

「おれの力を？」この哀れな受刑者になにができるか。いつたいこのおれになにをしてほしいんだ？ 答えてみろ」

「でも先生は？」

わたしが勢い込んで言いかけると、今度はアヤたんに遮られた。せつかくその気になつていてるのに。

「でも先生は、しまじろう家を経済的に援助してるんでしょう？ それどじろか卒業生全員を？」

「組織に属してんですか？」田澤が興味津々にたずねる。「なにかの目的があるんだ。レジスタンス的な。それってたぶん秘密組織とかで？」

行川は答えなかつた。ほんの一瞬、係間に田を向ける。

「ひとりで養えるわけないじゃんか」アヤたんがさらにつつむ。「先生の月収、いくらくらいだったの？」

行川は表情を隠すように振り向き、鉄格子のはまつた窓の外を見やつた。こうしていいあいだにも婆の西田はどんどん薄れ、夜の闇に飲み込まれよつとしている。

「 いずれ答えてやる。知らないほうがいいこともあるんだ。  
いまはまだ、な」

「 一十五万くらい？ 社会保険と厚生年金を差し引くと手取りはだ  
いたい 」

「 いいだろ？ そこまで言つなら力を貸してやる 」

いきなり振り向いて言った。係官に聞かれたくないのは秘密組織の存在なのか教師の安月給なのかよくわからなかつたけど、行川はなにかを決意したように顔を上げ、唇を引き結んだ。そして上体をねじるよつにし、大儀そつに立ち上がりかけた。

と、わたしは気づいた。大義そつなんじゃなくて、行川は脚を悪くしているのだ。

イスの背もたれに寄りかかるよつに立ち上がり、脚をひきずつて壁に立てかけた杖を取る。まるでドクター・ハウスだ。「着いてこい。見せたいものがある」

えつちらあつちら扉に向かう。さりげなく大広間の面会室を出て行こうとした、当たり前のよつに係官のことつ捕まつた。

「 終わりだ」係官が厳格な調子で言った。「行川、来い」

行川は必死な様子でわたしたちを見まわした。「いいか、よく聞け。おれはここで刑期を務めながら、おまえらに指令を出そつ。まづはおれの仲間に会え。やつは傭兵上がりで、いまはトイザラスの店員をしている。作戦に必要なおもしろガジェットを用意してくれるだろ？」「うう

「テレンス・リー？」田澤が言った。

「テレンス・リーはトイザらスの店員じゃないだろ？ 傭兵でもないし」行川は言った。「とにかくやつの助力を請え。そして学校を変革するための作戦を実行する」

「どんな作戦？」わたしはたずねた。ようやく遅らずにたずねることができたのでうれしくて意味もなくもう一度たずねた。「どんな作戦なんですか？」

「町田マチ子。作戦の成功には、おまえの活躍が必要不可欠だぞ。もう逃げるな。見えない、などと言つてな」

係官は乱暴なデータみたいな感じで行川の腕を取った。かなり乱暴にひきずつしていく。と、係官が振り返り、わたしに一瞬目を向けた。ちつちつなやぶにらみの瞳がきらりと光った。

わたしはぞくりとした。なんだいまの感覚は。

「どんな作戦なんだー」アヤさんが元教師の背中に呼びかける。「よけいなこと言いすぎて時間切れなんて、いつもと同じパターンじやんかねー

連行された行川が、まるで夕日のように廊下の角に消えかける。肩越しに振り返り、ひとことだけ言い残した。

「排除するんだ」「

ばたんと扉が閉まった。

## 54話 なめなめM・D・とふりいぢやない高校生たち（後書き）

ちゅうとまじめかわるかなあ（みんな」とはなこ）。あと最近デクター・ハウスを見ているもんで、ヒュー・ローリーが頭から離れずつい……。

## 55話 ただしいもの、みえないもの。

受刑者であり指導者である行川との面会が終わり、わたしたちは約一時間ぶりに婆婆の空氣を吸つた。もう田が落ちていた。そろそろ六時のニュースがはじまる時間。

鉄格子めいた正門の扉が背後でがちゃんと閉まる。駅に向かって通りを歩き出し、ふと全員が示し合わせたよつに立ち止まつた。

「トイザらス」「田澤が言つた。

「おれは行くぞ。自らの手で運命を変えるんだ」

「行きたくないなんて言つてねー。おれが言いたかったのは、つま  
り」

「トイザらスつて、どこの?」「アヤさんが引き継いだ。「北は北海  
道、南は九州沖縄まで」

アヤさんの言つとおりだつた。

「金店舗探せばいいだろ」「しまじろうはかたくなだつた。完全に  
行川を心酔してこる。「いまからかたっぱしに電話をかけるぞ」

「もしもーし」「アヤさんが冷やかすように電話の真似つこをする。  
「ちよつと聞きたいんですけどー、そひひひ」「

「こまゆー?」ぎゅるりと目を動かし、しまじりつを見た。「だれを電話口に呼び出すんだって話だよ」

アヤたんつてまじめになれば意外と賢いのかもしれない。じつはわたしもそれに気づいていた。その仲間つていうのはびいのだれなんだって話。

「それは

「あー腹減った。カレー食いにいかねえ?」状況が行き詰まりを見せているので田澤はあからさまになかったことにしようとしていた。「おれがつくつてもいいよ。三十一倍激辛のやつ。あ、やうだ。インド風なんて食いたくな? インドよくね?」

「よくねえ」しまじりつがむりむりと返す。そして拳を握った。「おれは 今回の作戦で先生に恩返しがしたい。命を懸けてもいいと思つてこる。おまえらだつてそういうだろ?」

正直そつではなかつた。だけど。

『氣づくとしまじりうが尋常じゃない様子でわたしをじっと見つめていた。田を大きく見開き、絶命寸前といつた感じだ。

「やうだ、町田なら

「は? わたし?」

「おまえは『は?』とか『え?』とか『わたし?』とかしか言えないのか。もつと長いセリフをしゃべつたらどうなんだ、え?」しまじりうはわたしの核となるパーソナリティに半ギレしたあと、理由

を説明した。「正確にはおまえとこいつ、おまえの能力だ。それでトイザらスの店員を見つけ出せる」

「でも、どうやって?」アヤたんがわたしの物真似でたずねた。しつこじみだがまつたく似ていない。「ワタシガ?」

しまじみははうなずき、熱っぽくわたしたちを見まわした。「だれか、地図を持つてないか?」

「アイデアはこりだつた。」

「町田に地図を トイザらスの店舗一覧を見せるんだ。インターネットとかで」

「いんたーねつとー」

田澤が吹き出した。「わすがはーモード童貞」

しまじみははうりと親友をにらんだ。おまえは真性だろ?とまなぞしが語つていた。

「いんたーねつとー、いんたーねつとー。」田澤は脳の回路が小学生レベルにまで落ち込んでいる。いきなり泣く声で言つた。「すみません、いんたーねつとがほしいんですが」

「あ、そうこいつ」と、わたしがべつにひらめきもしなかつたけど、男の怒りが爆発する前にとりあえずうつ言つてみた。すると不思議なことにしまじみの意図したところが理解できた。

「つまり、わたしに見えない店舗が正しことこいつとね

「それは　いや、すまん。やつこつことだ」顔を赤黒くして息を吹き出し、怒りを無理やり抑えこむように言つた。「じゃあ、やつそく行動開始だな。インターネットを見よ。このくんだとどくじで見られる?」

「ということで、一行はわたしの家に大集合した。もつと正確に言うと、わたしの部屋だ。たしかにインターネットは見放題だし部屋代を取るつもりもないけど、なんでわたしの家に?」

「友達、だからじやない?」アヤたんが思わせぶりな調子でささやいた。

とにかく一気に五人に侵入されたのははじめてだ。六畳一間のわたりの部屋はとたんに息苦しくなつた。

「ねーちゃん、これ友達? 友達できたんだ? あ、ぞーす。なにやつてんすか? いや、なんでもないつす! ただねーちゃんが男連れてくるのつてすげーレアだなーと思つて」

ちなみに五人目は弟だった。受験生はヒマなのだ。

わたしは机にすわり、ギヤラリーを背にノートパソコンを開いた。起動するといいーんと音が鳴り、しまじろうが息をのんだ。はじめて火を見た原始人みたいだ。

トイザらスの店舗案内をクリックし、水色の日本地図を表示される。

「どう、見えない?」

アヤたんが画面をのぞきこみ、ついでにしまつぺたをくつけてきた。

「こいつたこどつこつ仕組みでこんな小さな箱に」「しまじりつはまだ困惑している。

わたしは凝視した。日本全国の都道府県を北から順に確認していく。「あ

「どうした?」田澤が言った。どうでもいいが机の上にケツを乗せないでほしい。「見えたか?」

その逆だった。「千葉県がない」

「よし、クリックしや」

しまじりつが覚え立ての単語で指示する。わたしはなんにもない部分をクリックした。するとページが遷移し、千葉県の店舗一覧が表示された。スクロールしていく。一ヵ所、妙に不自然な空白があった。マウスを操作してそのあたりにカーソルを持っていき、かちかち左のボタンを押してみる。

「ええいらへんになにかがある?」

「柏店か」としまじりつ。

「駅からだいぶ遠いぞ」と田澤。

「電話番号は04」「アヤたんが電話番号を読み上げた。」

だよ

そして全員で言った。「すいご、話が進展している。」

「 なんの話すか?」ひとり取り残された弟がきょとぎょして言った。「トイザらスににかかるんすか? つーかねーちゃん、そろそろ飯だぞ」

わざわざ電話をかける。「もしもし? ちょっと聞きたいんですけど」

「はいなんじょう?」店員ひじいお姉さんが答えた。

「あの ちょっと待ってください」

アヤたんがわざわざからへつこてきて話しぐらいたらない。手のひらで顔面をつかんで無理やりひっぺがした。

「 どうかしました?」

「いいえ。あの、そひらじいえ、とある店員さんを探していりんですけど」

「話しぐれだな」

田澤がつぶやいた。わたしは携帯電話に手を当てて振り返り、锐くわざやいた。「名前知らない! なんて聞けばいいの?」

「頭を働かせる。元傭兵の店員はいますか? とたずねるんだ」

電話が苦手なわたしあくこ考えもせずつながら、しほじりつて言われたとおりたずねてみた。

店員のお姉さんが口<sup>1</sup>もつた。 「 傭兵、ですか？」

「元、傭兵です」

「よく言つた」田澤は完全におもじりがつてこる。

「傭兵と言われましても 「 当たり前すぎるがかなり困った口調だつた。 「過去にどの戦闘に参加したかがわかりませんと答えようがないのですが」

「戦闘？」まるでトイザらス柏店には元傭兵が複数人いるみたいな話しぶりだ。わたしはふたたび受話器を耳から離す。 「どの戦闘かだつて！」

「町田はまだと思ひつ」

すっかりチーモリーダー気取りのしほじりつが静かに口<sup>1</sup>もつた。 「 おまえが見えない地域だ。おまえにとつて戦闘がなさそうな地域とはど<sup>1</sup>だ？」

「それひじりつ」

「なんでもいいから言つてみる」

わたしは深呼吸し、携帯電話を耳に押し当した。 「戦歴ですか」

「ええ。 それとできましたらその戦闘によって国際社会<sup>1</sup>のよつ

な影響を及ぼしたかも付け加えていただけだと　　」

まるで社会のテストだ。わたしは頭の中に白地図を思い浮かべた。そして個人的に戦闘がなさそうな平和な地域を探してみた。

アメリカとアラブ諸国とバルカン半島が一瞬にして消えた。

「えーと　」これ以上ひきのばすと電話を切られてしまいそうだ。わたしは最初にひらめいた地域を言った。「キリバス共和国！」

しばらく応答がなかつた。「もしもし？」

「キリバス、ですか？」

「ちがつてました？　ちょっと待つてください、もう一度考えてみますから　」

「少々お待ちください」

お姉さんはそう言い、電話を保留にした。ミスチルらしい保留の音楽が延々ループする。

「ねーちゃん、飯だぜ」弟が肩をつづいた。「また母に怒られつぞ」曲は四回ループしたあと、サビの直前で唐突に切れた。男性の声が元気よく応答した。

「お電話代わりました、ジェフリー本間ですが」

55話 たましいものば、みえないもの。 (後書き)

なんかキャラクターが勝手に遊んでくれるよくなりました。いいことだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9345p/>

---

マチ子さん、見えない。

2011年8月31日19時37分発行